

日本橋

泉鏡花

青空文庫

篠蟹 檜木笠 銀貨入 手に手 露地の細路 柳に銀の舞扇
 河童御殿 榮螺と蛤 おなじく妻 横槩賦詩 羆の筒袖
 縁日がいり サの字千鳥 梅ヶ枝の手水鉢 口紅 一重桜
 伐木丁々 空蟬 彩ある雲 鴛鴦 生理学教室 美拳 怨霊比羅
 一口か一挺か 艸冠 河岸の浦島 頭を釘 露霜
 彗星 綺麗な花 振向く処を あわせかがみ 振袖

篠蟹

一

「お客に舐めさせるんだとよ。」

「何を。」

「その飴をよ。」

腕白ものの十ウ九ツ、十一二なのを頭に七八人。春の日永に生欠伸で鼻の下を伸している、四辻の飴屋の前に、押競饅頭で集った。手に手に紅だの、萌黄だの、紫だの、彩った螺貝の独楽。日本橋に手の届く、通一つの裏町ながら、撒水の跡も夢のように白く乾いて、薄い陽炎の立つ長閑さに、彩色した貝は一枚々々、甘い蜂、香しき蝶になつて舞いそうなのに、ブンブンと唸るは虻よ、口々に喧しい。

この声に、清らかな耳許、果敢なげな胸のあたりを飛廻られて、日向に悩む花がある。盛の牡丹の妙齡ながら、島田鬻の縫れに影が映す……肩揚を除ったばかりらしい、姿

も大柄に見えるほど、荒い紺かすりの、いささか身幅も広いのに、黒縹くろじゆす子の襟の掛つた縹御しまおめ召しの一枚着、友染ゆうぜんの前垂まえだれ、同一おんなじで青い帯。緋鹿子ひがのこの背負しよいあげ上しした、それしやと見えるが仇気あしけない娘風俗ふうう、つい近所か、日傘も翳ささず、可愛い素足ひがのこに台所穿ぼきを引掛けたのが、紅と浅黄あしやうで羽を彩る飴あめの鳥と、打切ぶつきり飴の紙袋しづきを両の手に、お馴染なじみの親仁おやしの店。有りはしないが暖簾のれんを潜くぐりそうにして出た処ところを、捌さばいた袴つまも淀むまで、むらむらとその腕白うでしろ共に寄つて集たかられたものである。

「煮てかい、焼いてかい。」

「何、口からよ。」

と、老成ませた事を云つて、中でも矮小ちびが、鼻まで届きそうな舌うわなめを上舐なにべろんと行やる、こいつが一芸。

「まあ、可笑おかしい。」

若い妓こは、優しく伏目に莞爾にっこりして、

「お客様おきゃくさまが飴あめなんか。大概御酒ごしゆをあがるんですもので。」
で、ちよつと紙袋しづきを袖で抱く。

「それだつてよ、それでもよ、髻ひげへ押着おっつけやがるじゃねえか。」

「不見手様。^{みずてんさん}」とまた矮小が、舌をべろんと舐す。^{ひるがえ}

若い妓は柔し^{おとな}かった。むつともしそうな頬はなお細^{おと}つて見えて、

「あら、大^{おおき}な声をするもんじやないことよ。」

「だって、看板に掛けてやが^{つて}。」と一人が前を遮る^{たぐり}るように、独楽の手繰^{たぐり}をずるりと伸す。

「違^{ちが}つたか。雪や氷、冷^{おべた}い氷よ。そら水の上に、^{チヨン}なんだ。」

「不見手様。」と矮小が頤^{あご}でしゃくる。

「矮小やい、舌を出せ。」

「出せよ、畜生。」

「ううん、ううん、そう号令を掛けちや出せやしませんさ。」

と焦^{あせ}つて頭^{あたま}突^つきに首を振る。

「馬鹿、咽喉^{のど}ぼとけを掴^{つか}んでいやがる。」

「ほほほ。」と、罪の無い皓齒^{しろは}の蒼^{つほみ}。

「畜生、笑つたな、不見手。」

と矮小は、ぐいと腕^{まく}を捲^{まく}つた。

「可厭、また……大な声をして。」

「大な声がどうしたんでえ。」

と、一人の兄哥さん、六代目の仮声さ。

二

その若い妓は、可愛い人形を抱くように、胸へ折った片袖で、面を蔽う姿して、堪忍して下さいな。」

と遣瀬なさそうに悄れて云う。

「やあ、謝罪るぜ、ぐうたらやい。」

「不見手よりか 心 太だい。」

またしてもこの高声、はつとしたりらしく袖を翳して、若い妓は隠れたそうに、

「内証なのよ、ねえ、後生よ。姉さんに聞えると腹を立ちますわ。」

「何を云ってやんでえ。」

「分るもんか。」

矮小が抜からず、べろん、と出して、

「お前（とこ）許の姉さんは、町内の狂人（きちがい）じゃねえかよ。」

「其奴（そいつ）も怪しいんだぜ、お夥間（なかも）だい。」

と背後（うしろ）から喚（わめ）くと、間近に、（何。）とか云う鮎屋（すしや）の露地口。鼬（いたち）のようにちよろりと出

た同一腕白（おなじ）。下心あつて、用意の為に引込んでいたらしい。芥溜（ごみため）を探したか、皿（さじら）から浚

ったか、笹（さ）葉一束、棒切の尖（さき）へ独樂（ひとりごと）なわで引括（ひっくく）った間に合せの小道具を、さあ来い、

と云う身で構えて、駆寄ると、若い妓の島田の上へ突着けた、ばさばさばツさり。

が、黙つて、何にも言わないで、若い妓は俯向（うつむ）いて歩行（ある）き出す。

頸摺（うなじず）れに、突着け、突掛（つつか）け、

「やあ、おいらんの道中々々！」

「大高、旨（うま）いぞ。」と一人が囃（はや）す。

「おつと任せの、千崎弥五郎。」

矮小が、心得、抜衣紋（ぬきえもん）の突袖（つっそで）で、据腰の露払。早速（さそく）に一人が喜助と云う身で、若い

妓の袖（くつ）に附着（くつ）く、前後（あとさき）にずらりと六人、列を造つて練りはじめたので、あわれ、若い妓

の素足の指は、爪（つま）紅（べに）が震えて留まる。

此奴不見手、と笹の葉の旗を立てて、日本橋あたり引廻しの、陽炎揺るる影法師。

日南に蒸れる酢の臭に、葉も花片も萎えんとす。

引切の無い人通りも、およそ途中で立停つて、芸者の形を見物するのは、鰻屋の前に脂気を嗅ぐ、奥州のお婆さんと同じ恥辱だ、という心得から、誰も知らぬ顔で行違う。……もつとも相手は小児である。

世渡やここに一人、飴屋の親仁は変な顔。叱言を、と思う頬辺を窪めて、もぐもぐと呑込んで黙言の、眉毛をもじや。若い妓は気の毒なり、小児たちは常得意。内心痛し、頗る痒しで、皺だらけの手の甲を颯の下で摺つてござった。

「川柳にも有るがね、（黙然と辻斬を見る石地藏。）さね。……俺も弱つたよ。……近い処が、西河岸にござらつしやる、ね、あの、目の前であつたらうずりや、お地藏様はどうお扱いなさりようかと、つくづく思つていましたよ、はい。……」

と後で人にそう云つた。またこの飴屋が、喇叭も吹かず、太鼓をトンとも鳴らさぬかわりに、いつでも広告の比羅がわり、赤い涎掛をしてる名代の菩薩でなお可笑い。

「笹や、笹々笹や笹、笹を買わんせ煤竹を——」

大高うまい、と今呼ばれた、件の（馳みめよし）が、笹をわざと、島田の上で、ばさば

さと振りながら、足踏をして唱出した。

声を揃えて、手拍子で、

「箆を買わんせ煤竹を——」

ここで三音諧張上げる。気障な調子で、

「大高源吾は橋の上ええ。」

檜木笠

三

「あら、お止しなさいよ、そんな唄。大嫌だわ。二階に寝ている姉さんが、病気で疳が立っておいでだから、直ぐに聞きつけて、沢山加減を悪くするからね……ほんとうに嫌なのよ。」

と若い妓は頭を振るように左右を顧る。

「何が嫌だい。」

「生意氣云うない。」

「状さまあ！ 女郎め奴、手前てまえに嫌きらわれて幸さいわいだ。好たかれて堪たまるかいは。」と笹ささを持ったのが、ぐいとその棹さおを小脇こわきに引くと、呀やあ、斜やに構かまえて前に廻まわった。

「嘘うそよ、お前まへさんじゃないのよ。その大高源吾おほたかげんごとか云う、ずんぐりむっくりした人がね、笹ささを担かかいで浪花節ななわぶしで歩あ行るいては、大事だいじな土地ちが汚けがれるつて。……橋はしは台たいなし、堪たまらないつて、姉あねさんが云いうんだわ。」

「知しつてらい！」

と矮小わいせうが、ペロペロと舌しほを吐はいて、

「不ふ断だん、そう云いやがるとよ、可いいか。手前てまえン許とこの狂きやう女めがな、不ふ断だんそう云いやがる事ことを知しつてゐるから、手前てまえだつて尋常ただは通とさないんだぜ。僕わががな、形かたちを窺うかがしてよ、八百屋やちやの小兒こどもに生なれてよ、問者もんじゃになつて知しつてゐるんだ。行軍こうぐん将しょう棊ぎでもな、問者もんじゃは豪えらいぜ、伴ばん内ない阿魔あま。」

商あきゆうじ人ひとはもとより、親おやが会社員かいしゃいんにしろ、巡査じゆんさにしろ、田舎いんげの小倅こせがれでないものが、娘むすめを苛いめる仔細しさいはない。故ゆゑあるかな、スパルタ擬もどきの少年等せうねんらうが、武士道ぶしだうに対する義憤ぎふんなのである。

「忠臣ちゆうしん、義士ぎしの罰ばつが当あたらあ。」

「勿論よ。」

ひよろ竹と云われる瘡やせたのが、きいきいと軋きしむ声で、

「疾とつに罰がが当あつて、氣の違ちがつた奴やつなんか構かわねえや。……此こ奴やつに笹ささ葉つばを頂たかせろ。」

「噫くしやみをさしたれ。」

と、含は羞なんだ若い妓じよの、揃そろつた目鼻まなの真ま中なかを狙ねつて——お螻けらの虫むしが、もじやもじやもじや。

「へつくしよ。」と思おわらず唐だ突しぬけに陽炎やうえんを吸すつて咽むせた……飴屋あめやの地藏ぢざうは堪たまらなそうに鼻なを撫なでる。当あたの狙ねわれた若い妓じよは、はつと顔かほを背そけたので、笹葉ささつばは片かた頬ほ外ほかれに肩かたへすべつて、手てを払はつて、持もつたのを引ひ払はわられて、飴あめの鳥とりはくしやんと潰つぶれる。

「可か哀あ相あに、鶯うすを。」

とついで、衣え紋もんが摺ずつて、白しろい襟えり。髪かみ艶えんやかに中腰ちゆうこになつた処ところを、発は奮ふんで一ひと打うち、ト颯さつと鳥とりの翼よくの影かげ、笹ささを挙あげて引ひ被かぶる。

「ああ、少しば時らく。」

慌あわしく声こゑを掛かけて、白足袋あわただのしよぼけた草鞋わらじで、つかつかと寄よろうとした、が、ふと足を曳ひいて、手甲掛てがまけた手を差伸さしばして、

「もしもし、大高氏、暫時、大高氏。」と大風に声を掛けて呼んだのは、小笠を目深に、墨の法衣。脚絆穿で、むかし傀儡師と云った、被蓋の箱を頸に掛けて、胸へ着けた、扮装は仔細らしいが、山の手の台所でも、よく見掛ける、所化か、勸行か、まやかしか、風体怪しげなる鉢坊主。

形だけでも世棄人、それでこそ、見得も外聞も洒落も構わず、変徹も無く、途中で芸者を見ていらるる。——斜めに向う側の土蔵の白壁に、へまむし、と炭団の欠で楽書をしたごとく、たらず、熟と先刻から見詰めていた。

小笠のふちに、手を掛けながら、

「源吾どの、ちよつと、これへ。……」

四

「そりや、（かな手本。）の御連中、あすこで呼んでいさっしやる。」

潮を踏んだ飴屋は老功。赤い涎掛を荷の正面へ出して、小児の捌口へ水を向ける。

「僕の事かい。」

と猶たぬら予いながら、笹たけざお葉の竹まっすぐ棹つを、素直びんに支いた下に、鬢びんのほつれに手を当てて、おくれを搔かいた若い妓の姿は、願ねがの糸いを掛けた状さまに、七夕うなずらしく美しい。「お前様方あじづえでのうて、忠臣蔵あじづえがどこに有るかな。」と飴屋あじづえは頷うなずくように頤あじづえ杖あじづえを支あじづえいて言あじづえう。

「一所みんなにおいでよ、皆みんな。」

「おい。」

義士にんずの人数にんず、六人の同勢にんずは、羽根にんずのように、ぽんぽんと発奮はげんで出て行く。

坊主にんずは、笠にんずながら会釈にんずして、

「貴殿にんずは大高源吾にんずどの？」

笹にんずを持ったのが、（気にんずを付け。）の姿勢にんずになった。

「ええ、そうです。」

「こなたはな。」

見向にんずかれた、ひよろ竹にんずは、なぜか、ごしごしと天窓あたまを搔あたまいた。

「僕は赤鞆あかさやの安兵衛あかさやてんです。」

「ははあ、堀部うじ氏うじでおいでなさる。」

「千崎弥五郎だよ。」

矮小は唇を、もぐもぐと遣る。

「成程——その他いずれもお揃いでありますな。」

と、六人をずらりと見渡し、

「いや、これは誰方も、はじめまして御意を得ます。」

ここで更めてまた慇懃に挨拶した。小児等はきよとんとする。

中に大高源吾が、笠を覗込んで、前へ屈み、

「坊さんは誰なんです。」

「怜悯だな。何、天晴御会釈。いかさま、御姓名を承りますに、こなたから先へ氏素姓

を申上げぬという作法はありません。しかし御覧の通り、木の端同然のものでありま

すので、別に名告りますほどの苗字とでもありません。愚僧は泉岳寺の味噌摺坊主でござ

る。」

事実元禄義士扱い。で、言葉も時代に、鄭重に、生真面目な応対。小児等は気

を取られて、この味噌摺坊主に、笑うことも忘れて浮りている。

「ええ、さて各自には、すでに御本望をお遂げなされたのでありまするか。それとも、

また今夜にも吉良邸へお討入りに相成りませうかな。」

小児等は同じように顔を合せて、猿眼ざるまなこに、猫の目、上り目、下り目、団栗目どんぐりめ、いろいろなのがばちくるのみ。

自ら名告なのつた味噌摺坊主は、手甲の手の腕組して、

「ははあ、御思考最中と見えますな。いや、何にいたせ、貴方あなたがたを義士の御連中とお見掛け申して、ちと折入つて、お話し申したい事があります。余り端近よっかど。な、ここは余り端近で、それぞれ通りがかりの人目も多い。もそつとこれへ、ちよつと向うへ。あの四角の処まで、手前と御同道が願いたい。」

決して悪いことではありませぬ。さあさあ誰方も。」

と云うより早く、すたすたと通りの方へ。

松屋あたりの、人通ひととお。どつちが（端近。）なのかそれさえ分らず、小児等は魅せられたようになって、ぞろぞろと後に続く。

電車が来る、と物をも言わず、味噌摺坊主は飛乗とびのりに翻然ひらり、と乗つた。で、その小笠をかなぐつて脱いだ時は、早や乗合の中に紛れたのである。——白い火が飛ぶ上野行。——
文明の利器もこう使うと、魔術よりも重宝である。

角店の硝子窓の前に、六個の影が、ぼやりとして、中には総毛立って、震えたのがあった。

銀貨入

五

地に碎けた飴の鳥の鶯には、どこかの手飼の、緋の首玉した小猫が、ちろちろと鐸を鳴らして搦んで転戯れる……

若い妓の、仔細なくそこを離れたのは云うまでもない。

と自から肩の嬌態、引合せた袖をふらふらと、台所穿をはずませながら、傍見らしく顔を横にして、小走りに駆出したが、帰りがけの四辻を、河岸の方へ突切ろうとする角に、自働電話と、一棟火の番小屋とが並んでいる。……

ものも、こう、新旧相競うと、至つて対照が妙で、どうやら辻番附の東西の大関とでも言いそうに見える。電話の方が（塗立注意。）などと来るといよいよ日当りに新味を發揮

するが、油障子に（火の番。）と書いたお定りの屋台は、昼行燈と云う形。屋形船が化けて出て河童が住居う風情がある。註に及ばず、昼間は人氣勢もあるのでない。

その両方の間の、もの蔭に小隠れて、意気人品な黒縮緬、三ツ紋の羽織を撫肩に、縞大島の二枚小袖、襲ねて着てもすらりとした、痩せぎすで脊の高い。油気の無い洗髪。簪の突込み加減も、じれつたいを知った風。一目にそれしやとは見えながら、衣紋つき端正として、薄い胸に品のある、二十七八の婀娜なのが、玉のような頸を伸して、瞳を優しく横顔で、熟と飴屋の方を凝視めたのがある。

「あら、清葉姉さん。」

と可懐しそうに呼掛けて、若い妓はバツタリ留った。

「お千世さん。」

と柳の眉の、面正しく、見迎えてちよつと立直る。片手も細り、色傘を重そうに支いて、片手に白塩瀬に翁格子、薄紫の裏の着いた、銀貨入を持っていた。

若い妓はお千世と言う、それは稲葉家の抱妓である。

「お出掛け、姉さん。どちらへか。」

「いいえ、帰途なの。ちよつと浅草へお参りをしたんです。——今ね、通りがかりに見た

「ただけれど、お前さん、飛んだ目にお逢いだったわね。」

「ええ。」

「でも、可よかつたこと。私ね、見ていてどうしようかしら、と思ったのよ。——お千世さん。」

「は、」

と顔を上げて、甘えたそうに、ぴつたり寄る。

「そして……あの坊さんは知った方。何なの、内かんげへ勸化にでも来たことのある人なの。」

「いいえ、ちつとも知りませんわ。」

「そう。」

「笠かぶを被かぶつておいでなすつて、顔はちつとも見えなかつたんですもの……でも、そうでなくツても、まるツきり、心当りはありませんよ。」

「そうね、それはそうだともね。」

清葉はなぜか落着いて頷うなずいた。

若い妓は、気が入いって口早くちばに、せいせいと呼吸いきをしながら、

「でもね、私、いじめツ児こを、皆引張みんなひっぱつて電車通りの方へ行いつて下くだすつた後姿を見て拝をん

だんですよ。私お地蔵様かと思いました。……ええ。」

六

お千世は、ぱつちりとした目を瞬いて、

「飴屋の小父さんは、鶯が壊れたから、代りを拵こぎえて、そして持って行けゆって云ったんですよ。……私、それどころじゃないんですもの。帰って姉さんにそう云って、あの西河岸のお地蔵様へお参りに行くか、でなけりや、直ぐ、あの、お仏壇へお燈明をあげて拝みましようと思つて駆出して来た処なんですわ。」

「まあ、お千世さん。お前さん、大な態度をして飴おおきななりのかね。私は蜜豆屋かと思つたよ。」と細ほつそりした頬ほに靨えくぼを見せる、笑顔のそれさえ、おっとりして品いが可いい。この姉さんは、渾あだな名を令夫人と云う……十六七、二十の頃はたちまでは、同じ心で、令嬢と云つた。あえて極きまつた旦那にんが一人、おとつさんが附ついている、その意味を諷うするのではない。その間のししょうそくは別として、しかき風采たを称たえたのである。

序ついでにもう一つ通とお名りながあつて、それは横笛である。曰く、清葉、曰く令夫人で可いいもの

を、誰が詮索に及んだか、その住居なる檜物町に、磨込んだ格子戸に、門札打った本姓が（滝口。）はお詔で。むかし読本のいわゆる（名詮自称。）に似た。この人、日本橋に棲を取つて、表看板の諸芸一通恥かしからず心得た中にも、下方に妙を得て、就中、笛は名譽の名取であるから。

「あら……清葉姉さん酷いこと、何ほ私かつて蜜豆を。立つて、往来で。」

「ほほほ、申過しました、御免なさいよ。いえね、実はね、……小児衆が、通せん坊をして、わやわや囁いているから、気になってね、密と様子を見て案じていたの。……あの、もつとこつちへお寄んなさいよ。」

と、令夫人は仲通りの前後を、芝居気の無い娘じみたし方。で、件の番小屋の羽目を、奥の方へ誘い入れつつ、

「別にね、お前さんと話をしているのを見られて悪い事は無いんだけど、人が通つて極りが悪いから。」

で、忍んだ梅ヶ香、ほんのりとする佛……勤めする身の、夏は日向、冬は日陰へ路を譲つて、真中を歩行かぬことと、不断心得た女である。

「もう、あれだわ。誰か竹棹でお前さんの鬘を打とうとした時は、どうしようかと思つて

ねえ。くずしたお宝がちつと有るから、駆出して、あの中へ撒こうかしら、とすんでの事……」

為に銀貨入を手にしたので。

「口で留めたつて、宥めたつて、云うことを利くんじやなし、喧嘩するにも先方は小児だし、と云う中にも、私は意気地が無くつて、そんな気にはなれないし、お宝を撒くに限る。あんな児に限つて、そりやきつと夢中になつて、お前さんの事なんざ落として、お宝を拾うから、とそのお前さん謀、計略？」

と打微笑み、

「そりや、お千世さん、可いけれど、私にや手が出せなかつた。意気地が無くつて自分ながら口惜いのよ。……悪い事をするんじやなし、誰に遠慮が、と思つても、何だかねえ、派手過ぎたようで差出たようで、ぱつとして、ただ恥しくつて、どうにも駆出せなかつたの。」

まあ、極りの悪い。……銀貨入を握つた手が、しつとり汗になりました。」

とその塩瀬より白い指に、汗にはあらず、紅宝玉の指環。点滴るとき情の光を、薄紫の裏に包んだ、内気な人の可懐しさ。

七

清葉は、きれの長い清すずしい目で、その銀貨入の紫を覗のぞいて見つ、

「お前さんの姉さんに聞かせたら、さぞ気が利かないってお笑いだろう。」

「いいえ、姉さん。」

傍目わきめも触ふらず、清葉を凝視みつめて聞いたお千世が、呼吸いきが支つかえたようにこう云った。

「でもね、娑婆しゃば気けだの、洒落しゃれだの、見得だの、なんにもそんな態わざとでなしに、しようと思

って、直ぐあの中へ、頭からお宝を撒ける人は、まあ、沢山なんとほかには無い。——お孝こうさ

んばかりなんだよ。」

稲葉家の主あるじ、お千世の姉さん、暮から煩わづって引ひいている。が、錦絵にしきえのお孝とて、人の

知しった、素足だてを伊達おんなな婦なである。

「折角お前さん、可いい姉さんを持つて幸福しあわせだったのに、」

と清葉は、もの寂さびしそうに、

「困るわねえ、病やま気がをして。」

「ええ。」

お千世は引入れられたように返事して、二人の目の熟じつと合う時、自働電話に備そなえつけ付けの番号帳ががパタリと鳴る。……前さきに繰くつて見たものが粗ぞんざい雑ざいに置いたらしい、紐ひもが摺ずつて落ちた音。

ちよつと目を遣つて見返しなから、

「そして、どんななの、やつぱりお孝さんは相あいかわらず不ふ変へん？」

「ええ、困るのよ。二日に一度、三日に一度ぐらい、ちよつと気がつくんですけれど、直すぐに夢のようになってしまいますわ。」

「そうだつてねえ。」

「時々、嬰あかんぼ児ごのようなことなんか。今しがたも、ぶつきり飴と鳥が欲しいって、そう云つて、……………」

と莞にっこり爾りするものが、涙ぐむより果敢はかなく見られる。

「ああ、それで飴を買いに。」

と云いかけて、清葉は何か思出した面おももち色ちして、

「お千世さん、今の、あの、味方をして下すつた坊さんね、……………」

「ええ。」

「お前さん誰かに肖にていたとは思わなくって、」

「肖でいて。誰に、ええ？……姉さん。」

「ちよつとあの……それだと、お前さんも、お孝さんも、私も知っている方なんだがね。」

「そうでしょう、ですから、私もきつとそうでしょうと思いましたわ。」

「まあ、やつぱり、そうかねえ。気の迷いじやなかつたかねえ。」

と清葉は半ばひとりごと独言ひとりごとに云うと、色傘を上へ取つて身繕さまいをする状さまして、も一度あとを

見送りそうな氣構きくまえに、さらさらとふたかえし返かえし、褌ふたかえしを返して、火の番の羽目はねめを出たが、入いれか

交まじわつて、前へ通そうとするお千世と、向を変えてまた立留たちどまつた。時も過ぎたり、いかに

にしても、今はその影も見えないことを心付こころいたらしいのである。

「では、あの、姉さんはお顔を見たことがあるんですか。」

「私は、ここで遠いもの。顔なんてどうして？……お前さんは見たんじやない？ もつと

も笠かさを被かぶつていなすつたけれどもさ。」

お千世はしきりに瞬ました。

「あら、姉さん、肖でいたつて、西河岸のお地藏様じやないんですか。私は直接じかに見たこ

とはありませんけれど、……でしようと思いましたが。で、なくて、誰に肖ていたの、姉さん。」

「まあ、お千世さん、肖たつてのはその事なの。……じゃ、やっぱり、気の迷だつたんだよ。」とうっかりしたように色傘を支^つく。

「いいえ、気の迷いじゃありません。私はま^つたく。」

「そうね、……折があつたら、お千世さん、一所におまいりをしようねえ。」

手に手

八

「成程、蜜豆屋じゃなかつたわね。」

飴屋が名代の涎^{よだれかけ}掛^かを新しく見ながら、清葉は若い妓^こと一所に、お染久松がちよつと戸迷^{とまど}いをしたという姿で、火の番の羽目を出て、も一度仲通へ。どっちの家へも帰らないで、——西河岸の方へ連立つたのである。

けれども、いずれそのうち、と云った、地蔵様へ参詣をしたのではない。そこに、小紅屋と云う母が甘そうな水菓子屋がある。二人は並んでその店頭。帳場に横向きになつて、拇指の腹で、ぱらぱらと帳面を繰つていた、肥つた、が効性らしい、円鬚の女房が、莞爾目迎えたは馴染らしい。

「いらつしやいまし、……唯今お坊ちゃんがお見えになりましたよ。」

「おや、そうですか、小婢がついて。」

と小さな袱紗づつみをちよつと口へ、清葉は温容なものである。

「いいえ、乳母さんに負ぶをなすつて、林檎を兩個、両手へ。」

と女房は正面へ居直つて、膝にちやんと手を支いて、わぎと目を円くしながら、円々ちい括頤で、頷くように襟を圧えて、

「懐中へ一つ、へい。」

と恍けた顔。この大業なのが可笑いとて、店に突立った出額の小僧は、お千世の方を向いて、くすりと遣る。

女房は念入りにも一つ頷き、

「お土産の先廻り。……莞爾々々お帰りでございました。ですからもう今日は、お持ち

になるに及びません。ほんとにお坊ちゃんは、水菓子がお好きでいらつしやいます事！

お宅様の直じき御近所に、立派な店がございましてのに、難ありがた有がたい事に手前どもが御ご鼻ひいき頂うで。

……小いお娘あねえさま様もその御縁で、学校のお帰りなんぞに、（小母さんお水ひやを一杯。）な

んて、お寄りなすつて下さいませし、土地第一の貴あなた女がた方に御心安く願いますので、房州

出のこんな田舎ものも、実まことにねえ、町内で幅が利きますんでございませよ。はい。」

「飛んでもない、女房おかみさん、何ですか、小娘こどもまでが、そんなに心安だてを申しますか、御

迷惑でございませこと。」

「勿体ない、お蔭さまで人氣が立つて大景氣でございませよ。」

「お世辞が可いのねえ、お千世さん。」

「はあ、ほんとうに評判よ。」

「いいえ、滅相な、お世辞ではございませんが、貴女方に誉められます処を、亡くなつた亭主やどに聞かしてやりとうございませ。そういたしましたら、生きてるうち邪じゃけん慳けんにしまし

たのをさぞ後悔することございませよう。しかしまた未練が出て、化けてでも出ると大

変でございませね。」

お千世が襦じゆばん袷あせの袖口で口をおさ圧おさえて、一昨年おとしの冬なくなつたその亭主の、いささか訛なまりの

ある仮こわいろ声を使う。

「松蔵どんやあ。」

「わい。」

と叫んで、飛上ると、蜜柑みかんの空箱からばこを見事に一個、がた、がたんと引転覆ひっくりかえして、松小僧は帳場口へどんと退さがつて、

「女房おかみさん！」

「ああ、驚いた。何だい。」

不意打に吃驚びっくりして、女房かみさんもぬツと立つて、

「何だねえ、お前、大袈裟おおげさな。」と立身たちみに頭から叱られて、山姥やまうばに逢ったように、くしやくしやと窘すくんで、松小僧は土間へ蹲しゃがむ。

「見たか、弱虫。」

お千世は白い肱ひじをちらりと見せ、細い二の腕を軽く叩いて、

「可い気味さ。」

「何だね、お前さん。」と、余所よその抱妓かかえでも、そこは姐ねえさん、他人に気兼で、たしなめる。

「だって、いつも人魂の土蔵の処とこじや、暗がりて私を威おどすんですもの。」

九

「まあ、貴女方、どうぞ、まあ。」

女房かみさんは立った序ついでに、小僧いらいつにも吩咐いいつけないで、自分で蒲団ふとんを持出して店端みせばなの縁台えんたいに――

夏は氷を売る早手廻ひもうせんしの緋毛氈ひもうせん――余り新しくはないのであるが、向う側が三間ばかり、忍返しのへしの附いた黒板塀くろばんべいなのと、果物の艶つやを被かぶせたので、埃ほこりも見えず綺麗である。

「いいえ、すぐにお暇いとまを。――お千世さん、何が可よかろうねえ。」

「済みません、姉さん。」

とお千世は瞬しんきで礼を言う。

清葉はいました方、火の番小屋から、直ぐに分れて帰ろうとして、その銀貨入を、それごとお千世の帯の間へ挟みつつ云うのに――

「あの、極ごくりが悪いんですがね、お前さんのために使おうと思ったのを、使わないで済んだんです。お金子かねだと思わないで、お千世さん。」

「まあ、なぜ？」

「小児こどもに苛めいられたお見舞いじに。」

お千世は、生際の濃い上へ、俳優やくしやがあいびきを掛けたように、その紫の裏を頂いたが、手へ返して、清葉のその手に、縋すがるがごとく顔を仰いで、

「姉さん、このお宝で、私をお座敷へ呼んで下さいな。……ちつとも私、この節かかつて来ないんですもの。」

土地の故参で年上でも、花菖蒲はなあやめ、燕子花かきつばた、同じ流れの色である。……生意氣盛りが、

我慢も意地も無いまでに、身を投げ掛けたは、よくせき、と清葉はしみじみ可哀あわれに思った。

「菊家へ行ゆこうよ、私がお客で。大したお大尽だいじんだわね、お小遣もちあつかを持も扱あつかって。」

とわざと銀貨入を帯に納めて、

「途中で我ままな馴染に逢って無理に連れられたとそうお云いな。目と鼻の前さきだつて、一旦家うちへ帰つてからだど、河岸の鮨は立食しても、座敷にはきちょうめんな、極きまりの堅いお孝さん。お化粧だの、着換だの、ついそのままではお出しであるまい。……私も五時からお約束が一つある。早いが可いわね。ちよつとこの自働電話で、内へ電話をお掛けなさい。一所に行つて御飯を食べよう。」

「姉さん。」

と、いそいそしながら、果敢はかなそうに、

「もうね、内に電話は無いんですよ。」

清葉は思いがけず疑いの目を睜みはつて、

「どうして、ねえ。」

「お孝姉さんはあんなでしよう。私は滅多に御座敷はありませんし、あの……」

とお千世は言淀んだが、

「鑑札のお代だつて余計なものなのに、電話なんか無駄だからって、それで、譲つてしまつたんでしよう。一昨日おとといから、内にはボンボン時計も無いんでしよう。ですから、チンリひっそりンと云う音もしないで、寂寞ひっそりぼかんとしているんですわ。」

方々、お茶屋さんだの、待合さんへ、そう云つておいでつて云うんでしよう。——私がずツと廻りましたの。

姉さん。——はじめてお弘めに連れられました時よりか、私極りが悪かつたんです。……だつて、ただ、（ああそうですか御苦労様。）つてお言いなさる許とこは可いんですけれど、中にはねえ、（どうして。）つて。……いいえ、冷評ひやかすんじゃないやありません、深切で聞いて下さるお家うちでは、（私がちつとも出ませんから。）

そう言わなけりやなりませんもの。しよう事なしに、笑って云うにや云いましたが、死ぬほど辛うござんしたわ。」

と指を環にしつ、引靡ひきなみけつ。

十

寐起ねおきの顔にも、鬢びんの乱れは人に見せない身み躰たしなみ。他人の纏もつれ毛も気になるか、一つ座敷の年下など、小蔭で撫着けてやる外には、客はもとより、身体からだに手なんぞ、触った事無い清葉が、この時は、しかと頸筋くびすじでも抱きたそうに、お千世の肩に手を掛けた。

「まあ、お孝さんが廻れと云って？」

「いいえ。」

と驚いたように頭かぶりを振って、

「私の姉さんが、そんな事……病気から以来こつち、内の世話をしている叔母さんのいいつけなんですよ。」

稲葉家のお孝が、そうした容体になつてから、叔母とは云うが血筋ではない。父親は台

灣とやら所在分らず、一人有つたが、それも亡くなつた叔父の女房で、蒟蒻島で油揚の手曳てびきをしていた。余り評判のよくない阿婆おばあが、台所だいどころから跨またぎ込んで、帳面を控えて切盛する。其奴そいつの間夫まぶだか、田楽だか、頓髯あごひげの凄まじい赤ら顔の五十男が、時々長火鉢の前に大胡坐おおあくらで、右の叔母さんと対向さしまむかいになると、茶棚傍わきの柱の下に、櫛卷の姉さんが、棒縹ぼうじまのおさすり着もの、黒繻子くろじゆすの腹合せで、襟へ突込んだ懷手、婀娜あだにしよんぼりと坐っているのが毎度と聞く。可哀かわいそうに、お千世は御飯炊から拭掃除、阿婆おばあが寢酒の酌まですて、ちびりちびりと苛いじめられる上、収入みいりと云つては自分一人の足りない勝で、すぐにお孝の病氣の手当に差響くのに氣を揉もんで、言い憎かろう。我が口から、

「若干金いくらでも。」と待合の女中ささやに囁く。

不思議な事は、禍わざわいだか、幸さいわいだか、お孝の妹分と聞いただけで、その向きの客人は一目を置き、三舎を避けて、ただでも稲葉家では後日あとあとが、と敬遠すること、死せる孔明活ける仲ちゆうたつ達を走らすごとし。従つてちつとも出ない。その為に、阿婆の寢酒はなおあくどい。あわれがつて、最惜いとしがつて、住替を勧めても、

「私が出ますと姉さんが。」

とお孝を案じて辛抱する。その可愛さも知れている。それなのに、お千世に口の掛から

ない時は、宵から、これは何だ、と阿婆が茶の缶の鋳力フリキを、指で弾はじいて見せると云うまで、清葉は聞伝えていたのであった。

電話さえ無い始末、内証しじも憍ねだばれる。……あの酒のみが、打切ぶつきり餡あめ。それも欲ほしい時は火のつくばかり小児こどもになつて強請ねだるのに、買つて帰ればもう忘れて、袋を見ようともしないとか。病気が病気の事であるから、誰の顔の見さかえも有るまいが、それにしても大分だいぶんの無沙汰をした。……お千世のためには、内の様子も見て置きたい、と菊家へ連れようとした気を替えて、清葉はお孝を見舞いに行くのに、鮎あゆというのも狂乱の美人、附属つぎものもの筐かごの気が悪い。野暮な見立ても、萎しおるる人の、美しい露にもなれかすと、ここに水菓子を選んだのである。

小紅屋の女房もみで揉手もみでをして、

「稲葉家さんへ。ええええ、直すくに、お後から持たせまして。」

小僧がってん合あ点てんして、たちまち出額おでこに蝟たこ顛はらまき卷まき。

引摺ひきずるほどにその奴やつこが着た、半纏はんてんの印いんに、稲穂いなほの円まるの着いたのも、それが有らぬか、お孝が以前の、派手を語つて果敢はかなく見えた。

二人は引返して、また、あの火の番の前へ出たが、約束事でも有るごとく、揃揃つて立た

停まらなければならなかつたのは、一町たらず河岸寄りの向う側、稲葉家のそこが露地の中から、蜥蜴とかけのように、のろりと出て、ぬつと怪しげな影を地に這はわした、服装みなりはしよびたれ、薄汚れて、広袖どてらかと思う、袖口も綻ほころびて下つたが、巖がんじょう 乗まづくりの、ずんと脊せの高い、目深めふかに頬ほお被かぶりした、草鞋わらじ穿きで、裾すそを端折はしらぬ、風体かみの変な男があつて、懐手うづむで俯向うつむいて、こなたへのさのさと来掛きつた、と見ると、ふと頬被かむりの裡うちの目ばかり、……ここに立留たまつた清葉たちを見るや否や、ばねで弾はかれたかと思う、くるりと背後うしろ向むき。方角むすびめをかえて河岸通へ、しかもそのそと着流きしのぐなりとした、角帯かくおびのずれた結目むすびめをしやくつて行く。

出て来た処ところが稲葉家の露地であるだけ、お孝たかに憑ついたあやかしと思う可厭いやな影の、角の電信柱でんしんちゅうで、フツと消えるまで、二人は、ものをも言わず見送みおくっていたのである。

露地の細路

昔と語り出づるほどでもない、殺された妾の怨恨で、血の流れた床下の土から青々とした竹が生える。筍の（力に非ず。）凄さを何にたとうべき。五位鷲飛んで星移り、当時は何某の家の土蔵になったが、切つても払つても妄執は消失せず、金網戸からまざまざと青竹が見透かされる。近所で（お竹蔵。）と呼んで恐をなす白壁が、町の表。小児も憚るか楽書の痕も無く、朦朧として暗夜にも白い。

時々人魂が顫れる。不思議や鬼火は、大きさも雀の形に紫陽花の色を染めて、ほとほとと軒を伝う雨の雫の音を立てつつ、棟瓦を伝うと云うので。

小紅屋の奴、平の茶目が、わツ、と威して飛出す、とお千世が云ったはその溝端。――稲葉家は真向うの細い露地。片側立四軒目で、一番の奥である。片側は角から取廻した三階建の大構な待合の羽目で、その切れ目の稲葉家の格子向うに、小さな稲荷の堂がある。傍に、総井戸を埋めたと云う、扇の芝ほど草の生えた空地があつて、見切は隣町の奥の庭。黒板塀の忍返しで突当る。

そこに紅梅の風情は無いが、姿見に映る、江一格子の柳が一本。湯上りの横櫛は薄暗い露地を月夜にして、お孝の名はいつも御神燈に、緑点滴るばかりであった。けれども、ここの露地口と、分けて稲葉家のその住居とに、少なからず、ものの陰気な風説がある。

以前、仲之町の声妓で、お若と云った媚かしい中年増が、新川の酒問屋に旦那が出来たため色を売るのは酷い法度の、その頃の廓には居られない義理になって場所を替えた
檜物町。

廓に馴れた吾妻下駄、かろころ左褌を取ったのを、そのままざろりと青畳に敷いて、起居に蹴出しの水色縮緬。伊達巻で素足という芸者家の女房。むかし古石場の寄子ほど、芸者の数を二階に抱えて、日本橋に芽生えの春。若菜家の盛を見せた。夏の素膚の不断の紹明石、真白に透く膚とともに、汗もかかない帯の間に、いつも千円束が透いて見える、と出入りの按摩が目を剥いたのが、その新川の帳尻に、柳の葉の散込むのが秋風の立つはじめ。金気蕭条としてたちまち至る殺風景。やけでお若は浮気をする。紐がつく、鳶が搦む、蜘蛛の巣が軒にかかる、旦那は暴れる、お若は遁げる。追掛廻して殺すと云う。

手切話しに、家を分けて、間夫をたてひく三度の勤めに、消え際がまた栄えた、おなじ屋号の御神燈を掛けたのが、すなわちこの露地で、稲葉屋の前がそれである。

お若と云うのは、一輪の冬牡丹を尻に咲かす間もなく、その家で煩いついて、いわゆる労症の、果はどつと寝て、枕も上らないようになると、件の間夫の妹と称する、いづくん

ぞ知らん品川の女郎上り。女で食う色男を一度食わせたことのある、台の鮨のくされ縁が、手扶けの介抱と称えて入り込んで、箆筒の抽斗を明けたり出したり、引解いたり、鉢を入れたり。勝手に台所を掻廻した挙句が、やれ、刺身が無いわ、飯が食われぬ、醤油が切れたわ、味噌が無いわで、皿小鉢を病人へ投打ち 三昧、摺鉢の当り放題。

十二

お若の身は火消壺、螢ばかりに消え残った、可哀に美しく凄い瞳に、自分のを直して着せた滝綺お召の寝々衣を着た男と、……不断じめのまだ残る、袱紗帯を、あろう事か、《し》めるはまだしも、しやら解けさして、四十歳宿場の遊女どの、紅入友染の長襦袢。やつぱり、勝手に拝借ものを、垂々と見せた立膝で、長火鉢の前にさしむかいになった形を、世に有るものとも思わなかった、地獄の絵かと視めながら、涙の暗闇のみだれ髪、はらはらとかかる白い手の、掴んだ拳に俯伏せに、魂は枕を離れたのである。

が、姿は雨に、月の朧に、水髪の横櫛、頸白く、水色の蹴出し、蓮葉に捌く裾に揺れて、蒼白く燃える中に、いつも素足の吾妻下駄。うしろ向になつて露地口を、カラカラと踏

んで、五つばかり聞えてフツと消える。

も一度からからと響くと思うと、若菜家の格子のカタンと開く音。

極きまつて、同じ姿が、うしろ向きに露地口へ立つて、すいと入ると途中で消えて、あとは下駄の音ばかりして格子が鳴る。

勿論、開いたでもなければ、誰も居ない。……これを見たもの、聞いたもの。

やがて風説うわさも遠退とのおのいて、若菜家は格子先のその空地に生える小草おぐさに名をのみ留めたが、

二階ふたかいづくりの意気いきに出来て、ただの住居すまいには割に手広い。……ここで、一度待合まちあひになった

処、開みせびらき店の晩ばんに、酔よつて裏二階うらふたかいから庇合ひあひへ落ちて、黒塀くろべいの忍返しのへしにぶら下つて、半

死半生しはんせいに大怪我おおいけがをした客きやくがあつて、すぐに寂さびれて、間もなく行方知れずそれは引越す。

一度、勤人の堅気かたけが借りて、これは無事。ただし商館しょうくわん通いであつたが、旅順とやらの支

店の方へ勤きんがえになつて、貸家札。

時に二割方家賃かぢんをあげた。近所では驚いた。差配さはいの肚はらは大きかつた。

すぐに引越ひきこし蕎麦そばを大蒸籠おほせいろうで配おつたのが、微酔ほろよのお孝こであつた。……抱妓かかえが五人と

分わけが二人、雛妓おしやくが二人、それと台所だいしよと婢ちびの同勢どうせい、蜀しよく山兀さんこつとして阿房宮あほうみやう、富士の霞せみに

日の出いけおの勢いへ、紅白粉べいおしろいが小溝あふに溢あふれて、羽目はねめから友染ともぞめがはみ出すばかり、芳町よしちやうの前ぜんに

住居が、手狭となつて、ここに鏡台の月を移して、花の島田を纏めたものが。

三年にして現時の始末。

もつとも中頃、火取虫が赤いほど御神燈に羽たたきして、しきりに蛞蝓が敷居を這う、と云う頃から、傍では少なからず気にしたものの、年月過ぎたことでもあり、世間一体不景気なり、稲葉家などは揚りのいい方、取り立てて言出して、気にさせても詮ない事と、土地で故顔のお茶屋の女中、仕上げて隠居分の箱屋なども、打出しては言わなかつた。

かえつて河岸の客などに、場所も所説もよく知つて、——中には見たのが有ると云う——酒の座敷で威かし半分、

「歸りに摺違うよ、露地口で。」

とまで打撒けるものは有つても、勝気氣嵩の左棲、投遣りの酒機嫌。

「評判な人ね、あやかりたいよ。」

で、粋な音メ《ねじめ》と聞えた美声。

露地の細路……駒下駄で……

と得意の一節寂寞とする。——酔えば蒼くなる雪の面に、月がさすように電燈の影が沈むや。

「肖然。」

と、知った同士が囁き合つて、威した客の方が悚然とする。……

露地の細路、……駒下駄で……

「お孝、それだけは堪忍しな。」

つむじ曲りが、娑婆気な、わざと好事な吾妻下駄、霜に寒月の冴ゆる夜の更けて帰る千鳥足には、殊更に音を立てて、カラカラと板を踏む。

顔の見える時はまだしもである。

朽ちた露地板は気前を見せて、お孝が懐中で敷直しても、飯盛さえ陣屋ぐらいは傾けると云うのに、芸者だものを、と口惜がつても、狭い露地は広くならぬ。

車は通らず、雨傘も威勢よくポンと轆轤を開いたのでは、羽目へ当つて幅つたいので、湯の帰りにも半開、春雨捌きの玉川翳。

美人のこの姿は、浅草海苔と、洗髪と、お侠と、婀娜と、（飛んだり刎ねたり。）もちよつと交つて、江戸の名物の一つであるが、この露地ばかり蛇目傘の下の柳腰は、と行逢うものは身の毛を悚立てて、鶯の声の媚いて濡れたのさえ、昼間も時鳥の啼く音を怪む。

柳に銀の舞扇

十三

鐘さえ霞む日は闌たけなわに、眉を掠かすめる雲は無ないが、薄うつつりとある陽炎かげろうが、ちらりと幻を淡く染めると、露地を入りかけた清葉は、風説うわさの吾妻下駄と、擦違そつうように悚然ぞつとした。

清葉は実際、途中でも、座敷でも、廊下でも、茶屋の二階の上り下り、箱部屋などでも、ちようど、袖袂たもとの往通むかひいに、生きていた頃の幽霊と、擦違そつつて知ったのであるから。――

ここまで引添ひきぞつたお千世は、家の首尾うちを見る為か、あるじもうけの心附こころづけか、ものも言わないで、一足前さきへ、袖を振ふつて駆出かけだした。格子の音はカラカラと高く奥から響ひびいたけれども、幸に吾妻下駄の音ではなくて、色気も忘れて踏鳴ふみなりらす台所穿ぼきの大な蹺あしおと音。それさえ頼母たのもしい気がするまで、溝板どぶいたを辿たどれば斧の柄の朽ちるばかり、漫そぞろに露地が寂しいのである。

並んで四軒、稻葉家の隣家となりは目下空家いままで、あとの二軒も、珍しく芸者家ではない。

片側の待合のその羽目に、薄墨でぼかしたように、ふらふらと、一所に歩行いて附いて来る影法師。

清葉は例の包ましやかに、色傘を翳していた。その影と分れたが、フト気になるので、そこで窄めて、逆上るばかりの日射を除けつつ、袖屏風するごとく、怪いと見た羽目の方へ、袱紗づつみを頬にかざして、徐に通る棲はずれ、末濃に藤の咲くかと思えつつ。

さて音訪るる格子戸は、向うへ間を措いて、そこへ行く手前が、下に出窓、二階が開いて、縁が見える。

「お孝さん。」

と無遠慮に心易く、それなり声を掛けるのには——二人の間は疎遠でないが——いずれも名取りの橋の袂、双方対の看板主、芸者同士の礼儀があるので。

一步とまつて、二階か、それとも出窓の内か、と熟と視めて、こう、仰いだ清葉の目に、色系を颯と投げたか、とはらりと映つて、稲妻のごとく瞳を射つつ沈んで輝く光があった。

驚いた鬢のほつれに、うしろの羽目板で、ちらちらと一つ影が添って、重つた蒼い影。優しいながら、口を緊めて——透つた鼻筋は氣質に似ないと人の云う——若衆質の細

そおもて
 一面の眉を払って、仰向いて見上げた二階の、天井裏へ、翻然と飛ぶのは、一面、銀の舞扇である。

十四

きらりと光ると、扇は沈んで影は消えた。

……が、また翻つて颯と揚羽。輝く胡蝶の翼一尺、閃く風に柳を誘つて、白い光も青澄むまで塵を払つた表二階。

露地も温室のような春の中に、そこに一人月のごとき美人や病む。

扇に描いたは、何の花か、淡い絵具も冷たそうに、床の柱に映るのが見える。

落ちると、トンと幽な音。あの力なさは足拍子でない。……畳に汀つた要の響。日ざしの白い静かさは、深山桜が散るようである。

障子を左右に開け放して、見透かされたるその座敷に、櫺子隠れの肩も見えず、欄干にこぼるる裳も見えぬ。

お孝はまさしく寝ているのである。

寝ながら、舞扇のお手玉して、千鳥に投げて遊ぶのであった。

「ああ、多日逢わない……」

清葉は、また可懐しさが身に染みた。……軒の柳の翠も浅い、霞のような簾一枚、じきそこに、と思うのが、気の狂った美人である。……寝ながら扇を……

また飛ぶ扇、閃めく影、影に重る塀の影。

なぜか渾名の（錦絵。）に、魂の通う不思議な友に、夢現に相見る気がして、清葉は軽く胸が轟く。

さてこう云うも咄嗟の事。

直ぐに格子を音ずれかけたが、歩みも運ばないで、立淀んだ。

清葉は途端に、内で、がみがみと喚く声を聞いたから。

「遅いじゃないかね。」

と云う、嘔がれた中に痰の交じった、冷飯に砂利を噛む、心持の悪い声で、のっけに先ず一つくらわせた。

続いて、

「真昼間、……お尻を振廻して歩行いたって、誰も買手は有りはしないや。……鳶、鳶

と茶色な歯、尖^{とが}つた口も見えるところ、

「鳶につつかれるくらいが落なんだよ。どこ、何、お茶、お茶、どこへお茶を買って来、」
とちよつと途絶える。

お千世は飴を買ったのに。

「何だ、飴だえ。私はまたお前さんの身のものは、売^{うり}買^{かい}ともにお茶だと思った。……その飴を、お茶うけに、へへん、」

と笑い上げたは、煙草^{たばこ}を吹いたぞ。

「やつぱりお茶に縁が有らあね、……世間じやお天道様と米の飯は附いて廻ると云うけれど、お前さんにや、貰^{もらい}水^{みず}とお茶がついて廻るんだ。お茶の水は本郷の名所だっけ。日本橋にや要らないもんだ。

ええ、姉さんのだ、嘘をお吐^つき。……いいえ、姉さんがまた吩咐^{いいつ}けたって、口ばかりさ、直ぐに忘れて、きよとんとしている事は知ってるじやないか。そして、食べさしちや悪いんだ。狂^{きちがい}女^めに食ものツてね、むしやむしや食散らかされて堪^{たま}るものかな。

食^{むく}べると水膨^{むくむ}んだよ。……あの上水膨^{むくま}れちや、御当人^{はた}より傍^{はた}のものが助からないよ。人

が乾殺ほしころしてもするように、陰へ廻つちや出過ぎたがる。姉さんもまた、人聞きの悪いほど、何だかだつて食べたがる。精々何にも当飼あてがわないで、咽喉のど腹を乾しとかなないと、この上また何かの始末でもさせられるようじやどうすると思うんだ。」

清葉は睫毛まつげに露を押えて、二階の陽炎の光るのを見た。——扇は澄まして舞うのである。

十五

清葉は格子へ音訪おとずれ兼ねた。

自分と露地口まで連立つて、一息前さきへ駆戻つたお千世を捉とらえて、面まのあたり前喚くのは、風う説わざに聞いたと違ちがいない、茶の缶たを敲たたく叔母であろう。

悪戯いたずらつこ児この悪関係こたわりから、火の番の立話、小紅屋へ寄つたまで、ちよつと時間が取れている。昼間近所へ振売だ、と云う。そんなお尻は鳶つの突つくが落だ、と云う。お茶と水とは附ついて廻る、駿河台するがだいに水車みずぐるまが架かつたか、と云う。

お千世さんは私が一所にここへ来たことを云つたのだろうか。……言つて、そして聞えよがしに、悪体を吐つくとすると、私に喧嘩けんかを売うるのかしら。何の怨みも無いものが、煩わづう

人の見舞に来たのに、いかに分らずやの叔母だと云つて、まさかそうした事ではあるまい。露地から急いで、……あのお千世さんが心づかい、台所から長火鉢、二階を股に掛けて、眼張がんばつている、ものがもの。姉さんは姉さんゆえ、客に粗末の無いように、と先触れに駆込んだ処を、頭から喚き立てて、あの妓こが呼吸いきを吐ついて、口を利く間も措かず、立たてつて饒舌しゃべるらしい。

それにしても、汚い口から出過ぎた悪体。お千世も同じ、芸者はお互い。筆がしらでも中軸なかじくでも一味についた連名の、昼鷺がお尻つを突つく、駿河台の水車、水からくりの姉さんが、ここにも一人と、飛込もうか。

それには用意がなければならず、覚悟もしないじや出来まいが、自分へ面つら当あてなら破れかぶれ。お千世へだけの事だったら、陰ほころびで綻ほころびを縫うまで、と内気な女が思直す。……

またその時、異おつう悪黙りに黙おつつてしまつて、ふと手の着けられぬまで、格子の中ひっそが寂ひっそ寞りして、薄気味の悪いほど静おつまつた。

これぞ、お千世の客が来て、門かどに近いのを、やつと囁ささやき得た事うなずを領うなずかせる。

「ええ。」

咳しわぶきを優しくして、清葉が出窓際の柳の葉の下を、格子へ抜けようとする、とあたかもそ

の時。

はらりと音して、寝ながら投げた扇が逸れたか、欄干を颯と掠めて、蒔絵の波がしら立つごとく、浅翠の葉に掛つて、月かと思う影が揺ぐと、清葉の雪のような頬を照らす。……と思わず、受けたは袱紗の手。我知らず色傘を地に落して、その袖をはつと掛けて、斜めに丁と胸に当てた。

清葉は前刻から見詰めた扇子で、お孝の魂が二階から抜けて落ちたように、気を取られて、驚いて、抱取る思いがしたのである。

潜つて流れた扇子の余波か、風も無いのにさらさらと靡く、青柳の糸の纏れに誘われた風情して、二階にすらりと女の姿。

お孝は寢床を出た扱帯。寛い衣紋を迂るよう、一枚小袖の黒縞子の、黒いに目立つ襟白粉、薄いが顔にも化粧した……何の心ゆかしやら——よう似合うのに、朋輩が見たくても、松の内でないで見られなかった——濱島田の艶は失せぬが、鬢のほつれは是非も無い。

生際曇る、柳の葉越、色は抜けるほど白いのが、浅黄に銀の刺繍で、これが伊達の、渦巻と見せた白い蛇の半襟で、幽に宿す影が蒼い。

十六

と……思つたほどは寔れも見えぬ。

病氣のために失心して、娑婆も、苦勞も忘れたか、不斷年より長けた女が、かえつて實際より三つ四つも少ないくらい、ついに見ぬ、薄化粧で、……分けて取亂した心から、何か気紛れに手近にあつたを着散したろう、……座敷で、お千世がいつも着る、紅と浅黄と段染の麻の葉鹿の子の長襦袢を、寝衣の下に棲浅く、ぞろりと着たのは、——かねて人が風説して、氣象を較べて不思議だ、と言つた、清葉が優しい若衆立で、お孝が凜々しい娘形、——さながらのその娘風の艶に媚かしいものであつた。

お孝は弛んだ伊達巻の、ぞろりと投遣りの裳を曳きながら、……踊で鍛えた棲は乱れず、白脛のありとも見えぬ、蹴出捌きで、すつと来て、二階の縁の正面に立つたと思うと、斜めにその柱に凭れて、雲を見るか、と廂合を恍惚と仰いだ瞳を、蜘蛛に驚いて柳に流して、葉越しに瞰下し、そこに舞扇を袖に受けて、見上げた清葉と面を合せた。

「ああ、お孝さん。」

と声を掛ける。

上で見詰めたなり、何にも言わず、微笑むらしいお孝の唇、紅をさしたように美しい。そこへ、あとも閉めないでおいたと見える、開けたままの格子を潜くぐつて、顔を出したお千世は、一杯目に涙を湛たえている。

乱れて咲いた欄干たわわの撓たわな枝と、初咲のまま萎しおれんとする葉がくれの一輪を、上うえ下したに、中の青柳は雨を含んで、霞たもとんだ袂たもとを扇に伏せた。――

「清葉さんは楽勤め。」と茶屋小屋で女中が云う。……時間過ぎの座敷などは、（お竹蔵）の棟瓦に雀が形を現しても、この清葉が姿を見せた験ためしが無い。……替りには、刻限までだと、何なん時ときに口を掛けても、本人が気にさえ向けば、待つ間が花と云う内に、催促に及ばずして、金屏風きんびょうぶの前に衣紋あらいを露あらす。

但し約束は受けていても、参詣まゐりの帰途かへりに眩暈めまいがすると、そのまま引籠ひきこもること度々で。この眩暈と、風邪と、も一つ、用達ようたしと云う断りが出る、と箱三はこさんの札は、裏返らないでも、電話口でんわぐちの女中が矢継早の弓弦ゆんづるを切つて、断念あきらめて降参する。

座敷で口惜くやしがるもの曰く、

「旦那が来ているのだらう。」

勿論である。

時に説を為すものあり。

「そのくらいなら商売を止めれば可い。」

難じ得て妙だと思ふと、たちまち本調子の声がして、

「芸者が好きな旦那でしょうよ。」

一言簡潔にして更に妙で、座客ぐうの音も出ず愕然としてこれを見れば、蓋し三味線が、割前の一座を笑つたのである。

そうまで我儘が通る癖に、附合が綺麗で、朋輩に深切で、内気で、謙遜で、もの優しい。おくれた座敷は、若い妓の背後に控えて、動く処は前へ立つて目立たないように取り廻す、というのであるから、お茶屋の蔵の前に目の光る古狸から、新道の塙を巢立ちの雛児まで、

「ああ、いい姉さん。」

とのつけに云う。……続いて頭を振る所科ありと知るべし。少いもの慌てまい。その頭を振る事たるや、今のは嘘だと云う打消してはない。

十七

向うへ対手に廻しては、三味線の長刀、扇子の小太刀、立向う敵手の無い、芳町育ちの、一步を譲るまい、後を取るまい、稲葉家のお孝が、清葉ばかりを当の敵に、引くまい、退くまい、と氣を揉んで、負けじとするだけ、かねてこなたが弱身なのであった。

張も、意地も、全盛も、芸ももとよりあえて譲らぬ。否、較べては、清葉が取立てて勝身は無。分けてむこうは身一つで、雛妓一人抱えておらぬ。

こなたは、盛りは四天王、金札打った独武者、羅生門よし、土蜘蛛よし、※々《ひひ》、狼ももつて来なで、萌黄、緋緘、卯の花緘、小桜を黄に返したる年増交りに、十有余人の郎党を、象牙の撥に従えながら、寄すれば色ある浪に碎けて、名所の松は月下に独り、従容として名を得る口惜しさ。

弱虫の意気地なしが、徳とやらをもつて人を懐ける。雪の中を草鞋穿いて、蓑着て揖讓するなんざ、惚気て鍋焼を奢るより、資本のかからぬ演劇だもの。

「字は玄徳め。」

と、所好な貸本の講談を読みながら、梁山泊の扈三娘、お孝が清葉を罵る、と洩

聞いて、

「その気だから、あの妓は、（そんけん）さ。」

と内証で洒落た待合の女房がある由。

却説、言うがごとく、清葉の看板は滝の家にただ一人である。母親がある。それは以前

同じ土地に聞えた老妓で、清葉はその実、養女である。学校に通う娘が一人。これには表むき、おつかさん、とおおびらに自分を呼ばせて、誰に、遠慮も氣づかないも無い。

なお水菓子が好きだと云う、三歳になる男の児の有ることを、前の条にちよつと言つたが、これは特に断つて置く必要がある、捨児である。夜半に我が軒に棄てられたのを、拾い取つて育てている。その児に乳母を選んで、附けて置く裕な身上。

土蔵がある、土蔵には、何かの舞に使つた、能の衣裳まで納まつたものである。

かつて山から出て来た猪が、年の若さの向う不見、この女に恋をして、座敷で逢えぬ懐中の寂しさに、夜更けて滝の家の前を可懐しげに通る、とそこに、鍋焼が居た。荷の陰で引飲けながら、フトその見事な白壁を見て、その蔵は？

「滝の家で。」

「たきの家？」

「へい、清葉姉さんの家うちでげすよ。」

や、これを聞くと、雲を霞と河岸へ遁にげた。しかも霜冴えて星の凍いてたる夜よに、その猪が下宿屋の戸棚には、襲かさねる衾ふすまも無かつたのであつた。

と、何の苦勞も、屈託も無さそうなその清葉が、扇子おうぎとともに、身を震わした。声もうるんで、

「お千世さん、姉さんが。」

と、二階たたずにゐんで物言わぬお孝を、その妹に教えながら、お千世の泣顔を、ともに誘つて、涙ぐんだ目で欄干てすりを仰いで、

「私、……私よ、お孝さん。」

と二度目に呼んで声を掛けるや、

「葛木かつらぎさん。」

と、冴えた声。お孝が一声応ずるとともに、崩れた棲は小間を落ちた、片膝立てた段鹿かの子の、浅黄、紅、露わなのは、取乱したより、蓮葉はすはとより、薬玉くすたまの総切ふされ切れに、美しい玉の緒もつの縫あわれれた可哀あからさまなを白々地あからさまな。萎ほおつええたように頬杖ほおつえして、片手を白く投掛かけながら、

「葛木さん。」

二度まで、同じ人の名を、ここには居ない人の名を、胸を貫いて呼んだと思うと、支えた腕かいなが溶けるように、島田しまだ鬘まげを頂のせて、がつくりと落ちて欄干てすりに突伏つっぷしたが、たちまち反そり返るように、衝つと立つや、蹠よろ々々として障子に当って、乱れた袖を雪なす肱ひじで、しっかりと胸にしめつつ、屹きと瞰み下ろす目に凄味すこみが見えた。

「ああ。」

「危いわ、姉さん。」

端近な低い欄干、虹が消えそうな立居たちいの危さ、と見ると、清葉が落した色傘を拾つていたお千世が、小脇こわきに取つたまま慌あわしく駆込んだのは、梯子はしごを一飛びに二階へ介添。

「何だい、盗人猫どろぼうねこのように、唐突だしぬけに。」

と摺違いに毒気を浴びせて、ぬつと門口を覗のぞいた、遣手面やりてづらの茶缶ちやかん阿婆おばあ。

「えへへ。」と笑う、茶色な前歯、金の入歯と入乱れて、窪んだ頬おしろいの残滓かす。

「まあ、滝の家のお姉様、どうぞこちらへ。……まあ、御全盛な貴女様が、こんな怪物ばけもの屋敷見たような処へ、まあ、どうした風の吹廻しで。」

清葉はきりりと、扇子おうぎを畳んで、持直して、

「ちよつと、お茶を頂きに。」

河童御殿

十八

「ははあ、葛木ですかね、姓じやね、苗字であるですね。名は何と云わるるですか。」

「晋しんぞう二三さんです。」

上オウバアコオト外套コオトを着ながら、なお蒲柳やせの見える、中脊なかつせの男が答える。

三月四日の夜よの事であった。宵に小降りのした雨上り、月は潜んで朧おぼろ、と云うが、黒雲が浸にじんで暗い、一石橋いちこくばしの欄干際。

一方は口つきでも知れる、言うまでもなく警官である。

「新はどう書くですかね、……通例新の新ですか？ あるいは。」

「晋すすむと云う字です。」

と男は声を低うした。ここに事故ごとありと聞きつけて、通行ひとだかの人集りを憚はばかって、さりげなく知合が立話でもするごとく装おうとしたらしい。

さして氣遣う事は無い。近間に大な建築の並んだ道は、崖の下行く山道である。峰を仰ぐものは多いけれど、谷を覗くものは沢山ない。夜はことさら往来が少い。しかも、その夜は、ちようど植木店の執持薬師様と袖を連ねた、ここの縁結びの地藏様、実は延命地藏尊の縁日で、西河岸で見初て植木店で出来る、と云つて、宵は花簪、蝶々鬘、やがて、島田、銀杏返、怪しからぬ円鬘まじり、次第に鬘の出た、襟脚の可いのが揃つて、派手に美しく賑うのである。それも日本橋寄から仲通へ掛けた殷賑で、西河岸橋を境にしてこなたの川筋は、同じ広重の名所でも、朝晴の富士と宵の雨ほど彩色が變つて寂しい。もつともこの一石橋の夜の御領主、名代の河童が、雨夜の影を潜めたのも、やつと五六年以来であるから。

初夜も過ぎた屋根越に、向う角の火災保険の煉瓦に映る、縁結びの紅い燈は、あたかも奥庭の橋に居て、御殿の長廊下を望んで、障子越の酒宴を視める光景！ 島田の影法師が媚めくほど、なお世に離れた趣がある。

偶にこぼれて出て来るのは、小姓梅之助に手を曳かる腰元の青柳か、密と外して酔ぎましの椎茸鬘。いずれも人目を忍ぶ色の、悪くすると御手討もの。巡查と対向に立つたのなんぞ、誰も立停まつて聞くものは無い。

夜は、間遠いので評判な、外濠そとぼり電車のキリキリ軋きしんで通るのさえ、池の水に映って消える長廊下の雪洞ほんぼりの行方に擬まがう。

が、名を憚はばかった男の、低い声に、（ああん。）と聞えぬ振して、巡査が耳を傾けたのは、わざとらしく意地悪く見えた。

「すすむ、いわゆる、進歩ですかね。」

「いや——高杉晋作の晋なのです。」
と向直る。

巡査の背がぐつと伸びて、じろりやと行って、

「維新創業の名士、長州第一の英傑じゃね。ああ、豪えらい名前でありますな。ふん。」

「親がつけたんです。」

と、苦にが笑わらいしたらしい。

「成程、大きにそこもあるですね。」

と取つても附けない気振けふりをしながら、

「で、晋三の蔵の字は？……いや、名刺をお持ちじゃろう、と考えるですがね。」

「確か……有りました。」

その時、角燈をぱつと見せると、その手で片手の手袋を取って、目前へ、ずい、と掌てのひら目潰めつぶしもくわせる構かまえで、葛木という男は、ハツと一足さがった。

「差上げますので？」

「何、拝見をしますので、はあ、ああ。」

十九

巡査は、持替えた角燈に、頬骨高く半面暗く、葛木の名刺を指の股に挟んで、

「これは非常に皺しわになつとる名刺じゃねえ。」

「つい突込つっこんで置いたもんですから。」と袖の下に、葛木はその名刺入を持っている。

「ああ、非常に大事の物と見えるですね。」

巡査は鼻の先でニヤリと薄笑。

この意味が受取れなくって、

「ええ？」と云う。

「深くその、囊底のうていに秘して置くですね。」

「何、そういう次第ではないんです。いけ粗雑ぞんざいなんです。」

「粗略に扱うですか。わざとですかね、名刺を。」

「わざと、と云うのじやありません。皮肉じやありませんか。」

「あえてそうでないです。が、貴下あなたの言語が前後不揃であるからじゃね。」

「何が不揃です。」とちよつと忙込せきこむ。

「お黙りなさい、」

と、低いが唐突だしぬけに一喝して、けろりとまた静しずかに、

「反問をすることは要らんです。……ただ、質問に対して答えれば可よいのです。」

ぐい、と名刺入を突込んだが、葛木は事を好まぬらしく、そのまま黙る。

巡査はじろりと四辺あたりを見た。

「早く願いたいです。」

「順序があります。——一体この名刺はですな、……更あらためて尋ねるですが、確に、これは貴下あなたのですな。」

「名が書いてありますように、葛木晋三と。」

「本郷駒込が住所で。」

「相違ありません。」

「すると……皺だらけになった、この一枚のみではありませんまい。他に幾枚か持合せがありません。有る筈はずじゃがね。」

「はあ。」と、浮うっかりした返事をする。

「それをお見せにならないけりや不可いかんね。」

「あいにく、持合せがありません。」

「無いと云う法は無い。有るべきですね。」

葛木は、これさえあれば、何事も無い、と自覚したのに、實際無いのを口惜くちおしそうに、も一度名刺入を出して、中を苛立いらだつて搔廻かきまわしたが、

「まったく、一枚になっていたので。」

「成程……非常に交際がお広いですね。」

「いいえ、狭いんです。」と投げたように言下に答える。

「ここに医学士、と記してあるですな。」

巡査は魔を射る赤い光を、葛木の胸にびたり。

その髻ひげの薄あじい顔を照した。

「お職掌から、特に御交際の狭いと云うのは、……ですな。なぜですかね。」

「開業はしておらんです。」

いくらか、^{うなず}頷いたらしかつた。と更まつた態度で、

「どこへお帰りですな。」

「学校へ。」

「何、」

「……その寄宿へ帰ります。」

「ははあ、学士の寄宿舎が。それは唯今ありますか。」

「医局に居おります。」

「今時分。」

「そこに寝泊りをするんです。」

「すると、この駒込千駄木は？」

「籍が有るんです。」

「なぜですか、籍だけお置きになるは、……ですね。」

「妹の縁附いた家なんです。」

「御令妹の、ふん。」

と、一つ呼吸いきを入れたが、突附けた燈あかりも引かず。

「で、唯今まで、どこにおいでで有ったのかね。」

「この辺に、ちよつと飲んでおりました。」

そこへ、二人ばかり通抜けたが、誰も立たちどま停つても見なかった。

二十

「何屋です、何屋ですかね。」

「……それは言わなければならぬでしょうか。勿論、是非と申すんです。」

「いや、それは先ず。……しかし御愉快でしたな。」

「何、苦痛です。」

と向を替えて、欄干もたに凭もたれて云う。……

「苦痛、……成程。道理で、顔がんしよく色が非常に悪いな。」

たちまち乱暴な言語ものいひしながら、横やざまにその瘦やせた形を照して、

「真蒼じやね、はははは。」

と笑棄てたが、底に物ある、薄気味の悪い事。

その時聞えた。糸より細い忍音しのびねの……

——露地の細路、駒下駄で——

「ああ……可厭いやな……姉さん。」

と若い女の声があると、かたかたと駆出す音、呉服橋を、やや離れた辻のあたり。薄墨色の河岸を伝つて、雲より黒い線路に響いた。とも一人笑つた女の声。悪巫山戯わるふざけに威おどつたらしい。磴音あしおとは続いて響く。

葛木は撈むしるように顔を撫でて、

「蒼青まつさおですか。……そうですね。客が野暮だから、化物に逢つた帰途かえりでしょうよ。」

「それは、唯今のそれは、いやしくも行政官の一員たる、すなわち本職に向つての言語であるのですね。」

「いや、実は性分です。」

と焦しれつたそうに言い切つた。葛木は衝つと行ゆこうとした。表裏ひょうり、反覆、とにかくながら、
対あいて手が笑つたから、話は済んだ、と思つたのである。

「お待ちなさい、お待ちなさい。待たんか、おい。」

「何です。」

「ずかずか行つちや不可^{いか}んじやないか。尋問はこれからなんだ。」

「僕は帽を取るよ。更めて挨拶をします。可^いい加減にしくつちや困るじやありませんか。夜分、我々が通行するのに、こういう事は間々あります。迷惑でも御職務に対して敬意を表する。それにしてもです。唯今までさえ、立入過ぎたお尋ねのなさり方ですが、単に御熱心であるからだ、と思つたんです。

この上何を聞くんです。まったく可^いい加減にして下さい。……用が有るなら住所へお尋ねを願いましようかしらん。」

「さよう、当方の都合に因つては住所へもお尋ね出来ず、また……都合によつては、本署へ御同行も出来得るですでああ。」

「ええ。」

さすがに葛木は一驚^{きつ}を喫^{あまり}した。余の事である。

「けれども、御答弁に依つて、そこまでに立到らない事を、紳士のために、本職は欲するでしてな、はあ、ああ。」

「早くお尋ねを願います。何です、とにかく、困りました。僕は不安に堪えません。」
「すると、むしろここで埒を明ける事を御希望になるのですね。」

「勿論、是が非でも連れて行こうと思えば、それが出来ない貴下じやないんだから。」

「さよう。しからば反抗をなさらんで、柔順にお答えをなさるが可い。」

と入交いになった向を直して、巡査は半身を反るがごとく、肩を聳やかして衝とまた角燈を突附けた。

葛木は、その忌わしさと、癩癩にぶるぶるする。

「貴下は太くその顔色が悪いですね。」

「……寒いのです。」

「寒い！ 化物に逢ったのが、性分になって、そして今は寒い。いろいろに変化しますな。」

「まあ、君は、」と、足踏で橋を刻んで焦れると、

「御都合で署へ御同行を願っても可いのです、が、御答弁によって、それまでに立到らない事を、紳士のために希望しますでなあ。」

「……………」

栄螺と蛤

二十一

「なにしろじやね、本職の前で顔色が悪うて、震えておられるのは事実じやね、それはしかし寒いでも構わんです。

その寒いのにじやね……先刻から、水に臨んで、橋の上に、ここに暫時立っていたのは、ありやどういいうわけですか。

勝手だ、酔覚しじやと言わるるかも知れん。けれどもじやね、見ておったぞ、どぶんと音のした……」

水の面は暗かった。

「どぶん。」

ぎりぎりと靴を寄せつつ、

「川の中へ放棄し込んだ、……確に、新聞紙に包んだ可なり重量の有るものは、あれは何

ですか。」

「ああ。」

前の世の罪でもある事か、と自ら危ぶみ、惶れ、惑い、且つ怪んでいた葛木は、余りの呆気なさにかえって驚いたのである。

「その事ですか。」

「先ずそれを聞かんとならんですね。」

「あれは榮螺と蛤ですよ。」

これがまた少なからずこの行政官を驚かした。……その答が余り簡単で明瞭でおまけに平凡であつたから。……けれども、この場合の平凡たるや、世間の名詞は、巡査のためには尽く、平凡であつたろう。

巡査に取つては、魚河岸の侠男が身を投げたよりは、年の少い医学士と云う人間の、水に棄てたものは意外であつた。

「榮螺と蛤。」

問返す、鼻柱かけて著しく眉を顰めて、疑惑の眼は異変に光る。

「貝類の……です。」

「いや、それはいや、それはしかしながら初めは妖怪ばけものの符牒ふちようでもあるかに聞いたですが、再度繰返して説明をされたで、貝類である事は分つたです。分つたですが、……貴あ下なたは妙なものを棄てましたなあ。」

「放したのです、私は、」

「成程、でそれは禁厭ましなにでもなるですかね。」

「……雛ひなに、雛壇ひなだんに供えたのを、可哀相だから放したんですよ」

「ははあ、あるいは煮、あるいは焼いたやつを。」と、わざと空惚そらとぼけた事を云う。

うっかり引入れられそうだった。が、対手あいてが巡查である事に、彼はようやく馴なれたのである。

「生のままですとも。」

「何等の目的ですかね。」

「目的は有りません。」

「人間が、紳士が、いやしくも学士の名称御所有の貴下が、目的なしに、目的なしに事を行うという理由はあるまいかに考えるですね。」

医学士は思わず激した。

「根、根掘り葉掘り。」

「御都合に因ればです、本署へ御同行を願うことも出来るです。が、紳士としての、御名譽の為にですな。」

「分つた。……分りました。が、別に目的と云つては無い。可哀相だからそれでなんです。」

「……蓋し^{けだ}非常な慈善家でおありですな。成程、いわゆる、医は仁術であるですかね。」

「私はあえて、あえて仁者とは言いませんまい。妹の、姉の。」

「あ！」と一つ握^{にぎりこぶし}拳を口に突込むがごとく言^{ことば}を遮る。

トややしどろの体で、

「姉さんの志です。」

「姉さんの志。ははあ、君は姉のために、嬰児^{あかご}を棄てたんじゃね。」

「何！」

「前刻さきには御令妹であつたかに、ああ、本職は記憶するですな。」

「そうです、そうなんです。」

「何か、年上の妹かね。」

「いや、姉です。」

「答が明瞭を欠いてて不可いかんねえ。……為にならんぞ、君。」

「ですから僕の妹です。」

「ははは、駄目じゃね、君、どうも変じゃね。」

「何が変ですか。」

「都合に因つては本署へ、ですな。」

「馬鹿を仰おっしや有あい！」

「けれども、紳士のために、あえてそれは望まんですなあ。」

「実に、貴下は。」

「誰が雛を飾つたのですか。」

「それは僕だ。」と赫かつとなる。

「おい、」

と云う語調が變つて、

「しつかり答弁をせんと不可^{いか}んねえ。君は、今しがた、……某大学ですかね、病院に寄宿をすると言つたではなかつたか。……大学、病院の宿舍内で、雛を飾つて遊ぶのですな。榮螺、蛤を供うるですな。」

「いかにも。」

「事實は、……本職が、貴下を疑うよりも、むしろ奇怪じゃないですか。」

「それが姉の志ですから。」

「御令妹は、」

「妹は縁附いて、千駄木に居るのです。」

「分りました。」

はじめてわずかに領^{うなず}きなながら、

「姉と云うのは、ですな。」

「それまで、そんなことまですべて言わなければならんですか。……詮^{しかた}方がない、災難と思う……御都合に因つては、それはどこへでもお供をする。が、打明けてお聞かせ下さい。一体、何から起つたお疑いなんですか。」

「聞かせましょう。川へお棄てになったものを、明かにお話しが願いたい?……」

「それは、」

「ははは、やはり（榮螺と蛤）か、そいつは困りましたな。」

「お信じ下さらない。」

「強いて信じたくないとは願わんのです、紳士のために。なぜ、そんなら貴下は、その新聞包みを棄つるに際して、きよろきよろ四辺あたりみまわをしたり、胡乱うろろうゆきき々々往来をしたんじゃね。」

「そりや何です、人が怪みはしまいかと思つたからです。」

「ははあ、人が怪むという事を。それじゃ……御承知であつたですな。」

「ものが、ものだからですから。」と大おおにまごつく。

「何も貝類を川に棄つるに、世間を憚はばる事は無いように思われる……ですね。」

「ですが、……また……貴下のような。」

「すると、本職がです、警官がそれを怪む事は御承知の上ですか。」

「僕には分らん。」

「本職はです、貴下のために御答弁の拙劣なのを惜むです。」

「……勝手にしたまえ。どうしようてんだ。」

「……紳士のために望まない事ですな。」

「うるさ煩い、勝手になさいよ。」

「為にならんぞ！」

「旦那。」

と暗がりに媚かしくなまめ婀娜な声。ほんのりと一重桜、カランと吾妻下駄を、赤電車の過ぎた線路に遠慮なく響かすと、はつと留楠木の薫して、おぼろすか朧を透した霞の姿、夜目にもつま棲を咲せたのは、稲葉家のお孝であつた。

—— 一昨年の春である ——

おなじく妻

二十三

「もし、ちよいと。」

右側の欄干際に引添った二人の傍へ、わきすらりと寄つたが、お端折の棲を取りたそうに、

左を投げた袖ぐるみ、手をふらふらと微酔^{ほろよい}で。

「旦那、その方のお検^{しら}べはまだ済みませんか。」

と斜めに警官を見て、莞爾^{にっこ}り笑う……皓齒^{しらは}も見えて、毛筋の通った、漬島^{つぶし}田は艶麗^{あでやか}である。

警官は二つばかり、無意味に続けざまに咳^{しわぶき}した。

「お前は何かい、ああ。」

「はあ、お次に控えておりました、賤^{しず}の女^めでござんすわいな。」とふらふらする。
分ったか、分らないか、別に心にも留らない様子で、

「何が故に、ああ、出ち来たかい、うむ？」

「はいはい、御意にござりまする。」

と妙に可愛い声して、

「このお方の、」

流^{なが}眇^{しめ}に、ト心あつてか葛木を優しく見ながら、

「お検^つべが済みませんと、後^つが支^{つか}えますのでござんすわいな。」

「何が支える、何が。」

「だって——ああ焦しじりたい。この方は何じやありませんか——御姉おあねえさんの志だって、お雛様に御馳走なすった、お定りの（榮螺と蛤。）——
でもお儀式よ。それを貴下、川中へお放しなすったって、それがでしょう、怪しいって事なんでしょう。

もし、榮螺も蛤も生きていますわ。中でもね……お雛様に飾ったのは、ちらちらろうそく蠟燭の煮えます時、春雨の静かな晩は、口を利くものなんですよ。クク、」
と酸漿ほおずきを鳴らすごとく、

「なんて。——可哀相に、蒸したり焼いたり出来ますかって貴下——おまけにお雛様でしよう——この方の心意気は、よく分つてるじゃありませんか。

私だって放しに来ました、見て下さいな。」

片手を添えて、捧げたのは、錦手にしきでの中皿の、半月形に破れたのに、小さな口紅三つばかり、裡紫の壺二個ふたつ。……その欠皿も、白魚しらおの指に、紅猪口べにちよくのごとく蒼く輝く。

巡查も葛木も瞳を寄せた。

「あら、小さいんで極りの悪い事ね……お価あしが高いもんですから、賤の女でござんすわいな。ほほほほほ。」

桃の花片そこに散る、貝に真珠の心があつて、雛を懐う風情かな。

「お座敷がえりに、我家の門かどから、奴やつこに持たして出たんですがね。途中で威おどかしたもんだから、押放おつぽりだ出して遁にげたんですもの。ヒヤリとしたわよ、真まつぶた二つ。身上おおいたいと大痛事。これを拾う時の拙者が心中、心持というものは、御両所、御推量下されい。

それでも、孝の字大達引おわたてひき。……ねえ、そんな思いをして迄だつて、放しに来たんじゃ

ありませんか。ねえ、現在。」

と左右を見つつ、金魚鉢を覗くごとく、仇気あどけなく自分も視みつめて、

「お分りになつて、旦那。……お許しを受けないと、また叱おこられるとなりません……もう可いいでしよう、ちよいと、放しますよ。」

巡查の、ものも言わない先、つかつかと欄干越。

「一石橋に桃が流れる。どんぶりこ。」

ばつと鳴つて、どどどんと水の音。

両手すがを絶つつて、肩を細く乗出しながら、

「河童かどや、悪戯いたずらをおしでないよ。」

向う岸がしに鷺がしが居て、雲はやや白くなつた。

「失礼しました。」

名刺を返して、

「悪しからず……お名前だけ記憶します。」

と、鉛筆で手帳へその名を。……振向くお孝に見向って、

「お前の名も？……何と云うかい。」

「おなじく妻、とかいて頂戴。」

二十四

「実に難有ありがたかつた、姉さん。」

巡查の靴音が橋の上に留やんで、背後向うしろむきのその黒い影が、探偵小説の挿画さしえのように、保険会社の鉄造りの門の下に、寂しく描えがき出いだされた時、歎息とともに葛木はそう云った。

「お庇かげさままで助かつたんだよ。」

「恐入こいりります、御慰ごいんぎん懃ごんごんで。」

並たんでイたんで見送みおくっていたのが、微笑ほほえんで見向みむかいてお孝。

「でも、驚いたでしょう、貴方。^{あなた}」

「驚いたって、はじめは串戯^{じょうだん}だと思つたし、半頃^{なかごろ}じゃ、わざと意地悪くするんだと思つて癪^{しゃく}にも障りましたがね、段々真面目^{まじめ}なのに気が付いたんです。確に嬰児^{あかんぼ}でも沈めたと思つたらしい。先方^{さき}が職務に忠実なんだと気がつくほど、一度は警察か、と覚悟をしてね——まあ、しかしそれでも活きた証拠に、同じものの放生会^{ほうじょうえ}があつて、僕が放生会に逢つたようだ。で、ほんとうに不思議な位だ。」

「私は毎年放すんですわ。」

「それにした処で、ちようど機会^{おくり}よく、……私は姉の引合せか、と思う。」

「御馳走様。」

と横を向いた、片頬笑みの後毛^{おくれげ}を、男に見せて、婀娜^{あだ}に払い、

「清葉姉さんの、でしょうちよいと。」

「ええ?」

「お驕^{おご}んなさいよ、葛木さん。」

「驕る。……そりやきつとお礼をするがね、どうしてお前さん、私の名を。」

「知っていますよ。」

吾妻下駄をからりと鳴して、摺ずり下る棲すがを上衣コウトの下に直した氣勢けはい。

「今お帰り？ 清葉さんの葛木さん。」

彼は退いて片手を振った。

「止してくれ、先方さきが迷惑をするんだから。」

「酷ひどく御謙遜ね。」

「いや、まったく。」と、慌あわただしく中折なかをぐいと被かぶる。

お孝は覗くようにしながら、

「それとも、これからお出掛けなさるの。……宵にして下さいよ。そうでないと、私たちが見たくつても廊下で御目に掛れない。」

「串じょうだん戯ごを云つちや困る……これから行つて逢えるようなら、橋の上で巡查つかに捉つかまる、

そんな色消しは見せやしない。……

なんのツて暢のんき気らしく云うけれども、實際行掛けに流した方が無事だった。雀と違って、ものがものだし、ちよつと嵩かさは有るしするから、宵の人目を憚はばつたのが、虫が知らしたのかも知れんのだね。ほんとうにこれから帰るんだよ。」

「じゃ、やつぱりお帰りがけね、お待ちなさいよ。」

と抜出ていた簪を、反らした掌てのひらで、スツと留めて、

「そうね……姉さんの御志で、お雛様の榮螺と蛤を、一石橋から流すと云うのに一人ぼっち。それまで檜物町に差向いでいた芸者が、一所に着いて来ない意気じゃ、成程出来ていませんね。」

「勿論。」と外オウバアコオト套の襟を立てる。

「それじゃ風説うわさの通りだよ。」

「や、専ら風説をするのかい。」

「評判さ。お前さん。」

「それはいささか情ない。」

「意気地なし……」

と袂たもとを投げた手を襟に、眉を明るく屹きつと見て、

「男の癖に。」

「これは手酷い？」

「だけでも、可い気味ねえ。」

「何の怨みだね。」

「可いもの好みをするからさ。」

「相済みません。」

葛木は寂しく笑って、

「猛烈なる事巡査以上だ。」

「処へ……私でなく、清葉さんに出て貰いたかったわね。」

「その人でさえ、可いかね、都合のいい時でないと、容易に顔を見せちゃくれない……」

「沢山よ。」と一転くるりと背後うしろ向く。

「いや、見得も外聞も無しにさ。分けて、お前さんは全盛だ。名だけは評判で聞いている。

……この頃に一度挨拶、と思うけれど、呼んでも……ちよつとじゃ見えんのだろうな。」

「見えるも見えないも、葛木さん、御挨拶なんて要るものですか。」

「きつとそう云うだろうと思つた。勿論、たかだか更めて、口で云う礼ぐらい。」

「かえって迷惑。」

「御迷惑。」と口も足も、学士は蹴躓いたようであった。

お孝は澄まして、

「ええ、眞平。」

「それじや時節を待つて下さい。」

「可厭です。」

学士は決然たる態度で、ちよつと帽を取つて、

「名は忘れませんよ、いずれ。」と二ツ三ツ塵をはじきながら、附穗なく線路を斜めに、見えない電車に追わるるごとく。

と顧みて、そこで、ト被直して、杖をついた処、お孝は二つばかり、カラカラと吾

妻下駄を踏鳴らした。

「ただ別れるの。……不意気だねえ、——一石橋の朧夜に、」

四辺を見つつ袖を合せた、——雲を漏れたる洗髪。

「女と二人逢いながら、すたすた（かねやす。）の向うまで、江戸を離れる男ツてのがお前さん江戸にありますか。人目にそうは見えないでも、花のような微酔で、ここに一本咲いたのは、稲葉家のお孝ですよ。清葉さんとは違いますわ。」

「違うから、それだから、」

学士は、つかつかと引返して、

「なおの事、忙しくつて、逢つてはくれまいと言うんじゃないか。」

「ええそうよ、……違いますとも。……清葉さんと違うのはね、今時分から一人じゃ貴方を帰さない事なのよ。」

「お孝さん。」

「葛木さん、もう遅いわ。……電車も無し………巡査に咎められたりなんかして、こんな時はつけが悪い、山の手の夜道だもの、無理をすると追剥おいはぎが出ますよ。」

「もつとも、直ぐにも、挨拶もしたいんだけど、遅い、ね、何しろ遅いからどこと云つて………私は働はたらきが無いのでね。」

「附いてるのが私です。——箱を出たお嬢さんだわ。お座敷はどこにでも。……ちよつと………一所にいらつしやいな。」

と取つて引いた外套がいとうの脇を離すと、トンと突いて、ひらりと退のくや、不意に蹠よろめく葛木を、すつと立って、莞爾にっこり見て、

「その時、きつと御挨拶なさいまし。ほほほ。」

と花やかなものである。

「姉さん。」と抱附くように腰にひつたり、唐突だしぬけに駆寄つたは、若い妓この派手な態度なり——
 当時一本になりたてだった、お孝が秘蔵のお千世なのである。

「まあ、千世ちいちゃんか、……ああ、吃驚びつくりするじゃないか、ねえ。」

二十六

「だって、姉さん。」

「姉さんじゃないよ、……唐突だしぬけに何だねえ、お前、今しがた河岸の角から駆出したじゃないか。」

——露地の駒下駄——は、この婦おんなで、怯おびえた声はその妓であつた。

「緩ゆつくり歩ある行おついても追お着ついて来ないから、内へ帰つたろうと思つたのに。」

「だって、姉さんが威おどすんですもの。私吃驚おどして遁出にげしましたけれど、（お竹蔵。）の前
 でしょう、一人じゃ露地へ入れませんもの、可恐こわくって、私……」

「煙草屋たばこの小母さんに見てお貰いなら可いものを。」

「もう閉りましたの。」

と、小腰を屈めて、欄干の上で、ふっくりした鬢を庇った透して見る手、——橋の側は……変っていた。

「……覗いたけれども、真暗で、もう寝たんですもの。」

「それで何かい、また出掛けて来たのかい。」

「ええ、一人じゃ可恐いんですもの、……でもこつちがまだしもですわ。」

「なんて、お前、お約束だもんだから、帰りに縁日へ廻って、何か買わせようと思つてさ。さあ、行こうよ……ねえ、貴方一所に——千世ちゃん御挨拶をおしでないか。」

「——失礼。……お初に、」

「お初じゃないよ。……貴方、この妓は御存じだわね。」

「両三度——千世ちゃんだっけ。」

「あら、済みません、……誰方。」

と縋り寄るように、外套の襟を覗いて、

「まあ、清葉姉さんに岡惚れの、」

「謝まる。」

と俯向けに、中折帽ぐるみ顔を圧えて、

「何とも面目次第も無い！」

「……清葉命……と顔に書いてあるようだね、口惜いね、明い処でよく見てやろうや。」

「どこへ行く気なんです。」

「縁結びに……西河岸のお地藏様へ。」

肩でトンと寄添いつつ、

「分つたでしょう、貴方、この妓には遠慮は要らない。千世ちゃん、御覧、似合つたかい」。

「あら、姉さんは？」

「お孝さん。」

「（同じく妻。）だわ。……雛の節句のあくる晩、春で、臙で、御縁日、同じ栄螺と蛤を放して、巡查の帳面に、名を並べて、女房と名告つて、一所に詣る西河岸の、お地藏様が縁結び。……これで出来なきや、日本は暗夜だわ。」

肩に掛つた留南奇の袖。

お孝を掠めて腕車が一台。

「あぶね
危え。」

矢のごとし。

「おや、おいでなすつたよ……」

——露地の細路、駒下駄で——

細く透とおつて凄すこい声する。

「いや
可厭、姉さん。」

「それ、兄さんにおつかまり。」

飛つくお千世を葛木に継らせて、ひとり棲つまを挙げて、悠然と前さきへ立って、

「大丈夫、そうすりや、途中で、誰かに逢つても安心でしょう。」

葛木は、扱あしらい兼かねたか、わざと不答こたえず。

「千世ちゃん、お前寒くはないかい。」

果かなせる哉、この一行は、それから参詣を済まして帰りがけに、あの……仲通りで、一人

軒伝いに、包ましく来かかると清葉に、ゆくりなく出逢つたのである。

ほこをよこたえてしをふす
横 槩 賦 詩

二十七

「今晚は……清葉姉さん。」

「清葉姉さん、今晚は。」

そうした事も、あだな渾名を令夫人などと呼ばれる箇条であろう、柔かな毛皮の襟巻を、雪のほそおもて細面おほ蔽うまで、深々と巻いている。……コオト上衣無しで、座敷着の上へくろちりめん黒縮緬の紋着の羽織を着て、胸へ片袖、しとやか温容に褌つまを取る、かさ襲ねた裳もすそしつとりと重そうに、不断さえ、分けて今夜は、何となく、柳を杖に支つかせたい、すんなりと春の夜風に送られて、向うから来る姿。……手を曳ひかれたり、三人つれたり、箱屋と並んで通るのだの、うすさいしき薄彩色したかげろう陽炎が臙おぼろに頭あちわれた風情の連中が、行違つたり、出会つたり、大勢の会釈するのが、あわい間の隔つた時分から——西河岸の露店の裸火を、ほんのりと背後うしろにして軒燈明の寝静まつた色の巷ちまたに引返す、——この三人の目に明かに見えたのである。

「あれだ、玄徳……」

見ても分る。清葉のその土地とちつこ子に対して、徳と位と可なつかしみ懐味の有るのに対して、お孝は

口の中に呟いた。

「千世ちゃん、お放しでないよ、……葛木さん、横町へなんか躲しては卑怯なことよ。…

…」

「何が可恐くつて遁げるものかね、悪い事をした覚は無い。」

「ただ、口説いて見たばかりだつてね。」

「そしてだ、見事に刎ねられたから可いじゃないか。」

「嘘ばかり、口説けもしないんじゃないやありませんか。」

「それも、評判かい。」

「まずね。」

「いや、破れかぶれ、何を隠そう。言出すまいとは思ったけれども、凡夫の浅間しさに、つい、酔った紛れに。」

「おや。」

「が、酒の勢を借りて、と云うのが、打明けた処だろう——しかも今夜——頭から恐入らされたよ。」と、もう一呼吸、帽子を深草、蓑より外套は見窄らしい。

これは蓋し事実なのである。

お孝は、一足前立さきだつた、身を開いて、鈴を張つたような瞳に一目凝視みつめてちよつと頷うなずきながら、

「隠さず、白状をなすつたから、私がつかまつて行くのは堪忍こらして上げます。……打棄うちちやつた清葉さんも豪えらいけれども。……」

で、立直りんつて凜りんとした声、

「拾い手が立派です。……威張こわつていらつしやい。そんなに可恐こわがる事は無いわ。」

「いや、恐れはせん、が、面目めんないのだよ。」と窘すくまるばかり襟うづむに俯向うつむく。

齊ひとしく俯向うつむいて、莞爾にこにこ々と笑つてばかり、黙もくつて、ついて歩行あるいた、お千世ちよが、衣きぬの気勢けいせいにそれと知つて、真先まっさきに、

「今晚けいは、」

「おお、千世ちよちゃん。」

いわゆる口説くはいて匆ねられたと云う恋人に、しかも同じ夜よ。突落つされた丸木橋ながれの流ながれに逆さからつて出逢であつたのである。葛木は次の瞬間きづかを憂慮きづかつて、靴くつの先から冷ひやくなつた。

お孝たかが、横合よこあから、

「御参詣ごまいりですか、清葉きよは姉あねさん。」

「は……」

と、行違つて、温容しとやかに見返りつつ、

「姉さんて、可厭いやですよ、ほほほ、人が悪いわ。」

と、すつと通つた。

知らぬ振か、実際それとも、面おもてを蔽おほうたので認めなかつたか、心付かない様子で通過ぎたの、トお千世たもとが袂たもとを曳いたのに、葛木は宙を行くように、うかうかと思わず別れた。

——お孝——

「姉さんて、可厭ですよ、ほほほ、人が悪いわ。」

二十八

「ちよツ、玄徳め。」

と、投げたように、袖を払つて、拗身すねみに空の雁かりの声。臙おぼろを仰いで、一人立たちどま停つた孫権を見よ。英氣さつそう颯さつそう爽そうそうとしてむしろ架ほこを横よこたえて詩を赤壁に賦ふした、白面の曹操そうそうの概がある。前へ行く二人の影に、その通る声で、こつちから、

「通越し。」

と浴びせたのは、稲葉家の我家へ曲る火の番の辻であつた。

すぐに、カタカタと追おいすが纏まとつて、

「千世ちゃん、清葉さんの長襦袢ながじゆばんを見たかい。」

「ええ、可いわねえ。」

「色が白くて、髪が黒い処へ、細ほっそりしてるから、よく似合うねえ。年紀としよりは派手なんだ

けれど、娘らしく色気が有つて、まことに可い。葛木さん、ちよいと、あすこへ惚れたんじやないこと。」

「馬鹿な。」

「でも可いでしよう。」

「長襦袢なんか、……ちつとも知らない。」

「まあ、長襦袢を見ないで芸者を口説く。……それじゃ暗夜やみよの礫つぶてだわ。だから不可いけないんじ

やありませんか。今度、私が着て見せたいけれど、座敷で踊るんでないとちよつと着憎い。

……口惜くやしいから、この妓こに拵こしらえて着せましようよ。」

やがてお千世が着るようになったのを、後にお孝が気が狂つてから、ふと下に着て舞扇

を弄もてあそんだ、稲葉家の二階の欄干たすきに青柳の糸とともに乱れた、纏もつる玉の緒の可哀あわれを曳ひく、燃え立つ緋ひと、冷い浅黄と、段染だんぞめの麻の葉鹿かの子は、この時見立てたのである事を、ちよつとここで云つて置きたい。

序ついでに記すべき事がある。それは、一石橋からこの火の番の辻に来る、途中で清葉に逢つた前。

縁日はもう引ひき汐しほの、黒い渚なぎさは掃いたように静まった河岸かべの側で、さかり場からはずつと下つて、西河岸の袂たもとあたりに、そこへ……その夜よは、紅い涎よだれ掛かけの飴屋あめやが出ていた。が、それではない。

桜草をお職にした草花の泥鉢、春の野を一ひと欠かきかいて来たらしく無造作に荷を積んだのは帰り支度。踵かかとを臀しりの片膝立。すべりと兀はげた坊主頭しんまめへ縞目しまめの立つた手拭てぬぐいの向むこ願うは巻まき。円顔ほおで頬ほ皺しわの深い口の大きい、笑うと顔一杯になりそうな、半白眉ふっさの房ふりした爺じいさま一人、かんでらの裸火はだかの上へ煙管きせるを俯うつむ向け、灰吹あから狼煙のろしの上る、火氣かきに翳かして、スパスパと吸つて、涎掛あの飴屋あめやと何か云つて、アハハ、と罪も無げに仰向あいて笑つた、……その顔をこちで見ると、葛木かに寄よ継つつて、一石橋いから来たお千世ちよが、

「ああ、お爺おぢさんが。」と云うと齊ひとしく、振ひ払はうようにして駆出かしたのであつた。

「可愛いわね。」

それを透かして、写絵の楽屋のごとき、一筋のかんてらに、顔と姿の写るのを、わざと立淀んで、お孝が視^{なが}めて、

「ねえ、ちよいと。……生意気盛りの、あの時分じや、朋輩の見得や、世間への外聞で、抱^{かかえぬし}主の台所口へ、見すばらしい親身のもの姿が見えると、つんと起^たって、行^ゆきもしないお稽古だの、寝坊が朝湯へ行き兼ねないのに、大道さなか、（お爺さん。）——ええ、お千世はあの人の孫なのよ、——可愛ツちやないのねえ。」

熊の筒袖

二十九

「阿爺^{おやし}どの、阿爺^{おやし}どの。」

「はい、私^{わし}かねえ。」

橋から橋へ、河岸の庫^{くら}の片暗がりを遠慮らしく片側へ寄って、売残りの草花の中に、蝶

の夢には、野末の一軒家の明窓あかりまどで、かんでらの火を置いた。荷は軽そうなが前屈まえかがみに、てくてく帰る……お千世が爺じいの植木屋甚平じんぺい、名と願はちまき巻まきは娑婆しやば気けがある。

背後うしろをのさのさと跟つけて来て、阿爺あやどの。——呼声こゑは朱鞞しゆぎやの大刀だんびら、黒羽二重くろはねふたじゆう、五分ごぶさ月代かやきに似ているが、すでにのさのさである程なれば、そうした凄味すじみな仲蔵ちゆうざうではない。

按あんずるに日本橋の上へは、困った浪花節の大高源吾おおくめんが臆おく面めんもなく顛あらかれるのであるが、いまだ幸に西河岸へ定九郎の出た唄を聞かぬ。……もつともこのあたり、場所は大日本座ひのきの檜舞台であるけれども、河岸は花道ではないのであるから。

変な好みの、萌葱もえぎがかった、釜底かまそこ形かたの帽子をすツぽり、耳へ被かぶさつて眉の隠るるまで低めひずらした、脊せきのずんとある巖がん乗じよう造ぞう。かてて加えて爪皮の掛かつた日和下駄ひやくかたで、見上げるばかり大いおほきのが、もくもくとして肩も胸も腹もなく、ずんぐり腰の下まで着込んだのは、鬣ひくまの皮を剥むいた、毛をそのままにした筒袖である。

これがもし対つたい丈たいで、赤皮の靴を穿はけば、樺太の海賊であるが、腰の下の見すぼらしさで、北海道の定九郎。

見よかし鬣ひくまの袖を突出し、腕うでを頤あごのあたりへ上げ状さまこまぬに拱こまぬいた、手首てしづへ面つらを引傾ひつかたげて、横よこ睨にらみにじろじろと人を見る癖。

「帰るのかあ。」と少し訛る。なま

「はい。」

むかし権三ごんざんは油壺。鯨蔵にしんぐらから出たよな男に、爺さんは、きよとんとする。

熊は件くだんの横睨みで、

「おい、帰るのかあ。」

「家うちへかね。」

「うむ。」と頷く。

「帰りますよ、はい。」

「帰ると……ふん。どこか道寄りはせんのですかい。」と、悪く横柄な癖に時々変徹に丁寧なり。

「道寄りとおっしゃりますと?……」

「何よ、あれだ、お前、今あすこで。」

と人指ひとさし一本、毛の中へちよいと出し、

「あれよ、芸者と少い男わかと三人連に逢うたでしようが。」

「はい、はい。」と大な口おおきを開けて続けざまに頷きながら、目はかえって半ば閉じて、分

別したは老功也。ななり

「知つてるだろうが、姉さんはお孝と云うのだ。少い妓はお千世よ。」

「さようでございます、はい。」となお胡散らしく薄目で見上げる。

「阿爺どのは、どうやら大分懇意らしい様子ですな。」

「ええ、いいえ、些少の。何、お前さま。何かその、私に用事で。」

「火を一つ貸してくれ。」

と云う、煙草より前に、蔵造りの暗い方へ、背を附着け、ずんぐりと小溝を股に挟んで大きく蹲み、帽子の中から、ぎろぎろと四辺を見た。が、落こぼれたような影もまばらで、開いているのは、地藏尊の門と、隣家の煙草屋の店ぐらいに過ぎなかつた。

爺さんは遁腰にげこしに天秤てんびんを捻ひねつて、

「さあ、お点けなさりまし、だが、お早く願いますので、はい。」

三十

「聞くだけ聞けば用は無いだ。」

例の訛つた下卑た語調。庄は利かないが威すと、両切の和煙草を蠟卷の口に挟んで、チユツと吸つて、

「な、阿爺どの、お孝が今だ、お前に別れて帰り際に、（待つてるからおいで、きつとだよ。）と言つたではないですかい。……違やせまいが、な。」

爺さんは、面中の皺へ皺を刻んで、

「ええ、ええ、さような事もござりましたよ。」

「秘さずとも可い。な、阿爺どの。お前は何だ、内の千世の奴の親身でしようが。孫娘に用が有つて逢いに来たことが二三度あるです、で、俺は知つとるですわい。お前は何か、しかし俺の顔は知らんですか。」

と釜底帽、一名（のつぺらぼう。）とも云わるる、青ペラの鍔を撈り上げて、引傾げて剥いで見せたは、酒気も有るか、赤ら顔のずんぐりした、目の細い、しかし眉の迫つた、その癖、小児のような緊の無い口をした血氣壯の漢である。

「へい、いいえ、お顔は存じておりますほどもござりませんが、その上被の召ものござります、お見事な、」

こう云つたのは熊の筒袖。

「稲葉家様の縁起棚の壁でござりますの、縁側などに掛つていて拝見したことがござりますよ。はい。何でござりますか、それでは旦那様は、」

「うむ、内のもの同然だ。」と頤あごを撫でる。

界限かいがいでは、且つ知つて且つ疑う。土地に七不思議が有ればそれはその第一に数えて可い。一石橋の河太郎、露地の駒下駄、お竹蔵などとともに、この熊の皮がそれである。湿し深つぶか そうな膏あぶらぎつたちよんぼり目を膾おつとせ膾せい、毛並の色で赤熊とも人呼んで、いわゆるお孝の兄さんである。……本名五十嵐いがらし伝吾、北海道産物商会主とある名札を持つから、成程膾せい膾せいも売るのであろうが、他に何を商つて、どこに住むか、目下の処いまだ定かならずである。

それ、後家の後見、和尚めいの姪めい、芸者の兄、近頃女学生のお兄様、もつと新しく女優の監督くわくにて候ものは、いずれも瓜うりの蔓つるの茄子なすである。この意味において、知るものは、お孝における熊くまの皮を一方ならず怪あやしむのであつた。

赤熊は指揮さしずする体に頤あごで掬しゃくつて、

「な、阿爺あぢやどの、だから俺には何も秘かくすことは要らんのですわい。」

「ええ、ええ、別に秘かくすではござりません、（これからお茶屋へ行つて一口飲むから、待

つてるからきつとおいで。」と、はい、そのきつとでござりますが、何の、貴下様、こんな爺おやじに御一座が出来ますもので。姉さんがただ御串戯ごじょうだんにおっしやったのでござりますよ。」

「串戯ではなかつたがい。俺はな、あの、了しまいかけた見世物小屋の裏口しやがに蹲しゃがんで聞いとつたんだ。」

赤熊のこの容態では、成程たちぎせき立聴たちぎせきをする隠れ場所に、見世物小屋を選ばねばならなかつたろう、と思うほど、薄気味の悪い、その見世物は、人間の顔の彪犬むくであつた。

「それは、もし、万ヶ一ほんとうに仰有おっしやつて遣わされたにしました処で、私てまえは始めからその気では聞きませなんだよ。」

「どうでも可い。それは構わんが、俺が聞きたいのは、お前まんに後から来い、と云うて、先へ行つたその家の名ですわい。自分の内でない事は知れておる。……そりやどこですかい、阿爺どの。」

「……………」

「ああん、阿爺い。」

「さあ、何とか云うお茶屋であつた。」と、独ひとりごと言ことのように云つて、顛はちまき卷まきを反そらして

仰向く。

三十一

赤熊は、チエと俯向うつむけの股へ唾つばを吐いて、

「今時分、どこの茶屋が起きておろうで。待合に相違ないがい、阿爺あぢいい、秘かくさんと云え、阿爺あぢいい。自分が来いと云われた先の名を忘れると云うがあるもんですかい。悪くすると為にならんですぞ。」と、教員らしい口も利く。

「さあ、何か存じません、待合さんかも、それは分りませんが、てんで私てまえの方で伺う気はござりませんで、頭かしら字も覚えませぬよ、はい。」

「で、何か。」

とちよつと睨ねめつけた、が更あらたつて、

「あの、野郎は何かい、あれは、ついぞ見掛けぬ奴だが、阿爺あぢいは知つとるのですかい、奴をですがい。」

「ええ、私てまえも今までお見掛け申しはしませんので、はい、いずれお客人でござりましよう

「客には違わんで、それや違わんで。どっちの客だ知つとるだろうが。」

「それは、もし、お尋ねまでもござりません、孫めがお附き申しておりましたよ。で、

(旦那様、お初に。どうぞ何分。)と私御挨拶をしました処で、爺の口から旦那様が嬉しい、飲ましてやろう、と姉さんが申されたのでござりましたよ。」

跡方も無い嘘は吐けぬ。……爺さんは実に、前刻にお孝にもその由を話したが……平時は、縁日廻りをするにも、お千世が左棲を取るこの河岸あたりは憚っていたのである。が、抱主の家へは自分の了簡でも遠慮をするだけ、可愛い孫の顔は、長者星ほど宵から目先にちらつくので、同じ年齢の、同じ風俗の若い妓でも、同じ土地で見たさの余り、ふとこの夜に限って、西河岸の隅へ出たのであった。

帰りがけの霞の空の、真中を蔽う雲を抜けて、かんでらの前へ、飛出したお千世の姿は、爺さんの目には、背後の蔵から昨夜の雛が抜出したように見えて、あつと腰を抜いて、ぺたんと胡坐を搔いて、ものを言うより莞爾々々としていたのである。

その間にお孝は、葛木と二人で参詣を済まして、知らぬ振して帰るも可い、が、かえつて気まづく思わせよう。

(お爺さんけしぼうず虞美人草はないの、ぱつと散る。)桜草の前へ立つた時、……お孝に挨拶をした爺さんが、(これは旦那様。)とその時葛木にお辞儀をしたので、

地蔵様へお参りして、縁を結んで来た矢前やさき——旦那様は嬉しいね——で、それから引上げる、待合の名をそこで教えて、旦那様に見立ててくれた礼心に、お爺さんには今夜一晩……私が玉をつけて可愛いお千世を抱かして上げよう。……来て一所にお寝、串戯じょうだんじやない、きつと待つてる。……と云った。

仔細しさいはそうした事なのである。

赤熊あらかわが顕れた。

この毛むくじやらを、稲葉家の縁起棚わきの傍で見た事があるというだけ、その血相と、意気込みで、様子を悟つて、爺さんは、やがて、押おっくり返し何と言われても、行つた先を饒し舌やべらなかつた事は言うまでもない。

「御自分、ついて行つて見なさりや可よかつた。」

何か知らぬが、お千世が世話になる稲葉家に退のかぬ中の男、と思うだけ、虫を堪こらえて飽くまで下手に出た爺さんも、余りの押問答、悪執わるしつこ拗こさに、こう言つて焦じれたほどである。知らぬ知らぬで、事は済む、問われる方が焦これたくらい、言ことば数を尽すだけ、問う方

の苛立ち加減は尋常ではない！
「この業突張、何だとツ。」

縁日がえり

三十二

「まあ、お前さん、怪我をしやしませんか。」

植木屋の布子の肩に、手を柔かに掛けた、弱腰も撓むと見える帯腰に、もの優しい羽織の紋の、藤の細いは清葉であった。

「拷問してやる。」

赫となつた赤熊が、握拳を被ると斉しく、かんでらが飛んで、真暗に桜草が転げて覆ると、続いて、両手で頬を抱えて、爺さんは横倒れ。

苦とも言わず、踏のめす気か足を挙げた赤熊は、四辺に人は、邪魔は、と見る目に、御堂の灯に送らるるように、参詣を済まして出た……清葉が、朧の町に、明いばかりの立

姿。……それと見て、つかつかと、小刻みながら影が映す、衣の色香を一目見ると、じたじたとなつて胸震いに立竄むや否や、狼狽加減もよつぽどな、一度駆出したのを、面喰つて逆戻りで、寄つて来る清葉の前を、真角に切つて飛んで遁げた、赤熊の周章てた形は、見る見る日本橋の袂へ小さくなつて、夜中に走る鼬に似ていた。

そつちは見返もしないのである。

「お年寄を、こんなこと、何て乱暴なんだろう。」

「はいはい。」

爺さんは居ざり起きて、自分がたしなめられたごとく、畏つて、やっと口を利く。……

「恐入りましたでござります、はい。」

「音がしましたわ、申戯ではありません。さぞお痛かつたでしょうねえ。怪我をした

んじやありませんか。」

前刻から響いていた、鉄棒の音が、ふツと留むと、さっさつと沈めた鞋の響き。……

夜廻りの威勢の可いのが、肩を並べてずつと寄つた。

「どうした、」

「どうしたんだえ。——やあ、姉さん。」

「頭かしらたち、御苦勞です。……今、そこへ駆出して行つた大な男おおきなんだよ。」

「臆おつとせ臆せい臆せい。」

「赤熊。」と二人は囁ささやいて、ちよつと目配めくばせ。

「姉さん、こりや何かい、お前さんお係かかり合あいなんですかい。」

「いいえ、私はただ通りかかつたばかりなんです。でもまあ遁げてくれて可かつたけれど、抵むかつて来たらどうしようかと思つたよ。……可哀相に、綺麗な植木の花が。」

清葉は桜草の泥鉢を、一鉢起して持ちながら、

「手伝つて、そして、よく見て上げて下さいな。遅うござんすから、私は失礼ですが。」

一人は組合の看板を、しゃん、と一ツ膝に控えて、

「御心配にや及びません。見てやりますとも。」

「では、お爺さん、お大事になさいまし。お氣をつけなさいましよ。」

「はいはい、あなた方の御志、孫も幸福しあわせ。それが嬉しゆうござります。」

とツちて、着きも無いことを云うのを、しんみりと聞いて、清葉はなぜか、ほろりとしたが、一石橋の方へ身を開いて向返つた処で、衣紋をつくつて、ちよつと、手招まねく。

鉄棒小脇に搔込みたるが一人、心得てつかつかと寄つた。

「ええ……え、腕車くくるまに、成程。ええ可うがす、可うがすとも。そりや仔細わけえ有りやしません。何、私わつしたちに。串戯くわんぎじゃありません。姉さん、串……、そうですかい、済まねえな。」
そのまま見送つて小戻りする。この徒てあいも清葉しよが戻もどりりみち路ちかたの方たがを違ちがえて、なぞえに一石橋の方へ廻つたのは知らずにいたろう。

サの字千鳥

三十三

「何なにだか、唐突だしぬけに謎見なぞみたような事だけれど、それが今夜の事の抑々そもそもというのだから、恥辱はじも忘れて話すんだがね……」

上野から日本橋へ来る電車——確か大門だいもん行だつたと思う——品川行にした処で、あの往復切符、勿論乗換札じやないのだよ。……その往ゆきか復かえりか、どっちにしろ切符の表に、片仮名の（サ）の字が一字、何か書いてあると思ひますか。」

葛木は卓子台ちゃぶだいに乗せた寄鍋よかまに着けようとした箸はしを、（まだ。）とお孝おたかに注意ちゆういされて、

そのまま控えながら話す。

お孝は時に、猪口ちよこを取つて、お千世の酌を受けたのである。

「サの字。」

「考えるに及ばないよ、そんな字は一つも無い。ところが、松坂屋の前を越して、あそこは、黒門町を曲ろうとする処だ。……ふつと！ 心から胸へ、衣きものの襟へ突通るような妙な事を思つたのが、その（サ）の字、左の手に持っていた切符を視みて、そこにサの字が一字あつたら、それから行つて逢うつもり。」

「清葉さん。」と薄目で見越して、猪口は紅を嚙かんだかと思う、微笑ほほえみのお孝の唇。

「……止そう、そんな事を云うんなら。」と葛木は苦笑して、棒縞お召の寝々衣ねんねこを羽織つた、胡坐あぐらながら、両手を両方へ端然きちんと置く。

潰島つぶし田を正まっすぐ的に見せて、卓子台の端にぴたりと俯向うつむき、

「謝罪あやまつた、謝罪つた。たつて手前の方から願いましたものを。千世ちいちゃん、御免なさい、と云つて、お前さんもおややまり。」と言憎いから先繰りに訛なまつて置く。

「あら、姉さん、私は何にも。」とお千世は熱かつた銚子ちょうしを持添えた、はつと薫る手ハンケ巾チを、そのまま銚子を撫でて云う。

「だって、今、（行つて逢うつもり。）と、こちらがお言いなすつた時は、直ぐに清葉さんとお思いだろう。」

「ええ、そりや思つてよ。」

「そら御覽、思つたつて饒舌しやべつたつて、罪は同じくらいだよ。それに、謝罪あやまするには、お前さんの方が役者が上だからさ、よう、ちよいと。」

「貴方、御免なさいまし、ほほほ。」

葛木はしかし考えさせられた様子が見えて、

「成程、思つたつて饒舌しやべつたつて、違いは無いか。いや、そうまでは、なかなか悟れない。……と云うのはやはり色気なんです。……極きまりは悪いがね。」

そのサの字なんだ。切符の表に、有るべき理由の無い一字が、もし有つたら、いつも控え控え断念あきらめて引退ひきさる、その心がきつと届くぞ！……想が叶う。打明けて言えば清葉が言う事を肯きいてくれる。思切つて打着ぶつかろう。サの字が無ければ、今夜も優柔おとなしく、と言えば体裁よが可よい、指を銜くわえて引込もうと、吃きつと思つて熟じつと視ると、波打つ胸の切符に寄せ、夕日に赤い渚なみぎを切つて、千鳥が飛ぶように、サの字が見えた。」

「ああ。」とその千鳥を見るように、引入れられて、屏風はずれに前髪まぶたを上げた、瞼まぶたの色。

お孝の瞳は恍惚と、湯気の朧に美しい。

葛木も連れられて、夢を見るように面を合せて、

「明いね、ここの電燈は何燭だろう。」

「五燭よ、ほほほほ。」とお千世が花やかな笑声。鍋は暖く霞んだのである。

三十四

「あれ……この妓が笑う。」

と葛木も笑いながら、

「客がこれだからその筈の事だけれども、私の行く家が、元来甚だ立派でないのだ。ね、

座敷の電燈が五燭なんだよ。平時は、そんなでもなかったが、過般中、連があつて、二

人で出掛けた、その時、その千世ちゃんが来たんだね。確か……」

お千世が頷く。

「覚えている、それを知って、笑うんだ。私のような、向う見ずに女に目の眩んだものに取りつては、電燈の暗いのなんぞちつとも気にはならないがね、同伴の男は驚きましたぜ。

何しろ火鉢に掴まって、しばらく気を静めていると、襖や障子が朦朧と頭れるけれども、坐った当座は、人顔も見えないという始末だからね、余力を入れて物を見るので、頭が痛いと言うんだよ。その妓も知ってるけれども、同伴の男が。

客の無い閑な家だし、不景気だし、いずれ経済上の都合だろうから、余分な御祝儀の出来ない客が、（明を直せ。）も殿様じみるから、同じメートルで光は三倍強という重宝な電球ね、あいつを寄附しようとなつて、……来ていた清葉が、

「東西、黙つて。」

と笑顔をお千世に向けて、トわぎと睨んで見せる。

「私、何にも言やしませんわ。」

「いや、何とでもお言い、こうなれば意地で饒舌る。」と呶と煽る。

「お酌。」

と自分でお孝が、ツツと銚子を向けて、

「それに限るの。貴郎は気が弱いから可厭さ。」

「ところで、……清葉が下階へ下りて、……近所だからね、自分の内へ電話を掛けて、婢にいいつけて、通りへ買いに遣つた、タングステンが、やがて紙包みになつて頭れて、芝

居の月の書割のように明るくなつた。

「そこが、お鹿（待合の名。）の上段の間さ。」

「あら、串戯の間、可いわねえ。」

「いや、その串戯じゃない、御本陣式、最上等の座敷の意味だ。

人の好い、気の好い、（お鹿。）の女房が喜んで、貴方の座敷だ——貴方の座敷だと云つて通す。まるで新座敷一ツ建増した勢だ。素ばらしいもんだね、こう見えても。」

「さすがはね。」

「串戯じゃない、……いや、その串戯ではない座敷の上段へ、今夜も通された——サの字の謎から、ずっと電車で此地へ来てだよ。……」

平時と違つて、妙に胸がどきつくのさ。頭の頂上へ円鬚をちよんと乗せた罪の無いお鹿の女房が、寂寞した中へお客だから、喜んで莞爾々々するのさえ、どうやら意見でもしそうでならない。

飯は済んだ、と云うのは、上野から電車で此地へ来る前に、朋達三人で、あの辺の西洋料理で夕飯を食べた。そこで飲んでね、もう大分酔つていたんです。可訝くふらふらするくらい。その勢で、かつとなる目の颯と赤い中へ、稲妻と見たサの字なんだ。

考えれば、千鳥の知らせでもなく、恋の神のおつげでもない。酒のサの字だったかも知れないものを。……その酒さえ、弱身のある人が来て対向いさしむかになると、臆面の無いほてつた顔を、一皮剥むかれるように醒さめるんだからの。お察しものです。」

カチリと力無く猪口を置く。

梅ヶ枝の手水鉢

三十五

「座敷へ入ると間も無くさ、びりびり硝子戸がらすどなんざ叩破りそうな勢、がらん、どん、どたと豪えらい騒さわぎで、芸者交りに四五人の同勢が、鼻唄なうたやら、高たか笑わらい。喚わめくのが混多ごったになつてね。上り込むと、これが狭い廊下を一つ置いた隣座敷へ陣取つて、危いわ、と女の声。どたと襖ふすまに打ぶつかる音。どしん、と寝転ぶ音。——楠くすのきの正まさ成しげがーと梅ヶ枝えの手水鉢ちようずばちで唄い出す。

座敷を取替えて上げよう、こつちは一人だから。……第一寄進に着いた電燈に対しても

お鹿の女房が辞退するのを、遠慮は要らない、で直ぐに、あの、前刻さつきのあれ、雛ひなの栄螺さやえと蛤はまぐりの新聞包みを振下ぶらさげて出た。が、入交いれかわるのに、隣の客と顔が合うから、私は裏梯子うらばしごを下りて、鉢前はちさきへちよつと立った。……

ここに、朝顔形の瀬戸の手水鉢が有るんです。これがまた清葉が寄進に附いたのさ。お鹿の内には、まだ開業当時というので手水鉢も柄杓ひしやくも無かった。湯殿の留桶とめおけに水を汲んで、簀すの子の上に出してある。恐らく待合の手水鉢に柄杓ひしやくの無いのは、厠かわやに戸の無いより始末が悪い。右は早速調ちようだつ達に及んだけれど、桶はそのままになっていたのを、清葉が心付いて、いつか、女房が勘定を届けか何か、滝の家へ出向いた時、火事見舞に貰ったのが、まだ使わないで新しい、お役に立てば、と持たして返した。……

知つての通り、清葉の家は、去年の火事に焼けたんだね。

何ですよ、奥庭に有った手水鉢を見ましたがね、青銅のこんな形、とお鹿の女房は仕方をして、そして竜たつの口を捻ひねると、ザアです。焼けてもびくともなさらない。すっかり青苔を帯びた所が好いなんのツて、私に話した。

惚れた芸者の工面の可いのは、客たるもの、無心を言われるよりなお怯ひるむ、……ここでまた怯ひるまされた。

清葉の手水鉢、でいささか酔覚の気味。二階は梅ヶ枝の手水鉢。いや、楠の正成だ。…
…大将も惜い事に、懐中都合は悪かつたね。

二階へ返つて、小座敷へ坐直る、と下階で電話を掛けます。また冷評すだろうが、待人の名が聞える。」

二人は黙つて微笑むのみ。

「ねえ、そうした電話が筒抜けに耳へ響くのは、事は違うが、鳥屋の二階で、軍鶏の鳴声を聞くのと肖ている。故に君子は庖厨を遠ざく……こりや分るまいが、大尽は茶屋の構の大からんことを望むのだとね。

（誰だ、誰だ、誰を掛けてるんだ。）（何、清葉だ、清葉とは誰だ。）一座の芸者が小さな声で、（滝の家の姉さんよ。）（馬鹿、清葉が、こんな家へ来るもんか。）

と隣座敷で憚らない高話。」

「お酌ぎ……千世ちゃん、生意気だね。お孝なら飛んで来る、と言やしないか。」

「誰も、そんな事を言ひはしませんよ。」とお千世が宥めるように優しく云つて内端に酌ぐ。

「口惜いねえ、……（清葉が来るもんか。）呼んで下すつた、それが私で、お孝が、こん

な家へと云つて貰いたかつた。……私はそこへ手水鉢なんぞじやない、摺鉢と采配を両手に持つて、肌脱ぎになつて駆込んで驚かしてやつたものを。」

「でも、何だ、お前さんとは、今しがた逢つたばかりじやないか。」

「ですから、今度つから、楠の正成で、梅ヶ枝をお呼びなさいよ、……その手水鉢へ、私なら三百円入れてやりたい、とこつちでも思うばかりだから、先方さまでも、お孝がこんな家へ来るもんか、とは言わないわね。……貴方お盃を下さいな、……チョツ口惜いねえ、清葉さんは。……」

三十六

「少々加減が悪くつて、内で寝ていた、と云つて、黒の紋もんつき着の羽織で、清葉が座敷へ。

前後七年ばかりの間、内端に打解けたような、そんな風采なりをしていたのは初めてかと思う。もつともちよつとひく感冒かぜと、眩暈めまいは持病で、都合に因れば仮託かこつけでね——以前、私の朋達ともだちが一人、これは馴染なじみが有つて、別なある待合へ行つた頃——ちよいちよい誘われて出掛けた時分には、のべつに感冒と眩暈で、いくら待つても通つて見ても、一度も逢

えた事は無かつたんだ。もう断念^{あきら}めていた処、その後宴会があつて、あるお茶屋へ行くと、その時、しばらく振で顔を見た。何だか、打絶えていた親類に思掛けず出逢つたような可^な懐^{つかし}い気がしたつけ。それが縁で、……時々、と云つても月に二三度、そのお茶屋で呼ぶとね、三度に二度は来てくれる。

その女中頭^{がしら}をしていたんだ、お鹿の女房と云うのは。」

「知っていますわ。」

「気心は知つたり、遠慮は無しで、そこへ行くようになってから、余り月日を置かないで、顔だけでも見るのは、やつと一昨年^{おとし}の夏からだと思う。……

ところで、よく、あんなで座敷が勤まるよ。……もつとも私なんぞは座敷の中へは入るまいが、あの人と来たら、煙草は喫^のまず、酒は飲まず、」

「ただ、貯^{たま}るばかり。」

「まあ、堪忍したまえ。猪口は唇へ点^つけるくらいに過ぎますまい、朝顔の花を嚙^かむように

「敗^{まけ}軍の鬱^{うつ}憤^{ぶん}ばらしに、そのくらいな事は言つても可いのね。」

「堪忍したまえ。酒を飲まない芸^{げい}妓^{しや}ぐらい口説き憎いものは無い。」

「じゃ、そつちこつち、当つて見たの。」

「いや、人はどうだか私一人としてはなんだ。ところで今夜だ——御飯は済んだと云う、御粥おかゆを食べたんだとさ。」

「御養生ごじやうせいでおいで遊ばすのね。……それから、」

「お鹿かみさんの女房も、暖るものが可かろうと云うんで、桶おけうどん餛飩。」

「おやおやおや。」とお孝は、がっかり、も一つうんざりしたらしい。

「……ここに八やつがしら頭の甘煮うまにと云うのが有ります。」

と葛木は、小皿と猪口の間を、卓ちやふだい子台の上で劃しきつて、

「一度讚ほめたが、以来お鹿の自慢ほでね、きつと通しものに乗つて出ます。……今日あたり土曜から日曜で私が来そうだと思ふ日は、煮て置くんだとお世辞を言った。が、ああ、十とウに九ツこれも見納めになろうも知れん、と云うのは（サの字。）の謎の事。……一度口へ出して、ピシリと遣られる、二度とは面おもては向けられまい、お鹿も今夜ぎりと思ふと何となく胸が迫つて卓子台の上が暗かつた……」

お孝はポンと楊枝ようじをくべた、すうツと帯ゆすを揺つて焦じれたそうに、

「ちよいと、まあ、待つて頂戴よ。お粥腹のお姫ひいさま様を饅飩まんじゅうで口説いて、八頭を見て泣い

たつて、まるでお精霊様の濡場のようだね。よく、それでも生命があつて帰つて来たよ。しっかりと下さいよ、後生だから、お前さん、私が附いてるから。」

で、するり卓子台の縁を這つて、葛木の膝に手を掛ける。

「ああ、痛い。」

そのまま、背中をトンと凭たして、瞳を返すと、お千世を見て、

「どうした、お爺さんは遅いじゃないか。」

「あら、姉さん、来るもんですか。」

「私は来るつもりで待つていたのに——その襖を開けて御覧よ、居るかも知れない。」

「まあ、」と可愛く、目をぼちぼち。

「可いからちよいと御覧。」

と言う、香の煙に巻かれたように、跪いて細目に開けると、翠帳紅圍に、枕が三つ。床の柱に桜の初花。

口紅

三十七

「御維新ちつと前だつて、芝の大門通りの足袋屋に名代娘の美人が有つた。

その時分、増上寺の坊さんは可恐しく金を使ったそうでね、怪しからないのは居周囲の堅気の女房で、内々囲われていたのさえ有ると言うのさ。その増上寺に、年少な美僧で道心堅固な俊才のが一人あつた。夏の晩方、表町へ買物が有つて、麻の法衣で、ごそごそと通掛ると、その足袋屋の小僧の、店前へ水を打っていた奴、太粗雑だから、ざつと刎ねて、坊さんが穿きたての新しい白足袋を泥だらけにしたんだとね。……当時は電車で、毎々の事だが。

娘が夕化粧の結綿で駆出して、是非、と云つて腰を掛さして、そこは商売物です。直ぐに足袋を穿替えさせるとなつて、かねて大切なお山の若旦那だから、打たての水に棲を取ると、お極りの緋縮緬をちらりと挟んで、つくまつて坊さんの汚れた足袋を脱がそうとすると、紐なんです。……結んだやつが濡れたと来て、急には解けなかつた為に口を添えた、皓齒でその、足袋の紐に口紅の附いたのを見て、晩方の土の紺泥に、真紅の蓮花が咲いたように迷出して、大墮落をしたと言う、いずれ墮落して還俗だろうさ。

こつちは悔悟かいごして、坊主にでもなろうと云うんだ。……いづれ精進には縁があります。自棄やけだから序ついでに言うが、……私は、はじめて逢った時、二十三の年、……高等学校を出ると、祝だと云つて連出して、村田屋で御飯おごを驕おごつたものがある。酒は飲めず、畏かしこまつて煙草たばこばかり吐ふかしていたので、愛想に一本、ちよつと吸つて、帰りがけにくれたのが、」

「承知々々。」とまた笑う。

「でね、口紅がついていたんだ。」

「氣障きざだ。」とお孝は手酌である。

「坊主には縁があるつて事だよ。」

軽く清ゆすいで盃をさしながら、

「処をまた還俗さしてあげるから、もとツこだわね。可哀相に……そのかわり小鰭こはだの鮠うなぎを売りやしないか。」

と倦怠だるそうに居直つて、

「もし、その吸口はどう遊あそばしたえ？……後学の為に承り置きたい……ものでござるな。……よ。ほんとうに、」

「路傍みちばたでは踏つけよう、溝どぶも氣になる……一石橋から流したよ。」

「ああ、崇たかりますねえ。そんな男を、私も因果だ。」

「恐入ります、が聞いて下さい。」

「聞いて遣わす、お酌をおし……御免なさいよ。」といよいよ酔う。

「そうだ——ああお銚子が冷めました、とこう、清葉が、片手で持って、棲の深い、すんなりとした膝を斜はすつかいに火鉢に寄せて、暖めるのに炭火に翳かきす、と節の長い紅宝王ルビイを嵌はめたその美しい白い手が一つ。親か、姉か、見えない空から、手だけでおき圧えて、毒な酒はお飲みでない、と親身に言ってくれるように、トその片手だけ熟じつと見たんだ。……」

お孝が、ふと無意識の裡うちに、一種の暗示を与えられたように、掌てのひらを反らしながら片手の指を額あじに隠した。その指には、白金プラチナの小蛇こへびの目に、小さな黒金剛石くろダイヤモンドを象嵌ぞうかんしたのが、影の白魚のごとく絡まつわっていたのである。

後で知れた、——衣類の紋も、同じ白色の小蛇の巻いた渦巻であった。

「時に、隣の間の正成も、ふと音の消えた時、違棚の上で、チャチャ、と囁ささやくように啼ないたものがある。声のしたのは、蛤かきです。動いたと見えて、ガサガサと新聞包が揺れたらうではないか。」

三十八

「(栄螺と蛤です。……)」

思掛けない音に、ちよつと驚いた顔をした清葉にそう云つて、土産じやない、汐干では時節が違う。……雖に供えたのを放生会、汐入の川へ流しに來たので、雖は姉から預かつたのを祭っている……先祖の位牌は、妹が一人あつて、それが斉眉く、と言つたんだね。

そして御姉妹は、と清葉が訊くから、(実は。)と出ました。……実は、それに就いて、と言つたもんです。何に就いてだが、自分にも分らない。けれどもね……何に就いて、あし掛七年の間、ただ一度も、氣障な、可厭らしい、そんな事を、言出せそうな機会と云つては一度も無かつた。

いつも、座敷の服装で、きちんと芸者と云う鎧を着ているのから見れば、羽織で櫛巻だけに、客に取つては馴れ易い。覚悟は有つたし、サの字の謎。……

実は、と目を瞑つて切掛けたが、からツきし二の太刀が続きません。酌をして下さい、と一口に飲んでまた飲んだ飲んだ。もう一つ、もう一つ酌いで欲しい、また、と立続けに

引掛^{ひっか}けても、千万無量の思が、まるで、早鐘のごとくになって、ドキドキと胸へ撞^{つき}上げるから、酒なぎどこへ消えるやら。

口も濡れないどころか舌が乾く。……また、清葉が何にも言わずに、あんなに煽^{あお}切^{つき}るのも道理だ、と断念^{あきら}めたらしく見えて、黙^もつて酌^つぐんだよ。

ああ、酔^よつた。」

と袖を擦^つ並^{むり}べたお孝の肩に、頭^{かぶ}を支^さたそうに頹^{たふ}然^{ぜん}となる。のをお孝が向^むうへ、片手^{ひとて}で邪^{じや}慳^{けん}らしく、トンと突^つ戻^もした、と思うと、その手を直^{ただ}ぐに、葛木^{くずき}の膝^{ひざ}へ。敷^敷いて重^{おも}ねた腕^{うで}枕^{まくら}に、ころりと横^{よこ}になつて、爪^{つめ}先^{さき}をすつと流^{なが}す、と靡^{なび}いた腰^{こし}へ、男^{おとこ}の寝^ね々^ね衣^えの裾^{すそ}を曳^ひいて、半^{はん}ばを掛^かけた。……

「肝^{かん}心^{しん}な処^{ところ}、それから。」と自^{みづか}若^{わか}として言^いう。

「弱^{よわ}つた……」

「私^{わたし}を口^{くち}説^{せつ}く気^きで、可^ようござんすか。ま^まつたくは、あ^あの御^ご守^{しゅ}殿^{でん}より、私^{わたし}の方が口^{くち}説^{せつ}くには煩^{むずか}いんだから、その積^{つも}り^りで、し^しつかりして。」

「破^{やぶ}れかぶれは初^{はつ}手^てからだ。構^{かま}うもんか！……更^{あらた}つて（清^{せい}葉^{えい}さん）。……」

「黙^もつて顔^{かほ}を見^みましたかい。」

「惚れたと云うのが不躰ぶしつげであるなら、可懐なつかしいんです、床ゆかしいんだ、慕したわしいんです。……私に一人の姉がある。姉は人の妾めかけだった。……恋ここがれた若い男が有ったのに、生命いのちにかえてある相場師の妾めかけになった……それは弟の為ためだったんです。

私の父親は医師いしやだったんだよ。……と云うお医師も、築地、本郷、駿河台は本場だけでも、薬研堀やげんぼりの朝湯あそに行つて、二合半こなから引掛けてから脈を取つたんだそうだから、医師の方では場違いだね。

広袖びとてらを着たまま亡くなると、看病やつれの結び髪かみを解きほぐす間も無しに、母親も後を追う。

姉は二十はたち、私は十三、妹は十一で、六十を越して祖母おばあさんが、あとに残つた……私と妹は奉公に出たんです。

姉は祖母おばあさんをかかえて、裏長屋に、間借りをして、そこで、何か内職をして露命ろめいをつないでいる。私が小僧こぞうになったのは、赤坂台町の葉茶屋はぢやだった。「

膝ひざに島田しまだを乗せながら、葛木かづきの色は白澄しろすみんだ。

チャランチャラン、と河岸通がしんどう、五郎兵衛町ごろうべゑぢょうを出番しゅばんの金棒かねぼう。

一重桜

三十九

「忘れもしない、ずっと以前——今夜で言えば昨夜ゆうべだね——雛の節句に大雪の降った事がある。その日、両国向うの得客とくき先へ配達する品があつて、それは一番後廻、途中方々へ届けながら箱車を曳いて、草鞋わらじばき穿で、小僧で廻つた。日が暮れたんです。両国の橋を引返した時の寒さつたら、骨まで透とおつて、今思出しても震えちまう。

何の事は無い、山から小僧が泣いて来たんだ。

人通りは全然まるく無し、大川端の吹雪の中を通魔のように駆けて通る郵便配達が、たつた一人。……それが立停まつて、チョツ可哀相にと云つた。……声を出して泣きながら、声も涸かれて、やつと薬研堀の裏長屋の姉の内の台所口へ着いた、と思うと感覚おぼえが無い。

浸々と降る雪の中に、ただどしんと云う音がしたつて、姉が後で言い言ひした。

ところがどうです……妹は妹で、その前夜から奉公先を病気で下つて、内で寝ている。

これがまた悲惨でね。……聞いて見ると、猫の小間使に行つていたんだ。主人夫婦が可お

恐い猫好きで、その為に奉公人一人給金を出して抱えるほどだから、その手数てあひの掛る事と云つたら無い、お刺まげに御秘蔵が女猫と来て、産の時などは徹夜よっぴて、附つきり。生れた小猫に、すぐにまた色気が着くと、何とどうです、不潔物の始末なんざ人間なみにさせられる。……処へ、妹が女の子の癖に、かねて猫嫌いと来ていたんだものね。死ぬほどの思いで、辛抱はしたんだが、遣切れなくなつて煩いついた。(少し変だ、顔を洗うのに澄まして片手で撫でる、気を鎮めるように。)と言つて、主人から注意があつたんだとね。

祖母ばあさんは祖母で、目を煩つてほとんど見えない。二人の孫を手探りにして赤い涙を流すんじゃないか。

私は気が付くと、その夜、——後で妹の話を聞いて慄然ぞつとして飛んで出たが、猫行火ねこあんかに噛かじりつ着ついていて、豆煎まめいりを頬張つたが、余り腹が空いて口が乾いて咽喉のどへ通らないから、番茶をかけて搔かっこ込んだつて。

内職の片手間に、近所の小女こむすめに、姉が阪東を少々、祖母さんが宵は待まちぐらいを教へていたから、豆煎は到来ものです。

(白酒をおあがり、晋ちゃん、私が縁起直しに鉢の木を御馳走しよう。)と、鍼落はりおちしの長火鉢の前へ、俎まないたと庖丁ばうていを持出して、雛ひなに飾さざえつた栄螺はまぐりと蛤はまぐりをおろしたんだ。

重代の雛は、掛物より良い値がついて、疾に売った。有合させたのは土彩色の一もん雛です。中にね、——潰島田に水色の手柄を掛けた——年数が経って、簪も抜けたり、その鬢の毛も凄いような、白い顔に解れたが——一重桜の枝を持つて、袖で抱くようにした京人形、私たち妹も、物心覚えてから、姉に肖ている、姉さんだ姉さんだと云い云いしたのが、寂しくその蜜柑箱に立つていた。

それをね、姿見を見る形に、姉が顔を合せると、そこへ雪明りが映して蒼くなるように思ったよ。姉が熟と視めていたが、何と思つたか、榮螺と蛤を旧へ直すと、入かわりに壇へ飾つたその人形を取つて、俎の上へ乗せたつけ……」

「千世ちゃん。」

と葛木の膝枕のまま、お孝が呼んだ。

「はあ。」と襖越しに返事した。お千世は、前刻そこを見せられた序に、……（眠かろう先へお寝な。）と言われたのである。そして寂寞して今しがた、ずるずると帯を解いた氣勢がした。

「寒くなつた、搔卷かいまきをおくれ。」

とお孝は曲げた腕かいなを柔く畳に落して、手をかえた小袖の縞しまを、指に掛けつつ男の膝。

「姉さん、私、帯を解いてよ。」

「生意気お言いでないよ、当も無しに。可いから持つといで。」

「うまい装なりをして、」

と膚はだの摺すれる、幽かな衣きぬの捌さばきが聞えて、

「御免なさいまし。」と抱いて出た搔卷かいまきの、それも緋ひと浅黄の派手な段鹿子だんかのこであつたの

を、萌黄もえぎと金茶の翁格子おきなごうしの伊達巻で、ぐいと縊くびつた、白い乳房を夢のように覗のぞかせなが

ら、卜跪ひざまずいてお孝の胸へ。

襟足白く、起上るようにして、ずるりと咽喉のどまで引掛けながら、

「貴方、同じ柄で頼母たのもしいでしょう、清葉さんの長襦袢ながじゆばんと。」

「学士は黙つて額おこを圧える。」

「姉さん、枕よ……」

「不作法だわ、二人で居る処へたつた一ツ。」

「知らない、姉さんは。」

「持つてお帰り。」

「はい。」

と立つて、脛はぎをするすると次の室まへ。襖を閉めようとしてちよつと立姿で覗く。羽二重の紅くれなゐなるに、緋で渦巻を絞つたお千世のその長襦袢しほりの絞が濃いので、乳の下、鳩尾みずおち、窪みに陰の映さすあたり、鮮紅からくれなゐに血汐が染むように見えた——俎に出刃を控えて、濱島田の人形を取つて据えたその話しの折のせいであろう。

凄すこさも凄いが、艶えんである。その緋の絞の胸に抱く蔽おおいの白紙しらかみ、小枕の濃い浅黄。隅田川のさざ波に、桜の花の散敷おもかけく俯。

非ず、この時、両国の雪。

葛木は話したのである。

「姉の優しい眉が凜りんとなつて、顔の色が蠟ろうのように、人形と並んで蒼みを帯びた。余りの事に、気が違つたんじゃないかと思つた。

顔の色が分つたら祖母おばあさんは姉を外へ出さなかつたらうと思ふね。——兄弟が揃つた処、お祖母さんも、この方がお氣に入るに違いない、父おとうさん上、母おつかさん上の供養の為に、活いきも

のだから大川へ放して来ようよ……

で、出たつきり、十二時過ぎまで帰らなかった。

妹が涙ぐんで、（兄さん、姉さんは？ 見て来て下さい。）と言う。私も水へ飛び込み兼ねない勢で、台所へ出ようとすると、姉は威勢よくそこへ帰った。……

白鳥を提げてね、景気よく飲むんだって……当人すでに微酔です。お待遠様と持込んだのが、天麩羅蕎麦に、桶飩餛。

女二人が天麩羅で、祖母さんと私が餛餵なんだよ。考えて見ると、その時分から意気地の無い江戸児さ。

その晩、かねて口を利いた浜町の骨董屋の内へ駈込んで、（あい。）と返事をしたんだって。

浅草、花川戸の、軒に桃の咲く二階家に引越して、都鳥の籠甲の花筭、当分は島田のまま、祖母さんと妹がそこへ引取られて、私は奉公を止して、中学校の寄宿舎へ入る。続いて白筋の制帽となつて、姉の思一つなんだ。かみわぎで助けられるように、金釦の制服と漕ぎつけた。」

伐木丁々

四十一

「……迄は、まあ可かつたんです。……ところが、その後祖母おばあさんの亡くなった時と、妹が婚
 礼をした時ぐらいなもので、可懐なつかしい姉は、毎晩夢に見るばかり。……私には逢つてくれな
 い。二階の青簾あおすだれ、枝折戸しおりどの朝顔、夕顔、火の見の雁かりがね、忍返しの雪の夜。それこそ、
 鳴く虫か小鳥のように、どれだけ今戸のあたり姉の妾宅いまわりの居周囲を、あこがれて徘徊さまよつた
 ろう、……人目を忍び、世間を兼ねる情婦いろでも有るように。——暗号あいずで出て来る妹と手
 を取つて、肩を抱合つて、幾度泣いたか知れませんが。……姉は恥かしいから逢わぬと歎く。
 女の身体からだの、切刻まれる処が見たいか、と叱るんだね。

その弟の身になると、姉は隅田川の霞の中に、花に包まれた欄干まないたに立って、私を守つて
 いるようでもあるし、紅蓮ぐれん大紅蓮という雪の地獄に、俎まないたに縛られて、胸に庖丁あを擬てられ
 ながら、救すくいを求めて悶もたえるとも見える。……

死ものぐるいに勉強をしたよ。

大学へ入ると言う、その祝いだ、と云つて、私を村田屋へ連出したのは、姉の旦那だ。その時清葉を見ました。

心の迷いか、濟まん事だが、脊恰好、立居の容子が姉に肖然。

この方は手形さえあれば、曲りなりにも関所が通られると思うと、五度に一度、それさえ半年の間なんだ、……小遣を貯めるんだからね。……また芸者の身になって見りや、迷惑な事は夥多しい。」

お孝は黙つて頭を掉つた。

「姉の方は、天か地か、まるで幽明処を隔つ、遠い昔のものがたりの中に住むか、目近に姿ばかりの錦絵を見るようだろう。同じ、娑婆に、おなじ時刻に、同じ檜物町の土地に、ただ町を離れて、本郷の学校の門と、格子戸を隔てただけで住んでいる筈の清葉さえ、夢に見ても夢でさえ、遠出だったり、用達だったり、病気だったりして逢えないんだものね。半年の間熟と目を塞いでいて、お茶屋の二階で目を開いて、ドキドキする胸を圧えるのがその仕儀なんだ。

一度も夢で泣いたのは……」

天井を高く仰いで云つた、学士の瞳は水のごとし。

「どこか……私の寄宿舎の二階と向合う、同じ高さに川が一筋……川が一筋。……で、夢だろう。水はその下を江戸川の（どんどん）ぐらいな流れで通る。向う岸に二階がある。表だけ見えて、欄干が左右へ……真中に榎の大樹があつて仕切る、その二階がね、一段低くなつて流に臨んで、も一つ高い座敷が裏に有りそうなんだ、夢だからね、お聞き。……いや聞いておくれ。」

その左右の欄干の、向つて右へ、嫋娜と掛つて、美しい片袖が見える。ト頬杖か何か、物思わしい風情で、熟とこつちを睨めるらしい、手首が雪のように、ちらりと見えるのに、顔は榎に隠れたんだ。榎はどこか、深山の崖か、遠い駅路の出入境に有る、繁つた大なる年経る樹らしい。

そこへね、むくむくと動いて葉を分けて、ざわざわと枝を踏んで、樵夫が出て来た。花咲爺の画にあるような、ああ、「

と横を向いて卓子台を幽に拵つて、

「前刻、西河岸で逢つた植木屋……ね、ちよつと肖ていたよ。取留めは無いのだけれども、その爺さんが、コツンコツンと斧を入れる。が、斧の音は、あの、伐木丁々として、百里も遠く幽だのに、一枝、二枝、枝は、ざわざわと緑の水を浴びて落ちる。」

四十二

「三枝、五枝、裏搔うらがいてその繁茂しげりが透しくに連れて、段々、欄干らんかんの女の胸むねが出て、帯おビが出て、寝着姿ねまきが見えて、頬ほが見えて、鼻筋はなすぢの通とる、瞳ひとみが澄すんで、眉まゆが、はつきりとなる。縋もつ毛げがはらはらとかかつて島田しまだ鬘まげが見えた。

川の水が少し渺びようとして、月が出たのか、日が白しろいのか、夜よだか昼ひるだか分わらない。……間まがおよそどのくらいか知れないまで遠とほくなる、とそ的一段いつ高たかい女の背後うしろに、すつくと立つた、大おほな影法師かげぼうしが出た。一段高いついのに、突立つったつたから胸むねから上うへは隠かくれたが、人ひととも獣けものとも、大おほな熊くまが蔽おほわれかかるように見えただがね。」

「ちよつと待つて！」

お孝おたかの怯おびえたらしい慌あわただしき。が沈しずんで力ちからある声こゑに、学士がくしは夢ゆめから現うつつ世よに引き戻かえされて、

「ええ、」と驚おどく。

「ここを抱かかいていて下さい。」

その声こゑは、もう静しずかであった。搔卷越かかに、お孝おたかは学士がくしの手てを我われが胸むねに持も添そえて、

「さあ、話しておくんなさいな、——身に染みるわねえ。」

「たわいは無いんだよ。……すがすがしいが、心細い、可哀あわれな、しかし可懐なつかしい、胸を絞るようなうまやじ騾路すずの鐸すずの音が、りんりんと響いたので、胸がげっそりと窪んで目が覚めるとね、身体が溶けるような涙が出たんだ。

その二階越の女が、どうしても姉なんだ。いや清葉だった。しかもつい近頃の事なんだよ。」

「……………」

「話が前後あとさきになつたんだがね、……夢を見たのは、姉がもう行方知れずになつてからです。」

「行方知れず?……」と手を支つく音。

「私がとにかく、今の学校を卒業すると、妹には代々の位牌いはいを、私にはその一組の雛ひなと、人形を記念かたみに残して観音様の巡礼に、身は亡きものと思つておくれ、——妹に——達者でおくらし、——私に、晋さん御機嫌よう——

妹には夫がある。

この行方を探すには、私が巡礼に出なければならぬんだ。

が、それは今出来兼ねる。

けれども、夢にも快く逢える事か、似た人にさえ思いのままには口も利けない。七年越し（私は姉が欲しい、……お前さんが欲しい、清葉さん。）と清葉に云った。

今夜思切つて言つたんだ。

ただ他人でありたくない！ が、いまこの二人は、きようだいになり得る世界を持たん。夫婦になりたい。一所になりたい、ただ他人ではありたくない。しかし様子を見ても大抵分る、これは肯入ききいれてはくれないだろう、断然断らるるに違ない！

私は、お前さんから巡礼になる、少くとも行方知れずになる、杯をうけて下さい。」

「御守殿は何と云つて？」と言ことばは烈しく、搔卷はすらりとしている。

「清葉は、すつと横を向いて、襦じゆばん袷の袖口をキリキリと噛かんだ。」

「一件だね。」

「私は胸が迫つたよ。……清葉が、声を霞ませて言った。……（お察し申します。）」

「へえ。」

「（貴方の姉さんが私でしたら、貴方に何とおっしゃるでしょう。貴方は姉さんにお聞き下さいまし。私には母があります。養母です。）と俯うつむ向いたが、起直つて、（母に聞かな

ければなりません。ト……また私には子があるんです。その子の父があるんです。一人極きさまつた人があれば、果敢はかないながら芸者でも操を立てねばなりません。芸者の操、貴方お笑いなさいまし。私は泣いて、そのお別れの杯を頂きましょう。……」

「ああ、言いそうなこつた。御守殿め、チヨツ。」と膝を丁と支つくと、颯さっと搔卷の紅裏をかえ翻す、お孝は獅子頭ししがしらをは匆ねたように、美しく威勢よく、きちんと起きて、

「でも、さすがに土地の姉さんだねえ。」

空蝉

四十三

「もしもし、貴女様あなた、もし……」

ここに葛木に物語られつつある清葉は、町を隔て、屋根を隔てて、かしこにただ一人、水に臨んで欄干もたに凭たたずたずたず……男の夢の流ながれではない、一石橋の上なのである。が、姿も水もその夢よりは幻影まぼろしである。

と、小腰を屈めて差覗き、頭を揺つて呼掛けたのは、顱巻もまだ除らないままの植木屋の甚平爺さん。

「今頃、何をしておいでなさります、お一人でこんな処に……ははは、」

と底力の無い愛想笑で、

「いや、もう、人様の事をお案じ申すという効性もござりません。……お助けを被りました御礼を先へ申さねばなりませんのでござりました。はい、先刻は何とも早や、お底で助かりました。とんと生命拾いでござります。それにまた、お情深い貴女様、種々若衆たちまで、お優しいお心附を下さいまして、お礼の申上げようもござりません。」

「ああ、植木屋さん。」

と云う……人を見た声も様子も、通りがかりに、その何となく悄れたのを見て、下に水ある橋の夜更、と爺が案じたほどのものではない。

「今、お帰りなんですか。」

「はい、ええ、貴女からお心添え、と申されて、途中でまた待伏せでもされるような事があつてはならねえ。泊れ、世話をしよう、荷なりと預つてやろうと、こう云うて下さいま

したが、何、前後の様子で、私、尺を取りました寸法では、一時赫として手を上げましたばかり。さして意趣遺恨の有る覚えとてもござりませぬ、……何また、この上に重ねて乱暴をしますようなれば、一旦はちと遠慮がござりましてわざと控えましたようなものの、いざとなれば、何の貴女、ただ打たれておりますものか。向、脛を搔払って、ぎやつと傾倒のめらしてくれますわ。」と影弁慶が橋の上。もとより好む天秤棒、真中取つて担まんなかぎし有様、他の見る目も覚束おぼつかない。

附け景氣の広言さえ、清葉は真面目まじめに憂慮きづかうらしく、

「でも、お年寄が、危いじやありませんかね、喧嘩はただ当座のものですよ。一晩明かしてお帰りなされると可かつたのにねえ。」

「はい、それに実は何でござります、……大分年数も経ちました事ゆえ、一時半時では、誰方もお心こころづき付きの憂慮きづかしはござりませんが、……貴女には、何をお秘かくし申しませぬ。私はその、はい、以前はやはりこの土地に住いましたもので。」

「まあ、」

「ええ………忤せがれが相場せがれごとに掛りまして分散、と申すほど初手からさしたる身しんしょう上じやうでもござりませぬが、幽かすかには、御覚えがあろうも知れませぬ、……元数寄屋町の中程の、もし、

へへへ、煎餅屋の、はい、その時分からの爺おやじでござりますよ。」

「あら、お店の前の袖垣に、朝顔の咲いた、撫子なでしこの綺麗だった、千草煎餅の、知っていますとも——まあ、お見それ申して済まないことねえ。」

はずんだ声も夜よとともに沈んで聞えて静である。

「滅相な、何の貴女。お忘れ下さるのが功德でござりますよ、はい、でも私てまえはざつとお見覚え申しております、たしか……滝の家さんのお妹御……」

「ええ、小女ちいさい方よ、お爺さん、こんなになつて……お可懐なつかしいのね。」

四十四

「御主婦おかみさんは、」

「養母おふくろですか。息災ですよ。でも、めつきり弱りました。」

「私てまえ、陰ながら承つて存じております。姉さんが、お亡くなりになりましたそうで、あの方はお丈夫で。……貴女はお小さい時から悪戯いたずらもなさらず、いつもお弱くつておいでなさりましたが、しかし、まあ、御機嫌よう、御全盛で。」

「いいえ、全盛それどころではございません。姉が達者それでいてくれますと、養母おふくろも力になるんですけど、私がこんなですからね。——何ですよ、いつも身体が弱くって困りますの。」

「お見受け申しました処でも、ちつと蒲柳ほつそりなさり過ぎますて。」

何やら、もの思わしげな清葉の容子を、もう一度凝ためて視みて、

「もつとも柳に雪折なし、かえつて御心配の無いものでござります。でござりますが。」
爺おやさんは天秤てんべんを潜くぐるがごとく、腰こしを極きめて、一息寄る。

「そのお弱い貴女が、また……何で、今時分、こんな処に夜風は毒の、橋は冷えます。私なんぞ出過ぎましたようでござりますが、お案じ申すのでござりますよ。」

「難ありがと有う、……身投げじやないの、お爺おやさん。」

「滅めつ法ぼう界けいな、はッはッ。」

「でも、ほんとうは投げてても可いんです、今夜あたり。」と微笑んだ、が、笑顔の気高いのが凄すごいように見える。

「滅相至極めつしうしごくも無い。」

「親身に心配して下さるのを私、串じょうだん戲げを云つて済みません。まったく身でも投げそうに、それは見えましたでしょうとも。一人で、こんな処にぼんやりして。」

実はね、お爺さん、宵からお目に掛っていた客が、帰りがけにこの橋から放生会をなすった品があるんです。——昨日はお雛様のお節句だわね——その蛤と榮螺ですって。」

「はい、成程。」

「殿方ばかりでなさるんでは、わざとらしくも聞えますが、その方は御姉さんの御遺言。……まあね、……遺言と云った訳なんですとさ、私も姉が亡くなったんです。」

何ですか、可懐くつて、身に染みてならないのに、少々仔細が有りましてね、もうその方ともこれつきり、お目に掛られないかも知れなくなつたの。七年以来、夢にまで、ほんとうに夢を見て頂くまで、鼻屑に……思つて……下すつた……のに。」

袖を落して惰るる手に、鉄の欄干は痛々しい。

「私……もう御別離をお見送り申し旁々、せめて、この橋まで一所に来て、優しい事を二人でして、活きものの喜ぶのを見たかつたんですけれども、二人ばかりの朧夜は、軒続きを歩行くのさえ謹まねばならないように、もう久しい間……私ねえ、躡けられているもんですから、情ないのよ。お爺さん。お恥かしいじやありませんか。そのね、（二人で来る。）というのさえ、思出さねば気が付かない迄、好きな事、嬉しい事、床しい事も忘れていて、お暇乞をしたあとで、何だかしきりに物たりなくつて、三絃を前に、懐手で

熟と俯向うつむいている中に、やつと考え出したほどなんですもの。

わたしんとこ
私 許もとでも、真似事まねごとの節句をします。その榮螺つづくだの蛤つづくだのは、どうしたろうと、何年

越かで、ふつと、それも思出すと、きつと何かと突つ包くんで一所に食べたに違ちがいない。菱餅ひしこも焼くのを知って、それが草色でも、白でも、紅色でも、色の選好よりこのみは忘れている、……ああ、何という空蟬ぬけがらの女になつたろう、と胸が一杯になつたんですよ。」

四十五

「お地蔵様の縁日だし、序ついでと云つては失礼だけれど、その方と御一所に、お参詣まいりをしながら、貝を流しに来られたら、どんなに嬉しかったらうと思ひますとね、……それなり内へ帰る気になれなかつたもんですから、後を慕つたように見に来ました。

お爺さん、その方は、随分、私に思切つた、殿方の口からでは、さぞ仰おつしや有りやにくかるうと思ふ事さえ、打明けて下すつたのに、私は女で、女の口から言つて可よい、言わねばならない……今、ただ、お前さんに話をした、一所にここまでお見送りみ送りがしたい、とそれだけさえ、口へは出せない身なんですもの。

大抵お察しなさいまし。……小児こどものような罪の無い、そしてそれより、酔いも甘いもよ
う知つて、浮世を悟つたお老としより人は仏様、何にも隠す事は無い。……私には、小児の親の
旦那旦那があります。

どうせ女房おかみさんや児こがあつて、浮気をなさるくらいな人、妾めかけてかけは他にもある。珍ら
しくもない私を、若い妓こに見かえないで滝の家一軒世帯の世話をしてくれますのは、棄て
る言分が無いからです。落度があればそれツきり、まことに頃このごろ日の様子では、内々じゃ
持もてあつか扱あつかつて、私の落度を捜しているかも知れませんが。大一座でもあるなら知らず、
差向さむかいでは、串じょうだん戯ごも思切つては言えませんわ。

そんなに、だらしなく意気地なく、色恋も、情なさけも首尾も忘れたような空洞うつろになつたも、
燃立つ心を冷さまし冷さまし、家うちを大事と思つてばかり。その家だつて私のじゃない。……

ねえ、お爺さん。」

と面おもてを背けて、

「養母おふくろへ義理たつた一つばかりなのよ！……

亡くなつた姉に、生命いのちがけの情人いろが有つて、火水の中でも添わねばならない、けれど、
借金のために身抜けが出来ず——以前盗どろぼう人が居直つて、白刃しらばを胸へ突きつけた時、小夜こよ

着を被せて私を庇って、びくともしなかった姉さんが、義理に堰かれて逢うことさえ出来ない辛さに、私を抱いてほろほろ泣く。

出生は私、東京でも、静岡で七つまで育ったから、田舎ものと言われようけれど……その姉さんを持ったお庇に、意地も、張も、達引も、私は習って知っている。

その時に覚悟をして、可厭で可厭でならなかった、旦那の自由になったんです。またそうして、後々までも引受けければ、養母が承知をして、姉を手放してくれたんですもの。：

ちやんと養母に約束した、その時の義理がありますから、自分じゃ、生命も随意にはなりやしない。

お爺さん、私や芸者のかざかみにも置かれぬ……意気な人には御守殿だ、……奥さんだ、お部屋だつて言われます。」

はなじろみながら眉の昂った、清葉の声は凜とした。……途中でお孝の三人づれに行逢ったを爺は知るまい。が、言う清葉より聞く方が、ものをも言わず、鼻をすする。

「心に思う万分之一、その一言は云わないでも、姉の身ぬけにこうこうと、今云った義理だけは、私はその人に言いたかった、言いたかったんです。」

と思わず縋すがつて泣くように、声が迫つて、

「ですけれど、他人は知らず、私たち、そうした人に、この事を打明けては、死んだ姉に恩を被きせる、と乗つてる蓮はすの台うてなが裂ける……姉は私に泣いてましよう、泣いてくれるのは嬉しいけれど、気の毒がられては、私は済まない。

坊主になる、とまで真実に愚に返つて、小児のように言つた人に、……私は堪こらえて黙つていました。……」

彩ある雲

四十六

爺おやさんは、先刻さつ打撲きくわされた時怪飛けしとんだ、泥も払わない手拭てぬぐいで、目を拭ふくと、はツと染みるので、驚あわいて慌たしいまで引擦ひっこすつて、

「他所よそめ目には大所おおどころの御新造ごしんぞさんのように見えます、その貴女が、……やっぱり苦界、いずれ苦の娑婆しゃばでござります。それにつけましても孫が可愛うござりますので、はい。」

沈めて、静に、

「お孫さん？……」

「ええ、女の子でござりまして。」

「まあ、私はちつとも知りません。」

「御尤ごもつともでござりますとも。……まだ胎内おなかに居おります内に、唯今の場末へ引込みひっこまして

な。」

「では、私の静岡と同じだわね。それは、まあ、お楽み。」

「いえ、ところがどうして、ところがどうして。」

と頭かぶりを掉ふつて、下おろして有る天秤つかまに拵おろりながら、

「大おお苦おくるしみなわけでござりまして、貴女方おんなじと同おんなじ一と申すと口幅くちばしつたい、その数でもご

ざりませんが、……稲葉家いなばさんに、お世話せわになつておりますので、はい。」

「まあ、お孝たかさんの許とこに、……ちつとも私知らなかつた。」

「はい、あちらの姉さんも、あの御気象ごきさうで、よく可愛こひがつて下さいます、が、願ねがえますものならば、貴女のお手許てとこに、とその時ときも思おもつた事ことでござります。いいえ、不足ふそくを言うではござりません。芸者げいしやと一概いぱくに口では云い条じょう、貴女は、それこそそれつきとした奥方おくさま様も同じ

事。一人の旦那様にちやんと操をお守りなされば、こりや天下一本筋の正しい道をお通りなさる、女の手本でござります。彼娘あれにもな、あやからせとう存じますので。」

「飛んでもない、お孝さんこそ可い姉さん。ああでなくては不可いけません。私は何も、曲ゆがんだり拗すねたりして、こう云うのではないんです。お爺さん、色でも恋でもない人に、立てる操は操でないのよ。……一人に買われる玩弄おもちゃ品です。大人の手に遊ばれる姉さま人形も同じ事。」

ふと言絶ことばえ、嘆息ためいきして、

「ここで榮螺を放した方は、上の壇に榮螺が乗って、下に横にして供えられた左ひだり褻づまの人形を、私とは御存じないの。」

と、半ば乱れた独言ひとりごと、聞かせぬつもりの声が曇る。

「何も浮世でござりますよ。」

と分らぬながら身につまされて、爺さんはがっくりと蹲しゃがんで俯向うつむき、もう一度目を引ひっこ擦すって、

「何の真似は出来ませいで、せめて芸ごとで、勤まるようになれば可いと存じますよ。貴女などは何が何でも、そこが強味でいらっしやいます。憂さも辛さも、糸に掛けて唄っ

ておしまいなさりまし。芸ごとも貴女ぐらいにおなりなさると、人の楽みより御自分のお
 気晴しになります。……中にも笛は御名誉で、お十二三の頃でございましたろうか、お
 二階でなさいますのが、私ども一町隣、横町裏道寂となつて、高い山から谷底に響くよう
 でござりましたよ。」

「パイパイ笛の麦藁むぎわらですかえ、……あんな事を。」と、むら雲一重、薄衣うすぎぬの晴れたよ
 うに、嬉しそうに打微笑む、月の眉の気高さよ。

「あの、時分の事を思いますと、夢のようでござります。この頃でも、御近所だと時々聞
 かれますのでござりましようがな。」

「可い塩梅あんばい。」

とやや元気に、

「幸しあわせと聞えやしませんよ。……でも笛だけは、もういつも、帯につけていますけれども、
 箱部屋の隅へ密そつとして置くばかり。七年にも八年にも望まれた事はありません。世間じゃ
 誰も知らないのに、お爺さん、ひよんな事を言出して、何だか胸があつくなくなった。笛が動
 いて胸先へ！……嬰あかんぼ児のように乳に響く！いつでも口を結えられて、袋に入っている
 んだから。」

と命を抱く羽織の下に、きつと手を掛けた女の心は、錦の綾に、緋総の紐、身を引きしめた朧の顔に、彩ある雲が、颯と通る。

眉を照らして、打仰ぎ、

「……世に出て月が見たいんでしょう。……吹きはしませんよ。」

とすらりと抜いて、衝と欄干へ姿を斜めに、指白々と口に取る。

ああ、七年の昔を今に、君が口紅流れしあたり。風も、貝寄せに、おくれ毛をはらはらと水が戦ぐと、沈んだ榮螺の影も浮いて、青く澄むまで月が晴れた。と、西河岸橋、日本橋、呉服橋、鍛冶橋、数寄屋橋、松の姿の常盤橋、雲の上なる一つ橋、二十の橋は一斉に面影を霞に映す。橋の名所の橋の上。九百九十九の電燈の、大路小路に残ったのが、星を散らして玉を飾って、その横笛を鏤むる。

清葉は欄干に上々しい。

甚平は手拭を鷺掴みで、思わず肩を聳かした。

「吹奏まし、吹奏まし。何の貴女、誰、誰が咎めるもので。こんな時。……不忍の池あたりでお聞き遊ばすばかりでございます。」

「勿体ないこと。……」

と笛を袖へ、またうつむいて悄れたのである。
 河童かつばの時計の蒼い浪あお、幽かすかな水音。どぶり一つ、……一時であろう。

鴛鴦おしどり

四十七

稲葉家のお孝は冷くなつた、有合わせの猪口ちよこを呼吸いきつぎに呷ぐい、と一口。……で、薄ら寒
 いか両袖を身震いして引合わせたが、肩が裂けるか、と振舞は激しく、風采とりなりは華奢きゃしゃに見
 えた。

が、すつきりと笑いながら、

「それじゃ、清葉さんばかり縹きりよう織ようがよくつて、貴方は、だらしが無いんだわね。」

「まあ、そうなんだ。」と葛木は、打傾いて頬に手を置く。

「まあじゃないじゃありませんか。立派に断られたに違いない。」

「そりゃ違いない。」

「振られたのね。」

「ふられました。」

「ポーンと。」

「何もそうまで凹ますには当るまい。」

「嬉しいねえ。」

小児こどもらしいまで胸を揺ゆつた、が、なぜか気が立つて胸の騒ぐのを、そうして紛らしたようである。

葛木は、煙草の喫のみさしを火鉢に棄てた。

「それだがね……」

「まだ負惜み？」

「ただ話さ。」

と苦笑して、

「別れに献さした盃を、清葉が、ちつと仰向くように、天井に目を閉ふいで飲んだ時、世間がもう三分間、もの音を立てないで、死んでいて欲しかった。私の胸が、この心が、どうなるかそれが試して見たかったが、ドシンばたん、と云う足音。隣室となりの酔よ客ばらいが総立ちに

なつて、寝るんだ、座敷は、なんて喚わめいて、留める芸者と折重なつて、こつちの襖ふすまへばたばたと当る。何を、と云つてね、その勢いきおいで、あー……開けるぞ、と思うと、清葉が、膝つきなおを支直つきなおして、少し反身そりみで、ぴたりと圧おさえて、（お客様です。）

そう、屹きつとして言つたんだよ。（誰だ。）と怒鳴ると、（清葉がお附き申しております。）と手に触つた撥はちを握つて、すつと立つた——芸げい妓しやのひそめく声こゑがして、がたがたとそこらが鳴つて静まつたがね……私は何だか嬉うれしかったよ。」

「情人いいひとらしく扱あつかわれたような気がして？ そんな負惜おんじやくみをお言いいなさんなよ。」軽ちやぶく卓ぶ子台だを掌たなで当あてて、

「卑怯ひせつな、男おとこのようでもない。」

「いや、そんな意味じや決してないんだ。恥かたじけを秘かくして貰もらつたようでき。不出ふで来かしをして女めに振ふられた、恋やつこの奴この、醜だらしななき体ていを人目ひとめから包かんでくれた気がしたから。」

「人目ひとめがどうして、そんな事ことぐらい芸者あなが貴下あなた、もしかそれが旦那だんなだったら、清葉しやさんはどうするだろう。……ちよいと、ここへ、もしか私の男おとこが、出刃で庖丁ばうていか拔身ひきみでも持つて、蒼あおくなつて飛と込んだら、私わたしがどうすると、貴下あなた思おもつてるの？ いいえ、吃びつくり驚おどする事は無い。私わたしだつてそのくらいな覚悟かくごはしている。」

大丈夫、そうすりや貴下の上へ、屏風に倒れて背になつて、私が突かれる、斬られて上げるわ。何の、嫉妬の刃物三昧、切尖が胸から背まで突通るもんですか。一人殺される内には貴下は助かる。両方遁げるから危いんだわ。ねえ、ちよいと、

と、じりじりと膝で寄つて来たが、目が覚めたように座をし、

「あら、何の話をしたんだろう、……ああ、そうそう。」

お孝は何気なく頷いて、

「清葉さんがお庇い遊ばして——まことに、お豪い芸者衆でいらつしやいます。」

「まったく、私は、しかし、」

「しかしどうしたのさ。」

「姉に、姉の袖で抱かれた気がした。」

「葛木さん。」

そのまま衝と膝を掛ける、と驚いて背後へ手を支く、葛木の瘦せた背に、片袖当てるを投げて、

「そんなに姉さんが恋しいの。人形のお話は、私も聞いて泣いていました。ほんとうに貴下、そんなじゃ情婦は出来ない。口説くのは下拙だし、お金子は無さそうだし、」

「謝罪^{あやま}る。」

「口説かれるのも下拙^{ます}だし、気は利かないし、跋^{ばつ}は合^あわず、機^き会^{かい}は知^しらず、言^いう事^{こと}は拙^{ます}し、意^い気^き地^ぢは無^なし、」

「堪^た忍^にしたまえ。」

「から、だらしは無^ないけれど、ただ一つ感^{かん}心^{しん}なのは惚^おれる事^{こと}。お前^{まへ}さん、惚^おれ方^{かた}は巧^{たくま}いのね。」

「……………」

「情^{いろ}婦^ふが無^なくつて、寂^{さび}しくつて、行^い方^{かた}の知^しれない姉^{あね}さん^を尋^{たず}ねるツてき、坊^{ぼく}主^{しゅ}になんかならないように、私^{わたし}が姉^{あね}さんになつて上げましよう。」

「……………」

「御^ご不^ふ足^{そく}? 清^{せい}葉^{えい}さんでなくつては。」

「そ……そんな事^{こと}は。……ああ、息^{いき}が塞^{ふさが}るよ。」

「死^しんでおしまいよ。こんな男^{おとこ}は国^{くに}土^{つち}の費^{ついで}だ」

「酷^{ひど}い。」

と云^いう時^{とき}、とんと突^つ飛^とばして、すつくり立^たつ、と手^て足^{あし}を残^{のこ}して燃^もゆるように見^みえた。パ

チンと電燈を消したのである。

力の籠こもった、情なさけの声。

「ちよいと、（サの字。）が見えなくなつて？ サの字よ、私、葛木さん。」

「お孝さん。」

とわずかに言う。

「暗い中でも、姉さんに見えませんか、姉さんにしてくださいませんか。自惚うぬぼれてて？ ちよいと自惚うぬぼれだ、と思いますか。清葉さんでなくつては——不可いけないの、不可いけないの。」

「真ま暗くらだ。私は、真暗まくらだ。……」

「まだ、まだまだあんな事を。清葉さんでなくつちや、不可いけないの、不可いけないかい。」

「顔が見たい、お孝さん。」

「贅ぜい沢たくだよう。」

と婀娜あだな声、暗やみ中に留南とめき奇きがはつと立つ。衣きぬ摺ずれの音ねするすると、しばらくして、隔へての襖ふすまに密ひそと手を掛けた、ひらめく稲妻、輝きらく白金プラチナ、きらりと指環ゆびわの小蛇こへびを射る。

「ほんとうの、貴方の姉さんは私は知らない。清葉さんなら恐れはしない。芸うでいけなきや、容きり色ようで、……容色きりようでいけなけりや芸事げいじで、皆みな不可いけなけりや、氣きで負まけないわ。生いのち命めい

で勝つ。葛木さん、見て頂戴。」

とすらりと開ける、と翠の草に花の影を敷いて、霞に鴛鴦の翼が濛う。

「ああ、お千世は？」

と葛木が言った。それは影も見えなんだ。

「枕を持つて、下階の女房の中へ寝に行きました、……一度でも芸者と遊んで、そのくらいな事が分らない。——さあ、ちゃんとして見て頂戴、サの字が見えない？ 姉さんに肖ない？……ええ、焦りたい。」

と襖に縫つて、暗い方へ退る男と、明るく浮いた枕を見交わす。

「姉さんで可愛がられるのに不足なら、妹にまけて可愛がられて上げましょう。従姉妹になつてなかよくしましょう。許嫁でも、夫婦でも、情婦でも、私、まけるわ、サの字だから。鬼にでも、魔にでも、蛇体にでも、何にでもなつて見せてよ、芸人ですもの。」

と裳を揺つて拗ねたように云いながら、ふと、床の間の桜を見た時、酔つた肩はぐたりとしながら、キリリと腰帯が、端正と緊る。

「何の、姉妹になるくらい、皮肉な踊よりやさしい筈だ。」

搔卷の裾を渚のごとく、電燈に爪足白く、流れて通つて、花活のその桜の一枝、舞の

構えに手に取ると、ひらりと直つて、袖にうけつつ、一呼吸籠めた心の響、花ゆらゆらと胸へ取る。姉の記念にかたみにやわ劣るべき花柳の名取の上手が、思のさす手を開きしぞや。

その枝ながら、袖を敷いた、花の霞を裳に包んで、夢の色濃き萌黄の水に、鴛鴦の翼に肩を浮かせて、向うむきに潰島田。玉の緒揺ぐ手柄の色。

「葛木さん。」

「……………」

「人形が寂しい事よ。」

生理学教室

四十八

お孝は黒繻子の襟、雪の膚、冷たそうな寝衣の装で、裾を曳いて、階子段をするすると下りると、そこに店前の三和土にすつくと立った巡査に、ちよつと目礼をして、長火鉢の横手の扉を、すつと縁側へ出て行く。

そこが中庭になる、錦木の影の浅い濡縁で、合歡の花をほんのりと、一輪立膝の口に含んだのは、五月初の遅い日に、じだらくに使う房楊枝である。

その背後に、座敷が見えて、花は庭よりもそこに咲いて、眉の緑の年増も交る。と、下地子らしい十二三なのが、金盥を置いて引返して来て、長火鉢の傍の腰窓をカタンと閉めたので、お孝の姿は見えなくなつた。

とばかりで、三和土に立つた警官は、お孝が降りて来た階子段を斜に睨んで、髯を捻る事專なり。で、少時家中が寂然する。

一体、不断は千本格子を境にして、やけな奥女中の花見ぐらい陽気な処へ、巡查と見ると騒動が豪い。謹むのではない笑うので、キャツキャツクツクツ、各自があつちこつち、中には奥へ駆込んで転がるまで、胡蝶と鸚鵡が笑う怪物屋敷の奇観を呈する。

事の起因を按ずるに、去年秋雨の降くらす、奥の座敷に、女ばかり総勢九人、しかも二組になつて御法度の花骨牌。軒の玉水しとしと鳴る時、格子戸がらり。

「御免。」と掛けた声が可恐く厳しい蛮音。薩摩訛に、あれえ、と云うと、飛上るやら、くるくる舞うやら、ぺたんと坐つて動けぬやら。

座敷では袂へ忍ばす金縁の度装の硝子を光々さした、千鳥と云う、……女学生あがり

稲葉家第一の口上言が、ひさしがみ 廂 髪 の阿古屋と云う覚悟をして度胸を据えて腰を据えて、もう一つ近視眼ちかめを据えて、かまち 框へ出て、はッと悪く落着いた切口上。

「別にそのでございます。相変りました事はございませんです。」と、戸籍係たてに立ごかしの三ツ指を極きめたと思え。

「羅宇らうが出来たけえ、……持つて来たですッ。」

「何だね、羅宇屋さん、裏へお廻り。」と、婆やが水口みずぐちの障子で怒鳴ると、白磨竹しろみがきを突着けられた千鳥の前は、拷問ごうもんの割竹で、胸を抉えぐられた体にぐなりとした。

鍋焼餛飩うどんは江戸児えどっこでない、多くは信州の山男と聞く。……鹿兒島の猛者もさが羅宇の嵌替すげかえは無い凶でない。しかも着ていたのが巡查の古服、——家鳴震動やなり大おお笑わらい。

以来、戸籍検べ、とさえ言えば、食いかけた箸を持って匆はねまわ廻る埒らちの無さ。当区域受持の警官も、稲葉家では、（笑う。）と極きめて、その気で髯ひげを捻ねるのであったが。

今日けさのは大おおに勝手が違った。

「姉さんは内じやろうで。」

「はあ、あの……」

「是非、直接に逢いたいんじや……取次を頼むです。」

小女こおんなが一度、右の千鳥女史せきさやと囁ささやき合あつて、やがて巡查の顔を見い見い、二階に寝ていたのを起おこした始末。笑い掛けたのは半途でおさ圧おさえ、噴出ふきだしたのは嚙のみこ込んで、いやに静かな事よつて如くだんのごとし件けん。

幽かすかな咳わぶきしてお孝が出た。輪曲わがねて突込んだ婀娜あだな伊達巻の端ばかり、袖をすべこつて着流しの腰も見えないほどしなやかなものである。

「失礼をいたしました。」

「は、あんた覚えておらるるかね。」

唐突だしぬけに言うのがそれで、お孝はちよつと分り兼ねつつ、黄楊つげの横櫛おきをおき压おさえたのである。

四十九

巡查は掌てのひらを向うへ扱しごいて、手袋を外して、片手に絞あつて、更あらためて会釈する。

「ちよつと分りますまい、じやろうがね、……………先達さきで、三月四日の午後十二時の頃に逢うたのですが。」

「ああ、一石橋の、あの時の。」

お孝は軽く傾いていたのが屹と見直す。

「多日しばらくでした、いや、その節は失敬じゃった。」

「いいえ、私こそ失礼を。」

「むむ、いささかその失礼でないこともなかったですね、ひやッ、ひやッ。」と壁に響くがごとき力ある笑声、笑うのに力が有つて、あえて底意は無さそうである。

お孝は顔を洗つたばかりの、縁起棚より前さきへする挨拶とて、いつになく、もじもじして、「ついね、お白酒の持越しで、酔つていたものですから、ほほほ。」

と荅つばみぐらいな内端うちわな声。

「お茶をよ、誰か。」

「そういう心配をされては困る。……官服の手前もある。お宅などで余り世話になつては不可いかんのです。……けれども、ちよつとここを拝借します。」

「さあどうぞ、……貴官あなたお上り遊ばしては。」

「ここで結構です。」

小女が心得て手早く座蒲団ざぶとんと煙草盆たばこぼん。

「御免下さい。」と外套がいとうを抱えたまま、ガチリと佩劍はいけんの腰を捌さばいて、框かまちの板うしろに背後むき

に、かしつと長靴の腰を掛ける、と帽子を脱いで仰向けにストンと置いて、

「何は、ちよいちよい来らるるかね。」と髻を捻る。

「誰方……でございますか。」

「何は、大学の国手^{せんせい}は？」

「さつぱり……」と目が働いて、頬が緊^{しま}る、お孝は注意深い色である。

「全然お見えにならないですかね。」

「いいえ、時……偶^{たま}。」と、膝で二つばかり掌^{てのひら}を軽く合せる。

「今度お逢いでしたら、貴方^{あなた}から、私^{わたし}に、託^{ことづけ}を一つ頼まれて下さらんじやろうかね。」

「はあ、お目に懸りました節は。——ですが、いつまたお見えになりますか。」と瞻^{みまも}らるる目を外^{そら}して言う。

「別に急ぐという件ではないです。——今名刺を上げます。で、私^{わたし}が職務としてではない。一個人^{いっぴん}として、私一人^{にん}として、じゃね、……非常に先達ては失敬した、託^{わび}をします、と貴^あ方^{なた}からよう言うて貰^{もら}いたいのじゃ。実はそれを頼みとうて、今日は私用のみで出向いて来^来たです。……いやいや一石橋の事のみではないです。」

実は、今週の金曜日、一昨日でした。私^{わたし}は非番だもんで、医科大学へ葛木さんを訪問し

たです。可^ええですか。……と云うのはじやね、先夜、あの場合、貴方が不意に出て来られて、私が疑問の的とした、不審を實際に示して、証明をされたもんで、それ以上追究は出来兼ねる都合で手を放した。

もつとも孰^{いづれ}にせい、私^{わし}が思うたほどの事件^{こと}でない、とだけは了解したのじやけれども、医学士などは、出たら目じやろう。また、あの年配で、それが今日堂々たる最高の学府に氏名を列する一員であらるるものがじやね、……学問上、蛙の腸や、モルモットの骨を新聞紙に包んで棄てるならば、幾分かいわれはある。それも必ずしもあるべき事実とは思わんのじやがね。

榮螺と蛤、姉の志と云うて、雖にそなえたを汐に流す、——そんな事が。私^{わし}は断じて信ぜんのじや。」

と今もなお且つ信じないように、澁に朱を加えた赤い顔で——信ぜんのじや！——

五十

巡査はそこに注^ついで出した茶を、喫^のまず、じろりと見たばかり。

「事態、私も怪訝に堪えんもんで、早速とはなしに、本郷方面へ、同僚の筋を手繰つて搜りを入れると、葛木晋三と云う医学士はいかにもあるじゃね、そしてです、それは医科に勤めておられるが、内科、外科、乃至婦人科、何でもないのである。大学内のその、生理学教室に居つて研究をされつつある……」

と真顔にお孝に打傾いて、左の手の自脈を取りつつ、

「まるでこの方には関係ない。純粹のその学者じやとある。で、なお怪いですわい。その晩の挙動なり、……あの余り……貴方の前じやけれども、風采の上らん、痩せた、薄髯のある、背の屈んだ、こう、突くとひよろひよろつとしような、人に口を利くにおどおどする、初心らしい、易つぽい、容子と云うのがじやね、

人品備わらんですじやろうが、どうですかね、……きやツ、きやツ、きやツ。」
空咳きに咳入るごとく、肩を揺つて高笑いをする。

「さあ、」と云つたが、ほほほ、とばかり、この際困つたという片類笑みをして、ちよつと指先で畳をこすり状に、背後を向いて、も一度ほほほ、と莞爾すると、腰窓を覗いて、島田と銀杏返が、ふつと消える。

巡査は、すなわち髯を捻つて、

「怪しいものではあるまい。後暗い事は、それは無いのじやろう。がです……あの晩の間は名を騙かたった者に相違無い、とどうしても疑われてならんもんで。好奇心にも駆らるるですわ。非常に思切つて、医科大学に刺を通じて面会を求めたです。そりや、貴方あんた、通常服で、そして小倉じやが袴はかまを着けて出向いたけえな。

どうか思うたが、取次いだ小使どんが、やや暫しばらく時あつて引返して、お目に掛ろう言わるる、通れ、とあつて、廊下伝い方角を教わつて、そしてそれから歩ある行き出したがね、——私は先年この岐阜県下ですわ、飛騨ひだのある山家辺僻へんびに勤務した事があつて、深い谷陰、高い崖に煙草の密造をする奴を検しらべに行つたのじやね。その節、路も無い処を、いわゆる、木の根巖いわかど角ですわい。時々藤蔓ふじづるにぶら下つて、激流の空を綱渡などしたが、いや、見当の着かぬ心細い事は、——門外漢が学校のその奥へ行く廊下伝いは、奥山を歩ある行くどころではなかつたです。

日も西山に没して、前途なお遙はるかなりと云う、遠い向うの峠見たような処に、大なる扉おおきドアの戸を、細う開けて、背うしろにして、すつくりと立つて、こつちを出迎えておられた。峰の一本の松という姿に見えたのが、何と驚いたねえ、あの晩の少い紳士わかじや、国手せんせいじやつたで。

びたりと留まつて、思わず、挙手の礼を施したですよ。常服ふだんぎでは可笑おかしいのじやが。

すぐにこれへ、と言われて、大な扉ドアを入ると、ズシンと閉ったと思われい。稲妻のよう
に、目を射られたのは、室一杯へやに並んだ書架に、ぎっしりと並んだ、独逸語ドイツじやろうね、
原書の背皮の金文字ですわ。

暮方の空に、これがどうですか。紺地に金泥こんでいのごとく、尊い処へ、も一つの室へやには名
も知れない器械が、浄玻璃じょうはりの鏡のように、まるで何です、人間の骨髓とこを透して、臟腑を
射照らすかと思う、晃々こうこうたる光を放つ。

私は、よろよるとなつたで。あの晩、国手せんせいが、私のために、よろよるとなられたこと
くじや。何と、俗に云う餅屋は餅屋じや、職務たつとは尊い。」
と沈着こまぬに、腕を拱く。

五十一

「その器械と、書架の有ると、国手せんせい両室りやうしつを占領しておられる様子じやねえ——傍かたわらには寝ね
台だいも有つたですよ。柱の電鈴よびりんを圧おさると、小使どんが紅茶を持って来るのじやつた：
：

私は卓子の向いに、椅子を勧められて真四角に掛けたのじやが、硝子窓から筑波山の夕日が射して、その生理学教室を※と輝かした中に、国手の少い姿が、神々しいまでに見えた。

一応話を聞いたです。私もね、出来得る限り、行政官の一員たるその威厳を保つてからに。しかし、決して警官として訊問をするではありません。すでに一石橋当夜の紳士と、生理学教室における国手とが同一人である事を確めた上は、些少たりとも犯罪に対して何等その疑いは無いのでありますが、お話のごとき事が事実有り得るものかどうか、後学のため、一種人情に対する警官の経験の為に、云うて、その室で飾ると云われた、雛を見せに貰うたです。

国手、一個の書架の抽斗、それには小説、伝奇の類が大分帙を揃えて置かれた——中から、金唐革の手箱を、二個出して、それを開けると無造作に、莞爾々々しながら卓子の上に並べられた。一錢雛じやね、土人形五個なのです。が、白い手飾の、あの綺麗な手で扱われると、数千の操糸を掛けたより、もつと微妙な、繊細な、人間のこの、あらゆる神経が、右の、厳肅な、緻密な、雄大な、神聖な器械の種々から、清い、涼い、芬と薬の香のする室の空間を顫動させつつ伝つて、雛の全身に颯と流込むように、その一個

々々が活きて見える……

就なかんずく中、丈、約七寸許ばかりの美しい女の、袖には桜の枝をのせて、ちよつとうつむいた、

慄然ぞつとするような、京人形。……髪は、

と言ひ掛けて、お孝の姿を更めてみ視て、

「貴方あんた、貴方のその髪と同一に髪を結うた人形じゃがね。」

お孝は俯向うつむいて、しやんと手を支つく。

「それは何と云う髪の結びかたですかね。」

「潰つぶ……」

「はあ？……何ですかね、覚えて置くで失礼します。」と、手帳を出す。

お孝の上げた顔は、颯さつと瞼まぶたが染ぬつたのである。

「あの、潰島田でございます、お人形さんの方は結構でしようけれども、これはまことにその潰しの利きませんお恥しいんですよ。」

「いいえ、潰しなんかきかんで可ええです。貴方あんたはすでに葛木さんの。」

隅はしごの階だん子段を視みて空みざまに髻しんを扱しいた。見よ、下なる壁に、あの熊ひぐまの毛皮、大なる筒袖おおいの、抱かかりたごとく膠べたり顔として掛りたるを――

「巡查は心付いた目をお孝に返して、

「貴方あんた、大抵の事は、ここで饒舌しゃべつて可えですか。ある種の談話は憚はばからんでも構わんすかい。」

「ええええ、」

と懐を広く、一ひとひざ膝出ながら、

「ちつとも……お氣に入りましたら、私をすぐ、お口説きなすつても構いませんの。」

「きやツきやツきやツ。葛木さんの奥さん。どないしてかい？……」

「まあ、そんな事こそ、先方さきさまが御迷惑です。」

「いや、しかし、その積りで出向いて来たで。」

「羽織を。寒い。……そして私にも煙草をおくれな。」

美拳

「さあ……何の話じやったかね、そこで。」

「貴方あなた、その潰島田に結ったお人形さんですわ。」

「さよう、……就なかんずく中、それが、葛木さんの目と一所にばちばちと瞬きするじやね、――

――声を曇らして、姉と云う御婦人の事も言われた――

私は別世間わしを見たです。異った宇宙を見たです。新しい世の中を発見してむしろ驚異の念に打たれた。……吃驚びつくりしたんじやね、何の事はない。

かつて、その岐阜県の僻土へきど、辺鄙へんびに居た頃じやったね。三国峠を越す時です。只今、狼に食われたという女の検察をしたがね、……薄暮うすぐれです。日帰りに山家から麓ふもとの里へ通う機織はたおりの女工が七人づれ、可ええですか。……峠をもう一息で越そうという時、下駄はなの端緒はなが切れて、一足後れた女が一人キヤツと云う。先へ立った連の六人が、ひよいと見ると、手にも足にも十四五疋のぼの、狼で蔽おおい被かぶさった。――身体はまるで蜂の巣ですわ。

私は反対の方から上りのぼりかかったんでね。峠から駆下りて来た郵便脚夫が一人、（旦那、女が狼に食われております。）と云い棄てて、すたすた行きゆおる。――あとで、その顔を覚えとつたで、（なぜ通りかかつて助けんかい。）……叱ちつた処で、在郷軍人でもなし仕方が無い。そういう事も現在見た。

また、山の中に、山猫と云うのが居る、形はかつて見せん。見たものは無いと云うです。ただ深更に及んでその啼なき声こゑじゃね、これを聞くと百獸ひゃくじゅう悉く声を潜ひそむる。鳥が塹ねぐらで騒ぐ。昔の※々《ひひ》じやと云う。非常に淫いんわい猥わいな獸けものじゃそうでね、下宿した百姓の娘などは、その声を聞くと震えるですわい、——現在私も、それは知つとる。

炭焼の奴が、女を焼いて食つた事件もある。

そういう事は知つとるが、趣味と情愛の見聞が少かつたためじやろうか、医学士が生理学教室で、雛を祭る、と云うは信じなかつた。——吹く風はなこその関と思えどもですわ
「」

と嘆ためいき息して、髻に掛けた指を忘れた。

「鎧よろいの袖に桜のちらちらとかかると云う趣も、私のその了りようけん簡では嘘にせねばならん
じやつけえ。

恥入るです——一個人としてじやが。」

巡查は、ずるりと靴をずらして、佩劍はいけんの鞘手つかに居直つたのである。

「で、国手せんせいに大に謝おおいそうと思う処へ、五六人、学生とは覚ええない、年配の、堂々たる同僚らしいのが一斉に入つてござつたで、機おりを考えて、それなりに帰つたです。

この意をじゃね、願わくは貴方あんたから国手にお伝えのほどを偏ひとえに希望します。私は職務上の過失であらば責せめを負うです。それは別問題として、——私は、貴方から御挨拶を願うのが、もつともその道を得たものと信ずるのじや。

就てはです。私わしは没分曉わからずや漢の一巡査であるが、生理学教室に雛を祭ることににおいて、一石橋おぼろづきの朧おぼろづき 月 一片の情趣を会得した甲斐に、緋ひ緘おとしの鎧の袖に山桜の意気うらやまの羨うらやましさに堪えんで。

十年勤務の間、唯一の美拳として、貴方あんたに差上げたいものがある。

……奥さん。」

「……………」

「言うても構いませんな、奥さん。」

「嬉しいんですよ。」

と声が迫つて、涙が美しく輝いた。

「一生に一度ですわ。」

「葛木の奥さん、……学位年齢姓名と並べて、（同じく妻さい。）と認したためた手帳の一枚です、お受取り下さい。」

出すのを取つて、熟と俯向く、……潰島田の、水浅黄の手柄のはらはらと揺るるを視ながら、冷めた茶碗を不器用な手つきで、取つて陰氣に一口、かぶりと呑むと、ガチリと立つて拳手したきり、ただの巡査になつて格子を出た。

この巡査が、本郷を訪問した時の光景は、彼がここに物語つた通りであつた。それさえ、神境に白き菊に水あるごとき言うべからざる科学の威厳と情緒の幽玄に打たれたのに——やがて仔細有つて、この日の午後、赤熊の毛皮をそのまま、爪を磨ぎ、牙を噛んで、喘ぐ猛獣のごとくになつて、生理学教室へ、日本橋から本郷を一飛びに躍り込んだ……海産商会の五十嵐伝吾は、それはまた思ひの外意気地の無いものであつた。——

大学の廊下を人立して、のさのさと推寄せた伝吾が、小使に導かれて、生理学教室の扉に臨んだ時、呀、恋の敵の葛木は、籐の肱つき椅子に柔く腕を投げて、仰向けに長くなつて、寝ながら巻蓑を喫んでいた。……が、客来る、と無造作に身を起して、カタリと大床に靴を据えた。その音さえ、飢するまで、高い天井、大空に科学の神あつて彼を守護するごとくであるのに、かてて加えた学友が、五人の数、彼を取巻いて、あたかも迷宮の奇き灰色の柱のごとく、すくすくと居合わせたのが、希有な侵入者を見ると、一齐に伝吾に瞳を向けた。知らずや、その中に一人外科の俊才で、渾名を梟と云う……顔が似たの

ではない。いかもの食の大腕白、かねて御殿山の梟を生捕って、雑巾に包んで、暖炉にくべて丸蒸を試みてから名が響く、猫を刻んでおしやます鍋、モルモットの附焼、いささか苦いのは、試験用の蛙の油揚げだと云う、古今の豪傑、千場彦七君が真黒な服を着けて、高い鼻に、度の強いぎらぎらと輝く眼で、ごさんなれ、好下品、罷の皮をじろりと視て、頭から塩を附けたそうにニヤリと笑った。——この威にや恐れけん。

伝吾は扉の敷居口に、へたへたと腰を抜くと、罷の筒袖の前脚めいたやつを、もさりと支いて、土下座して、

「途惑をいたしました。」

とばかり、口も利き得ず、すぐごと逡巡して帰ったのである。

仔細は云うまでもない。……大概様子でも知れよう。前夜から、稲葉家へ泊り込んだのが、その二階を去らず、お孝に愛想づかしをされて突出されたのであった。

却説………巡查が格子戸を出ると、やがて××署在勤笠原信八郎とある名刺にのせた、

(同妻)を熟と視ていた、稲葉家のお孝は、片手の長煙管をばたりと落して、すつ

と立つと、頂いて、長火鉢の向う正面なる、朝燈明の清く輝く、縁起棚の端に上せた、が、黙って伏拝んで、座蒲団に居直った時、眉を上げつつ流眇に、壁なる罷の毛皮を見た。

「千世ちゃんは？」

煙草盆を引きながら少女が、

「お稽古ですの。」

「春子さん、夏次さん、千鳥さん、萩代さん、居なさるか。皆ちよいと来ておくれと、
そうお言い。……私、話したい事がある。」

怨霊比羅おんりようびら

五十三

——「露地の細路、駒下駄で。」——

カタカタと鳴る吾妻下駄、お竹蔵向の露地を、突袖して我家へ帰る、お孝の棲は、幻の
夜が深かった。

「姉さん。姉さん。」

と呼ぶ、可愛い声。

ひとしきり
 一時、芸者の数が有餘つたため、隣家の平屋を出城にして、桔梗、刈萱、女郎花、垣の結目も玉章で、乱杖逆茂木取廻し、本城の欄の青簾は、枝葉の繁る二階を見せたが、近頃いわれあつて世帯を詰めて、稻荷様向うの一軒につづめたので、隣家はあたかも空屋である。

そこまで戻ると、我家の格子戸前の木戸を細めに開けて、差覗く島田を見た。

「千世ちゃんかい。」

お孝は、ずっと来て、年上の女の落着いた声を沈めて、

「どうおしなの、お前さんもう寝ていたんじやないのかい。」

「ええ、寝ていたんですけれど、私、国手がお帰んなさるのを、姉さんが送って出て、この木戸で、何だか話していらつしやるのが寂しく聞えて、知っていたんですよ。カタカタと足音がして出ておいでなさいますから、あの、じゃ露地口までお送りなすつたんだ、そう思っていましたけれど、それにしてはあんまり遅いんですもの。」

いつまでも、お帰んなさいませんし、それだし、あの、一度お寝つたんですから、姉さんは寝衣でしようのに、どうなすつたしら。……私、心配で……ここまで起きて来て、あの、通へ出て見ようと思つたんですけれど、可恐いでしよう。……それですから、あの、

ここにつかまつて震えていましたの。」

「何だねえ、そんな弱虫が、それじゃ、来てくれたつて何にもなりやしなないじやないか。」

と口では笑いながら、嬉しい目で。その癖もの案じの眉が顰む。……軒の柳に霽の有る、
瓦斯ほの暗き五月闇。浅黄の襟に頬白う、……また雨。催の五位鷺が啼くのに、内
へも入らず、お孝はイむ。

「どうかしたの、姉さん。」

「いいえ、どうもしやしないがね、私ね、どうしようかと思つているんだよ。千世ちゃん、ちよつとここへ来て御覧。」

「はあ。」と、お千世は何の気なし、木戸を内へギイと引く。

「静によ、誰か目を覚すと面倒だから。」

「あい……何、姉さん。」

「ちよつと、木戸のこの柱に、こんなものが貼つて有るだろう。」

お千世は、薄気味悪そうに、お孝の袂に掴まりながら、直ぐ目の前なを、爪立つて覗くように、と見ると、比羅紙の、およそ二枚舳ぐらいな大ききの真中にぼつりぼつりと筆
太に、南無阿弥陀仏、と書いたのが、じめじめとして、さながら、水から這上つた流

灌頂くわんちようのごとく、朦朧もうろうとして陰気に見える。

「可厭いや、姉さん、何？ ちよいと。」

お千世は息を切つて震え声。

「性が知れてるからちつとも気味の悪いことは無いんだよ。

お聞き、前刻さつき、国手せんせいが来なさりがけに、露地口を入ろうとして、ふつと、そら、その松家さんの羽目板を見なさるとね、この紙が、ちようど、入口の取着とつきの処に貼りつけて有つたとき。

巻煙草を買うのだったけ、とその拍子に気が付いて、表の小母さんの許とこへ行つたんだそうだけれど、もう寝ていたんだって。

今夜は、来ようが遅かつたわねえ。」

五十四

「国手せんせいはね、それから仲通まで買いに行つたんだとき。……そしてねえ、一本喫ふかしながら入つて来ると、見たばかりで、もう忘れていたくらいだったのが、またふつと気が付

いて、ああ、ここに有ったつくと、お思いの、それがお前、前の処には無くつてき。同じ羽目板だけれども、足数七八つ、二間ばかり奥へ入った処に、仇あだじろ白くなつて字が見える、……紙かみが歩行あるいた勘定だわねえ。」

「姉さん。」

「可こ恐わくはないんだつてばさ、この娘こは。」

とお千世の肩を抱込んで、

「何かお禁ましな厭いでももあるかいツて、国手がね、内で私にお話しなの。……何でしょう、月日も、堂寺てらも記かいてなければ、お開帳の広告でもなからうし、別に、そんなお禁厭いが有るツてことも聞きません。変ですな、……そう云つていたんだがね。」

お帰りなさるのを、榎かまちまで見送つた時、私何だか気になつてね、行つて見ましようよツて、下駄つつかを突掛つつかけて出ようとする、（お止し、密そつとあんなものを貼はつて置いて、それを見たものに、肺病か何か当の病人から讓ゆずりわた渡して、荷を下くだそうなんのつて、よくあることだ。……お前は女だから神経を起すと不可いけない、私は工面の悪いやぶ藪やぶのかわりにや、大地震の前兆しやうだつて細露地しやうを抜けるのは気にならないから。）

串じやうだん戲げ 半分はんぶんそう言つて、国手は平気なんだけれどもね。もしか禁厭いならどうしよう、

（貴方は担がないでも、荷を見せて可いもんですかつてき、……災難ならせめて半分、私が背負いましょうよ。）とぼたすた急いで格子をついて出ると、お前何んだろう……
 そらここへ来ているのさ。

羽目を伝わって、木戸へおいでなすったんだわ。私も慄然と総毛だった。

はてな、字が殖えて妙な事が書いてある。前刻見たのは念仏ばかりで、こんなものは無かつたつて、御覧。」

と云う、南無阿弥陀仏の両傍に、あいあい傘の楽書のように、（となえろとなえろとなえろとなえろ、）と蛞蝓のごとくのたくり廻る。

「国手がね、（何だ、浄土か真宗にも、救世軍が出来たんじやないか、）つて笑つたけれどね、……私はドキリとしたんだよ。仮名の形を一目見ると分つた。お念仏を（唱えろ唱えろ。）——覚悟をしろ——ツて謎じやないか。こりや、お前、赤熊の為業だあね、あの、
 鯁野郎の。」

「まあ、熊兄さん。」

「止しておくれ。」

はたはたと袖を払いて、

「身ぶるいがする。いつかお巡査おまわりさんの来なすつた朝、覚悟が有つて長棹ながざおに掛けてから門傍かどばたへも寄せつけない。それを怨んで、未練も有つて、穴から出たり入ったり、ここいらつげ廻しているに違いない。何の男のようでもない。のツそりの蝦夷アイヌなんか、私は何とも思わない。悪く形でも顕あらわして見たが可いい。象牙の撥ぼちがあるものを、払はたき殺しても事は済む。——国手の身のまわりをつけ廻されるんだと、ね、千世ちゃんや、姉さんは本当に案じられる。

角の紀田屋きだやまで送つて行つて、車をそう云つて帰して来たがね、獣は駆けるのが疾はやいやね、車にも乗れば乗るだろう。——泊めたかったが、お肯ききでなし、……」

とお孝は独言ひとりごとのように云つて、

「途中で、またそうでもない、新聞にお名前が出るような事なんぞ無ければ可いいが、」
と氣を揉む頬の後おくれ毛けは、寝みだれてなお美しい、柳の糸より優しいのである。

「姉さん。」

お千世が顔を覗いて、

「縁起棚へお燈明をあけて、そしてお祈をしましょうよ。私も拝みますわ。」

「嬉しい娘こだね。」

と頬摺ほおすりしたが、襟を合せて凜りんとして、

「お待ち、私、考えた。……お稻荷様へお百度を上げよう。」

とて見返る祠ほこらは、瓦斯燈もやの靄ひを曳ひいて、空地に蓮はすの花の紅あかいがごとく、池があるかと浮いて見える。

「数取りにはね。」

と云うより早く、ぴりぴりと比羅紙ひきはを引剥ひがす……

「これを裂こいて紙捻こよりにしようよ、——人を呪なわば穴二つさ。見たが可いい。」

氣の立つたお孝は、褌こを引上さぐるより前さきに、雨あめ霽あがりの露地あへ、ぴたと脱ぬいだ、雪の素足。

意いき地ぢも張も葉はがくれの闇やみに、男を思おもうあわれさよ。鶴を折をる手と、中指ぶらに、白金チナの白蛇はくた輝かく手と、合せた膝かに、三筋五筋かん観せ世より捻ひ、柳の系けいに、もつれ纏もる、鼓の緒いとにも染めてまし。

あわれ、かかる時は、あすの逢瀬あを楽たのみに、帰途かえりを案あずるも心ゆかし、寐ねられぬ夜半よの待人掛たいける、小さな犬こしらも拵こしらえ交ませて、お千世せんに背打せなたれて微笑わみもしたが。

柳の葉の散る頃は、——続いて冬枯ふゆの二日月、鬢びんぐし櫛くしの折れたる時は——

ひとふり
一口か一挺か

五十五

——「露地の細路駒下駄で。」——

男が口の裡で、フト唄つて、

「不可^{いか}んぞ、これは心細い。」と、苦笑いをしながら立直つて、素直^{まっすぐ}に杖^{ステッキ}を支くと、そのまま渡り掛けたのは一石橋。月はないが、秋あかるく、銀河の青い夜の事。それは葛木晋三である。

露地に吾妻下駄カタカタの婀娜^{あだ}な女と因縁のある、唄の意味も心細いが、お孝が投遣りに唄うのは、勝気と胆勇を示すものと云つて可い。その口癖がつい乗った男の方は、虚^{うつ}気^けと惑^{わく}溺^できを^あら^わすものと、心付いた苦^に笑^がも、大道さなか橋の上。思出し笑^{わら}いと大差^ちは無^ないので、これは国^{せん}手^{せい}我身ながら（心細い。）に相違ない。

その虚^{うつ}に憑^つけ入る、魔はこんな時に魅^さす、とある。

今、橋の上を欄干に添って、日本銀行の方へ半ば渡り掛けると、橋詰の、あの一石餅の、早や門を鎖した軒下に、大な立ん坊の迷兎のごとく蹲っていた男がむらむらと立つと、ざわざわと毛の音を立てて、鼻息を前にハツハツ獣の呼吸づかい。葛木の背後に迫って、のそつと前へ廻ると、両手を掉つた不器用な、意気地の無い叩頭をして、がくりと腰を折つて、

「国手、お願い！」

と喘いで云う。

はつと一步あとに退いて、立停つて、見透して、

「何だ、何ですか。」

彼の影の黒く大なるに對して、葛木の手のカウスは白く、杖は細かった。

「直訴であります。国手。」

「直訴とは……？」

「直訴とは、……直訴とは、切、切羽詰つたです、生命がけで、歎願をするです。貴方を將軍家だ思つて、橋から青竹を差出します。俺は佐倉宗五ですので、ええ。この願を聞届け遣わされりや、殺されても、俺、礫になつても可えのです。国手。」

「何です。……唐突に、と云うんだけれども、私はお前さんを知っています。また、お前さんも知らないとは言わせませんまい。そしてお頼みと云うのは何です。」

「国手、御診察が願いてえだな。」

と、粗雑に太く云った。が、口覚えに練習した、腹案の口上が途中で切れて、思わず地声を出したらしい。……で、頭を下げて赤熊は橋の上に蹲る。

四五分では、話のけりは着ないと覺つたろう。葛木は巻煙草を点けた。燃えさしの燐寸をト棄てようとして水に翳すと、ちらちらと流れる水面の、他の点燈に色を分けて、雛の松明のごとく、軸白く桃色に、輝いた時、彼はそこに、姉を思った。瀆島田の人形を思った、榮螺と蛤を思った、吸口の紅を思って、火を投げるに忍びなくって、——橋に棄てた。

これと齊しく、どろんとしつつも血走った眼を、白眼勝に仰向いて、赤熊の筒袖の皮擦れ、毛の落ち、処々、大なる斑をなした蝦蟇のごときものの、ぎろぎろと睨むを見たのである。

が同時にまた、思出の多いこの頼母しさを感じて、葛木は背後に活路を求めろのを忘れつつ、橋の欄干に、ひた、とその背を凭せた。

五十六

葛木は從容として云つた。

「お前さん、診察が頼みたい？……そうすりや死んでも可い。そんな解らない謎見たいな事を言わないで、判然と、石か、瓦か、当つて碎けたら可いじゃないか。私も診察なら病院へ来たまえなどと廻りくどいことは言わないから。」

「實際、願いたい次第でして。就てはで、御覽の通り、着のみ着のまま云ううちにも、擦切れた獣の皮一枚だ、国手。雨露凌ぐ軒はまだしも、堂社の縁の下、石材や、材木と一所にのたつている宿なし同然な身の上で、御挨拶も手続も何も出来ねえです、そこでもつて直訴だ、ね、生命がけで願えてえだな。」

「本当の診察なら、私は不可い。まるで脈を一つ採つたことの無い、自分の風邪をひいたのには葛根湯を飲んで、それで治る医者なんだ。こつちも謎のようなことを云うんじゃない。事実だよ。診察は、から駄目なんだよ。」

「決してそれは脈を取つて貰うには当らんです。で、ただ国手の口一つだなあ。」

「口一つかね。」

「そうですわ。」

「どうするんですか。」

「四の五の無いで、ただ一言、（お孝に切れる。）云うて下さりや可いのですのだい。」

「大方そんな事だろうと思つたよ、……この診察は当つたな。」

葛木は莞爾しながら、

「折角だ、が、君、頼まらないよ。」

「何で頼まれん、何で。ありや俺の生命ですが。」

「私の生命かも分らんのだ。」

「俺の女房だ事、知らんのかい。」

「私は芸者だと思つているがね。」

「何でも可い。」

とドス声で忙込みながら、

「すっぱり切れてくれ、頼むだでな。」

「女に言え、女に、……先方で切れればそれ迄よ。人に掛合われて、自分の情婦を、退く

も引くもあるものか。」

「……自分の情婦。……ええ堪らん、俺の前でお孝の事を。……うう、筋が引釣る、身体が震える。」

生命とも、女房とも思う女を引奪られた恋の敵に、俺の口から切れてくれ頼むと云うは、これ、よくよくの事だ思わんですか。

女に云うて肯く程なら、遠くから影を見ても、上衣の熊の毛まですすく立つお前んに、誰、誰が頼む、考えんかい。」

「私も同じことを言いたいな。女が肯かないほどのものを、男が掛合われて引退る奴がありそうな事だと思ふのかい。」

「俺を人間だと思ふか、国手。」

赤熊はすすくと立つた。

「悪魔だ、鬼だ、狂人だ、虎だ、狼だ。……為にならんぞ！」

「ああ、その上にまた熊でも可いよ。」
「汝！」

葛木は欄干に杖を倒して、柔に手を払いた。

「刃物を持つてるか。」

「むむ、持たんことがあるもんだか。」

「ふたふり二口あるか、ちよう二挺持つてるか。」

「どうするだい。」

「ひとふり一口渡せ、一挺貸せ。——持たんのか。一本しかない刃物なら、やみうち暗撃にしろ。離れて狙え。遠くから打て。前に廻つて、なのり名告掛けて、生命の与奪やりとりをすると云うに、かたき敵の得ものを用意しない奴があるものか、はははは、馬鹿だな。」

艸冠

五十七

「ああ、言わつしやる。」

赤熊はみがまえ身構、くちぶり口吻、さて、急に七つ八つ年を取ったように老実じみに力なく言うのであつた。

「今言わしやつたは度胸でないで。胆玉でないですだ。学問の力だ。国手の見識ですわい。」

詫入りますで、はい。

もとより將軍様に直訴する云うたほどです。はじめから国手の身体に向うて手を挙ぎようとは思わんのですれど、ものは発奮だで、赫としたでな。そりや刃物措け、棒切一本持たいても、北海道釧路の荒土を捏ねた腕だで、この拳一つでな、頭ア胴へ滅込まそうと、……ひよいと抱上げて、ドブンと川に溺める事の造作ないも知つたれども、そりや、あれを見ぬ前だ。

あれよ、……あの、大学の大教室に、椅子で煙草を喫んでござつた、人間離れのした神々しい豪い処を見ぬ前だで——あれを見た目にや、こんなその、土竜見たようになつてしもうた俺が手で、危いことするは余り可惜ものだ思う気が、ふいと起つてどうにも出来ねえのですのだで。

それともに、な、国手、お前んの生命を搔払いさえすりや、お孝との振が戻つて、早い話が旧々通り言うことを肯いて、女が自由になる見込さえあればですだ、それこそ、お前んが国手でも、神でも、仏でも、容赦する気は微塵も無いだ。

無いだ。が、お前んに逢つて、機嫌の悪い事でもあつた日には、家中に八ツ当りで、十と言こと云ことうことに、一口も口を利かぬ。愚に返つた苦くろうと勞ろう女にょをどうするだね。お前んの身に異常いじやうがありや、女も一所に死ぬですだらうで、……そうなればどうなるですだい。

国手、俺は、あの女は生命より大事です、死のうにも死に切れん。生きとるにも生きとられん。

国手、顔を見られないくらいなら、姿だけでも見るが可あえし、姿さえ見られんなら声こゑばかりも聞くが増あだし、その声さえも聞かれぬなら、蹺あしおと音ねでも聞いていたい。その蹺あしおと音ねにすらすらと衣服きものの触る音でもしようなら、魂たまに綱なわをつけて、ずるずる引ひき摺ずり引ひん廻まわされて、胸むねを引ひ搔かいて、のた打うち廻まわるだ。

お前ん、誰たれも知るまいし、また知らせるようにもせんですが、俺はお前ん、二階のぼから突出とつしゅつされて、お孝たかの内うちに出入でいりが出来なくなつてからは、天あまに階はしご子こ掛かけるように逆さかせ上あつて、極ごく道だう、滅めつ茶ちや苦く茶ちや、死物しぶつ狂きやういで、潰つぶれかけた商あ会いは煙けむにする、それがために媽かかあ々は死しぬ。

「女房かみざんが——死しんだ。」と、学がく士しは鋭えいく口くち早はやに言い返かへす。

「二歳ふたつになつた小兒こどもは棄すてる。」

「……………」

「木賃泊りの天井裏に、昼は内に潜つて、夜になると、雨でも、風でも、稲葉屋の周囲を、
胡乱つき廻つて、稲荷さんの空地に蹲んでもいりや、突当りの黒塀に附着いて立明す：
…そうして声を聞く、もの音を考えるですだい。」

「過日來から、隣の家が空いたです、この頃では、大概毎晩、あの空屋で寝ているです。
すだ。」

「空屋でかい。」

と、驚いて云う。

「国手、お前んはまた毎晩のように、蛇が蟠を巻いておる上で、お孝といちやついてござ
る勘定だ。」

「が、俺の方は、おつけ晴れて、許して縁の下へ入れて置いて貰う方が、隠忍んで隣の空
屋に潜るよりも希望ですだ。」

襟の辺を引搔くと、爪を銜える子供のよう、含羞む体に、ニヤリとした、が、そのま
ま、何を囁むか、むしやむしやと口舐ずる。」

五十八

「まだ慾よくの言いえば、お前まんとお孝たかと対さしむかい向むかひで、一猪口ひとちよこ飲やる処ところをですだ、敷居しきいの外ほかからでも可えい、見ていたいものですだ。

お孝たかを俳優やくしやで、舞台ぶたいだ思おもえば、何なにとしていられても、顔かほを見て声こゑを聞きく方かたが、木戸きどに立たつて考かんえとるより増まだからな。」

俯うつむ向むかいて半はんば泣なき、

「嫉ねたみ猜そねみは、まだこうまで惚おぼれない内うちだと考かんえるで。

初手はつてはね、お前まん、喧嘩けんかした事ことも、威おどした事こともあるですだ。

現いまに国手せんせい、お前まんの大学病院だいがくびやんの何なにとか教室きやうしつへ俺おれが推掛おしかけて、偉ゐい人ひとたちに吃驚びっくりして遁にげて返かえつた、あの朝あさですだ。忘わすれんですが。——稲葉家いなばけの格子こしへ巡査じゆんさが来きて、お孝たかにお前まんの身みの上話うへわいて、——何なにが嬉うれしい、……俺おれは二階にがいで聞きいて胆魂きもたまが煮にえくり返かえるに、きやつきやつきやつきやつと笑わらうて、情事じやうじの免許状めんぎじやうようなものを渡わたいて歸かえつた。お孝たかが、直ただぐに内中うちちゆうの芸者げいしやを茶ちやの室むまへ集あめて、ですだな、国手くわんて。

（私は今日けふからおかみさん、そう思おもつて附合つきあつておくれ。そのかわり、私もその氣きで附合つきあ

うから、借金なんか、まけて欲しい人には直ぐに目の前で帳消しに棒を引きますよ。――
 だ、お前ん。

その勢いきおいで二階へ帰つて来ると、まだ顔も洗わんでおる俺を捉とらまえて、さあ、突いきなり然帰つておくれですだ。……芸者なら旦那が有ろうが、何が来ようが構わない。それが可厭いやならお止しだけれど、極きまつた人が出来た上は、片時も、寝衣ねまきで胡坐あぐらかいた獣けものなんぞ、備前焼の置物けしものだつて身のまわり六尺四方は愚おろかなこと、一つ内へは置けないから、即いま座帰れ。……云きまじめうて生真面目きまじめですがい。

俺、はじめは笑つたです。が、怒つたですだ。愚痴言うた。……頼みもしたですのだ。耳にも入らないで、（汚らわしい、こんな物を。）お前ん、お孝が蒲団を取つて向うへ刎はねると、その時ですわい。かねて国手の事を俺嗅かぎつけて知つとつたで、お孝を威しつけてくりようとな、前の夜さり、懐ふとこ中に秘かくいておつたですれども、顔を見ると、だらけてはや、腑ふが抜けて、そのまんま、蒲団の下へ突つ込んで置いた、白鞆しろさやの短刀が転がつて出たです。

お孝が見たでな。天道時節ここだ思うて、（阿魔あま覚悟があるぞ！）睨にらんだですだ。ばたばたとお孝が立つて、占めた、遁にげる、恐れたぞ。俺が勝つた、と乗掛つて、階はしご子段だんの

下口おりくちで捉とらまえたは可たかつたですれど、どうですかい。

お孝は遁にげたでないですが。……あの階子は取外しが出来るだでね、お孝が自分でドンと突ついて、向うの壁へ階子をば突つぼすしたもんですだ。（短刀をお抜き、さあ、お殺し、殺しように註文がある。切きつちや不可いけない、十の字を二つ両方へ艸くさかんむり冠むりとやらに日いわくをかいて。）とお前まへん、……葛木と云う字に、突ついて殺せ。（名まで辛抱は出来まいが、一字や二字は堪こらえて見せよう。さあ早く。）と洞爺湖どうやこの雪よか真ま白しろな肌を脱いで、背筋のつるつると朝日で溶けて、露たの滴たりそうな生なま々なまとしたやつを、水浅黄みやうちらめかいて、柔やわりと背うしろむ向むきに突つ着ちけたですだで。

豊ふつくら艶のぞと覗のぞいた乳ちちくび首くびが白しろい蛇へびの首くびに見みえて、むらむらと鱗うろこも透とく、あの指ゆびの、あの白しろ金がが、そのまま活いきて出でたらしいで、俺おれはこの手足てあしも、胴みも、じなじなど巻ま緊きめられると、五臟ござう六腑りくぷが蒸むれあが上あって、肝かんまで溶と融とけて、蕩とろ々とろに膏あぶらぎ切きった身体しんたいな、——氣きの消けえいような薰いの佳いい、湿しった暖あたたい霞かすみに、虚は空くう遥はるかに揺ゆ上あげられて、天あまの果はに、蛇へびの目玉めだまの黒くろ金剛こんごう石いしのよような真ま黒くろな星ほしが見みえた、と思おもうと、自ひ然じに、ののさんと、二階にがいから茶ちやの間まへ素ま直ちく、棒ぼう立たちに落おちたで、はあ。」

と五十嵐いそがし伝でん吾ごは腹はらを揺ゆつて、肩かたを揉もんで、溜ひ息そして言いう。

河岸の浦島

五十九

「その足で、お前まん、大学に押掛おけてからは、御存まじの通りだで。

さあ、後の、俺が身体しんたいどうなるだね。

天人てんじんに雲の上から投落なされたも、お前まん、勿体なないだが、乙姫おとぎ様に海の底から突出と出され
たも同おんなじ一いっですだ。

また始めに、お孝おたかが俺のものになつた時は、知つたほどの誰も彼も、不断ふたつ云う、赤熊あかぐまだ
ことの、臍おつとせ臍せいだことの、渾名あだなを止やめて、浦島うらしまだ、浦島うらしまだ、言うたもんで。俺も日本橋
に竜宮りゅうきゆうが在る、と思うたですが。その筈はずですだね。鯨くじらに乗のつて泳およぎ込こむ程ほどの不思議ふしぎで
の、熊くまがお孝おたかと対さしむかい座ざに、稲葉いなば家の長火鉢ながひばちの前に胡坐あぐら組くめますまい。

見得みえは言いわねえですぞ。国手せんせいの前まへだ。

死かんだ媽かあは家附かきで、俺は北海道へ出稼でせ中ちゆう、堅気かたに見込みこみを付つけられて、中ちゆうぐらいな身み

代へ養子に入つた身の上だがね。日の丸の旗を立てて大船一艘、海産物積んで、乗出して、一花咲かせる目的もくろみでな、小舟町へ商会を開いた当座、比羅代りの附合で、客を呼ぶわ、呼ばれもしたので、一座に河岸の人が多かつたでな。土地の芸者も顔が揃うた。二三度、その中に、国手、お前も因果は遁れぬのが、御存じですだ、滝の家の清葉とな、別嬪べっぴんが居たでねえですか。」

葛木は吃きつと見る。

「容色きりようはもとより、中年増でも生娘のような、あの、優しい処へ俺目を着けた。ひとにら

睨み、床の間から睨んだら、否応はあるまいわい。ああ、ここが俺膺肭臍の悲しさだ。金になる男のぬくとみにや、誰でも帯を解く、と奥州、雄鹿島の海女あまも、日本橋の芸者も同じ女だと、北海道釧路国くしろのくにの学問だでな。

——吃驚びっくりしたですだ、お前ん……ただ居りや袖も擦合すりあうけれども、手を出すと、富士の山の天辺てっぺんあたりまで、スーと雲で退のかれたで、あつと云うと俺、尻餅を搗ついたですが、(御守殿め、男を振るなんて生意気な、可よし、清葉さんが嫌つた人なら、私が情人いろにしてやろう。……)

これだで国手。それこそ悪く傍そばへよると、撥ばちで打ぶたれるぞ、と友達の衆に用心されたそ

のお孝が、俺の手を曳いて抱込んだでな。いや、お孝と来ては、対手の清葉を驚かすためには、裸体で本当の罷にも乗兼ねえですが。——後で聞くと、清葉を口説いて振られたと云うために、お孝の關係をつけたのが、一人二人でねえと云うだでな。」

葛木は聴いて、

「私も御多分には漏れんのだけ。」と、静に衣兜に手を入れる。

赤熊は星が痛そうに、額を確と両手で蔽い、

「ところが、そうでない。調子が違うた。……誰もそのかわり、お孝の口から、（可厭になつたら、それツきり、御免なんだよ、可いかい。）と初手に念を推されておるで、突出されて謂う理窟は無いだね。」

そりや、随分俺が身だけでは金も使った。けれどもな、鯨や数の子の一庫二庫、あれだけの女に掛けては、吹矢で孔雀だ。富籤だ。マニラの富が当らんとつて、何国へも尻の持つて行きようは無えのですもの。

が、人情は理窟でないで。

女房も生命も、その生命から二番目の一人の小児を棄ててまでも……」

「ちよつと……」

葛木は急に遮りつつ、

「ただ聞いてはいられない、……お互に人の児こだよ。お前、小児を捨ちまったと云うのは？ 構ういつけない、打棄うちぢやつてあるという意味なのかい。」

「そうでねえです。」

「人に遣ったという事かね。」

「違う。」と、ぶっきらぼうに言う。

「棄すて子こをしたか。」

と小さな声。

頭を釘

六十

赤熊は、まじまじとして、頹ぐ然たりと俯うつ向むいたが、太いたく恥かじたらしく毛皮の袖を引搜すと、何か探り当てた体で、むしやりと噛かむ。

葛木は眉を顰めて、

「ちよつと、小児も小児だし、……前刻から、気になるが、とにかく、色事の達引中だ、なあ、まあ。……それに、そんな事をしては不可いじやないか。見ていられない、……何を食うんだ。」

「はあ、これかね。」

と、食つた後の指を撮んで、けろりとした顔を上げて、気も無い様子で、

「虱だと思つたかね、へへ、違うですが。大丈夫だで、国手。脂の抜きようが足りんだつた処へ、寝るにも起きるにも脱がねえもんで、こりや、雨な、埃な、日向な、汗な、膏で熊の皮に湧いた蛆だよ。」

「え。」

「虫ですがい。豪く精分の強い、補劑になるやつで、なあ。」

伝吾は厚ぼつたい口をだらりと開けつつ、

「これが有るで、俺、この頃では、一日二日怠けて飯食わねえ事あるですけれども、身体が弱らん。かえつて、ほかほか温だね。取つちや食い、取つちや食いするだ。が、あとからあとから湧くですわい。二十間の毛皮を縫包みにしておるで、形のある中は虫が湧く

ですだ。」

葛木は面かおを背けて、はつと吐こうとした唾つばを、清葉の口紅と、雛の思出、控えて手巾ハンケチを口に当てた。

——やがて、お孝が狂気になったも、一つはこの虫が因もとである——

六十一

「貴下あなた、何をしておられるかね。」

靴を忍んで唐突だしぬけに、ずかずかと寄つて声を沈めたのは巡査であつた。

「ちよつと談話はなしを。」

葛木はその時まで、虫に背けた面かおを向ける。と、星に照らして、

「や、国手せんせいですか。」

「おお貴官あなたで。」

「この橋は妙な橋ですな。」

と莞爾にっこりしながら、角燈を衝つと向ける。そこに背後うしろむきに蹲しゃがんだやつ。

「こちらは、」

「旧友です。ふとここで出会ったんです。」

「お話しなさい……失礼しました。」

「ああ、貴官、いつぞやは——一度、更めてお目に掛りたいと思っています。」

「難有う。機会を待ちます。」

と銀河を仰ぎ、佩劍の秋蕭殺として、鵲のごとく黒く行く。橋冷やかに、水が白
い。

「夜が更ける……おい、そして、そして小児は。」

「国手、臍腑から餌を吐くまで何事も打まけたで、小児を棄てた処を言うですれど、これだけは内分に願いたいでね、極ねえ。……巡査にでも知れるとならんですだ。」

「余り、巡査に遠慮する風でもあるまいじゃないか。」

「そうでねえです。河岸の腸拾いや、立ん坊は大事無いですれど、棄子が分ると引っぱられるでね、獄へ入れられる。それも可えですが、ただ、そうなると、縁の下からも、お孝の聲が聞かれますだよ。」

葛木は思わず吐息した。

「無論言いはせん。」

「なら話すだがね、小児を棄てたのは、清葉の門だで。」

「何、清葉の。じゃ、あの滝の家で拾って、可愛がつてると云う小児は、お前のかい。」

「小児は幸福ですだ。」

「むむ、幸福だ。」

と引入れられて、気を取られた調子が高く、

「清葉が、頬摺りしたり、額を吸つたり、……抱いて寝るそうだ。お前、女房は美しかつたか、綺麗な児だつて。ああ、幸福な児だ。可羨しいほど幸福だ。」

摺つて出るように水を覗く、と風が冷かに面を打つ。欄干に確と両手を掛けた、が、熟と黙つて、やがて静に立直つた時、酔覚の顔は蒼白い。

「私は馬鹿だよ。……もし私を、仮にお前の境遇に置いたとすると、そのくらいな智慧も分別も決して無いのだ。お前は私より知識がある、果断がある、……飯のかわりに、熊の毛の虫を食つても、それほど智慧があり、果断もあれば、話は分ろう。」

大分遅い、……今度の巡査はこのままには通らんぞ。さあ、早い処を言え。

お前の要求は肯入れられない、二人は断じて縁を切らない……」

半ば聞いて赤熊はまた頹然ぐたりとした。

「そう言ったら、お前は どうする、私を殺すか。」

「……………」

「お孝を殺すか。」

「ええ、あれを殺せますほどならです、お前まんに、手向いするだい。殺したい、殺したい、殺して死にたい思うても、傍そばへ行きや、ぼつと佳いい香においのするばかりで、筋も骨も萎なえな々と、身体えがはや、湿のりった粘のりのようになりますで。」

「チヨツ、しっかりしないのか。お孝に手出しが出来なかつたら、せめて私を殺す、私を狙う計画を立ててくれ。勇気を起せ、張合を附ける。私が頼む。そして私にお前の言分を刎はねつけさせてくれないか。私も頼む、その様子じや靄もやを引ひき掴つかんで突返すようで、断るに断り切れない。……こんな弱つた事は無いのだ。」

おい、男がものを言掛けるには、もしそれが肯入れなかつたらどうする、と覚悟を極きめてかかるのが法だ。……恥を知れ、恥を知れ。氣を判は然つきりして出直して、切物きれものか、刃物やいばの齒はごたえのあるようにして、私に断然きつぱり、（女と切れない。）と言わしてくれ。」

葛木が焦じれて気色ともに激しくなるほど、はあはあと呼吸を内に引いて、大息あえで喘あえいだ

が、獣けものの背の、波打なつ体ていに、くなくとなると、とんと橋の上へ、真俯まうつむ向けに突伏つつぶしてしままう。

「お願いですだ、拝むですだい。……邪魔じゃまならば、縁の下へ突込つっこまりようで。柱はしらへうしろ手に縛ばられていながらも、お孝の顔を見ていたいで、便所の掃除でも何でもするだ。活写か写真しんで見たですが、西洋うらやまは羨うらやましい。女の足を舐なめるだあもの。犬になつても大事だいじねえだで、香においが嗅かぎたい、顔かほが見みたいで、この通り拝かむだ、国手こくで。恥はも、外聞がいぶんも、お孝があつての上うですだよ。」

わつと云うと、声を上げて、ひくひく後あとを引ひいて泣なく。

葛木くわきは踵かかとを刻くんで、

「聞きけ、聞きけ。だが何なににも言ういうことが出来できない。……では、お前まへ、私わたしがきければ、お孝は確たしかにお前まへに戻るかへるか、その、お前まへに、お孝おたかが戻かへると思おもうのかよ。」

「そりゃ、そりゃ戻かへつても戻かへらいても、国手こくでがあるより増まだでね、声こゑだけ聞きくでも姿すがただけ見るみるでも、国手こくでと二人ふたりの時ときと、お孝おたか一人ひとりの時ときとは、俺おれが心持こころもちがどう違ちがうか考かんえずとも分わるだでね。拝かむですだよ。何も言いわんで。……こ、こ、この橋板はしに摺こすり付けて血ちを出だして願ねがいたいども、額かぶの厚あぼつたい事ことだけが、我われが身みで分わる外ほか何なににも分わらん。血ちの出だないのが

口惜くやしいですだ。」と頭を釘に、線路の露の鉄を敲たたく。
学士はフイと居なくなつた。銀河のあたり、星が流るる。

露霜

六十二

はツと声に出して、思わず歎ためいき息をすると、浸にじむ涙を、両の腕。……面おもてをひしと蔽おおうて
いた。

俚くるまの上で——もう夜半よなか二時過。

この辻車が、西河岸へヌツと出たと思うと、

「ああ。」

葛木あわただは慌あわしく声を掛けた。

「ちよつと待て、車夫くるまや。」

「へいへい。」

「忘れものをして来た、帰つてくれないか。」

「唯今、乗した処へ。」

「ああ。」

夜延仕でも、達者な車夫で、一もん字にその引返す時は、葛木は伏せた面を挙げて、肩を聳かすごとく瘦せた腕を組みながら、切に飛ぶ星を仰いだ。が、夜露に、痛いほど濡れたかして、顔の色が真蒼であった。

「可し、ここで——ここで——ここで——」

と焦つて、圧えて云い云い、早や飛下りそうにしつつも駆戻る発奮にずかずかと引摺られるように町の角を曲つて、やつと下立つた処は、もう火の番を過ぎて、お竹蔵の前であつた。

直ぐに稲葉家の露地を、ものに襲われた体に、慌しく、その癖、靴を浮かして、登音を密めて、したしたと入ると、門へ行つた身を翻して、柳を透かしながら、声を忍んで、二階を呼んだ。

「お孝さん、……」

寂然としていたが、重ねて呼ぶのに気を兼ねる間も無く、雨戸が一枚、すつと開いて、

下から映す蒼い瓦斯を、逆に細流を浴びたごとく濡萎れた姿で、水際を立てて、そこへお孝が、露の垂りそうに艶麗に頭れた。

が、それは浴びるばかりの涙なのである。

と、見る時、葛木も面にはらはらと柳の雫が、押えあえず散乱るる。

今宵は三度目である。宵に来て、例のごとく河岸まで送られて十二時過に帰った時は、夢にもこうとは知らなかった。——石橋で赤熊に逢つて、浮世を思捨てるばかり、覚悟して取つて返した時は、もう世間もここも寐静まつていた上に、お孝は疲れた、そして酔つてもいた。……途中送る折も、送る女が、送らるる男の肩に、なよなよと顔を持たせて、「邪慳だね、帰るなんて。」

ぐつすり寐込んだに相違ない。ええ、決心は鈍ろうとも、ままよ、この次に、と一度引返そうとして、ただ、口ずさみのひとりでに、思わず、

「お孝……」

と呼ぶと、

「あい。」と声の下で返事して、階子を下りるのがトントンと引摺るばかり。日本の真中に、一人、この女が、と葛木は胸が切つたのであつたが。

暖い闇も、石のごとく、砥のごとく、冷たく堅く代るまで、身を冷して涙で別れて……
三たび取って返したのがこの時である。

お孝は、乱書の仮名に靡く秋風の夜更けの柳にのみ、ものを言わせて、瞳も頬も玉を洗ったように、よろよろとただ俯向いて見た。

「済まないがね、——人形を忘れたから。」

「はい。」

と清く潔い返事とともに、すつと入ると、向直つて出た。乳の下を裂いたか、とハツと
思う、鮮血を滴らすばかり胸に据えたは、宵に着て寝た、緋の長襦袢に、葛木が姉の記
念の、あの人形を包んだのである。

ト片手ついたが、欄干に、雪の輝く美しい白い蛇の絡んだ俤。

「お怪我の無いよう……御機嫌よう。」

とはらりと落すと、袖で受けたが、さらりと音して、縮緬の緋のしぼは、鱗が鳴るか、
と地に這つて、潰島田の人形は二片三片花を散して、枝も折れず、柳の葉末に手に留ん
ぬ。

「清葉さん、——さようなら。」

カタリと一幅、黒雲の鎖したような雨戸が閉つて、……

——露地の細路、駒下駄で——

と心悲しい、が冴えた声。鈴を振るごとく、白銀の、あの光、あけの明星か、星に響く。

葛木は五体が窘んだ。

稻荷堂の、背裏から、もぞもぞと這出して、落ちた長襦袢に掛つて、両手に掴んだ、葛木を仰ぎ見て、夥多たび押頂いたのは赤熊である。

車夫の提灯が露地口を、薄黄色に覗くに引かれて、葛木はつかつかと出て、翻然と乗ると、楯を上げる、背に重量が掛つて、前へ突伏すがごとく、胸に抱いた人形の顔を熟と視た。

彗星

六十三

その翌年あくるとしの春である。日本橋三丁目の通の角で、電車の印を結んで、小児演技こどもしげいの忠臣義士を煙けむに巻いて、姿を消した旅僧が、胸に掛けた箱の中には、同じ島田の人形が入っていたのである。

生理学教室さんまい三昧の学士も、一年ばかりお孝に馴染なじんで、その仕込みで、ちよつと大高源吾もてあそぐらいは玩ぶことが出来たのである。

却説さて、葛木法師の旅僧は遠くも行かず、どこで電車を下りて迂廻まわりみちしたか、多時しばらくすると西河岸へ、船から上ったごとく飄然ひょうぜんとして頭あたまれて、延命地藏尊の御堂みでうに詣らでて礼拝いはいして、飲酒家さけのみの伯父さんに叱なられたような形で、あの賓頭廬びんずるの前に立つて、葉山繁山いはい繁はきが中に、分けのぼる峰の、月と花。清葉とお孝の名を記しるした納手拭おさめてぬぐいの、一つは白く、一つは青く、春風ながら秋の野に葛くずの裏葉ひるがえの翻ひるがえる、寂さびしき色に出いでて戦そぐを見つ、去るに忍しのびぬ風情であった。

茶を振舞った世話人の間に答えて、法ほつ体たいは去年の大晦日おおみそかからだ、と洒落しゃれでなく真顔で云うよう、

「いや、夜遁よにげ同然にわかほつしんな俄発心こころむ。心よりか形だけを代えました青道心でございます。面目こころもの無い男ですから笠は御免を蒙こうむります。……どこと申して行く処に当は無いので、法衣ころも

を着て草鞋わらじを穿くと、直ぐに両国から江戸を離れて、安房上総あわかずさを諸所経歴へめぐりました。……
 今日こんにちは、葉研堀を通つてこつちへ。——今度は日本橋を振出しに、徒歩かちで東海道に向い
 ますつもり。——以来は知らず、どこへ参つても、このあたりぐらい、名所古蹟はござい
 ませんな。」

と云つて、ほろりとして、手を挙げて茶盆を頂いて出て行く。

人足繁き夕暮の河岸を、影のように、すたすたと抜けて、それからなぞえに橋になる、
 向つて取附とつきの袂たもとの、一石餅とある浅黄染のれんの暖簾くぐを潜つて、土間の縁台の薄暗い処で、折
 敷装しきもりの赤飯を一盆だけ。

その癖、新しい銀貨で釣銭を取つて一石橋へ出た。もう日が暮れたのである。
 半ば渡つた処、御城に向いた、欄干に、松を遠く、船を近くたすで、凭掛もたれかつたが、
 熟じつとして頼杖ゆききを支いて、人の往来ゆききも世を隔てたごとく、我を忘れた体であつた。

「さようなら。」

と一言掛けて、発奮はずむばかりに身を翻ひるがえすと、そこへ、ズンと来た電車が一輛だい。目前めさきへカ
 ラカラと打ぶつかりそうなのに、あとじさりに圧おされ、圧おされ、煽あおられ気味に蹠踉よろ々々とな
 った途端である。

「火事だ、火事だ。」

把手ハンドルを控えて、反身そりみになった車掌が言った。その帽の、庇ひさしも顔も真赤まっかである。

黒い水の、箱を溢あふるるばかり、乗客は総立ちに硝子がらすに犇ひしめく。

驚いて法師が、笠に手を掛け、振返ると、亀甲形きっこうがたに空を劃くぎった都会みやこを装う、鎧よろいのごと

き屋根を貫いて、檜物町の空に※と立つ、偉大なる彗星ほうきぼしのごとき火の柱が上つて、倒さかしまに迸ほとばしる。

「滝の家だい。」

その見当とは言わず、……ほとんど直覚的に、清葉の家を、耳の傍はたで叫んで、——前刻さつきから橋の際に腰を板に附しやがいて蹲しゃがんでいた、土方体の大男の、電車も橋も搔退かきのけるがごとく、両手を振つて駆出したのがある。

旅僧は、その声を、聞いたようだ、と思つたらう。しかしその時、熊の皮は着ていなか
った。

これは、清葉とお千世が、この日、稲葉家へ入ろうとして、その露地から出て、二人を見
て逃げるのを知つた、のツそり頬被ほおかぶりをした昼の影法師と同じ風体の男である。

綺麗な花

六十四

「あぶね
危えッ！」

危え、と蔵の屋根から、結束した消防夫が一人、棟はずれに乗出すようにして、四番組の纏を片手に絶叫する。

その下に、前と後を、おなじ消防夫に遮られつつ、口紅の色も白きまで顔色をかえながら、かかげた片褌、跣足のまま、宙へ乗って、前へ出ようと身をあせるのは清葉であった。

「放して、放して。」

この土蔵一つ、細い横町の表から引込んだ処に、不思議なばかり、白磨の千本格子がびたりと閉つて、寐静つたように音もしないで、ただ軒に掛けた滝の家の磨硝子の燈ばかり、瓦斯の音が轟々と、物凄い音を立てた。

「蔵は大丈夫だ。姉さん、危い。」とまた屋根から呼ばれる。

取巻く、人数が、

「退いた、退いた、退いた。」と叫ぶ。

薄藤色の出の衣服の、肩を揉んで身をあせる、火の粉は紅梅のごとく衣紋を切つて散るのである。

「蔵じゃない、蔵の事なんかじゃないんだよ。」

「箆筒は出したい。出来るだけ出した。」

「内の人たち。」と、清葉はもう声が涸れる。

「乳母は、湯に入っていた処だ、裸体で遁げた。」

「娘さんも小婢も遁がした。下女どんは一所に手伝った。」

「何しろ火が疾い。しかも火元が裏家の二階だ。」

と口々にがやがや言う。

「その二階におつかさんが。」

「何、阿母が。」

「坊やが、坊やが。放して、放して。」

と云うと、思わず押えたのが手を放す。

「了しまつた。」と屋根で喚わめく。

二人ばかりドンと出て格子戸に立ったのは、飛込もうとしたのではない。血迷うばかりの、清葉を遮つて、突戻すためであつた。

清葉は、向うから突戻されてよろよると、退しきると、唧筒ポンプの護謨管ごむかんに裳もすそを取られてぱつたり膝を、その消えそうな雪の頸うなじへ、火の粉がばらばらとかかるので、一人が水びたしの半は纏んでんを脱いで掛けた。

この折から、ここの横町を河岸へ出る、角の電信柱の根を攀よじて、そこに積んだ材木の上へ、すつくと立つて頭あたまれた、旅僧の檜木笠ひのきがさは、両側の屋根より高く、小山のごとき松明の炎に照されたが、群集の肩を踏まないでは、水管の通つた他に、一足も踏込む隙間は無かつたのである。

「筒先ウ向けろ。」

「手向たむけの水だい。」

そこに絶望の声を放つと、二ふた条すじばかり、筒先を格子に向けた。

どどどツと鳴る音と共に、軒の瓦斯は、人魂のごとく屋根へ飛ぶ。格子が前へどんと倒れる。地獄の口の開あいた中から、水と炎の渦巻を浴びて、黒くろ煙けむりを空脛からすねに踏んで火の

粉を泳いで、背には清葉の繼ましい母を、胸には捨てた（坊や。）の我わが児を、大肌脱おおはだぬぎの胴中へ、お孝が……葛木に人形を包んで投げたを拾って持った、緋の長襦袢を縄からげにぐい、と結んで、

「おう！」

とばかり呻うなって出たのは赤熊である。

「助かった。」

「助けた。」

錦の帯は煙を払って、竜のごとく素直まっすぐに立つ。母はその手に抱寄せられた。

「坊や。」

と清葉が手を伸した時、炎なの流ながれは格子戸の倒れた穴を、堰せきを切った堤のごとく、九ツの頭かしらを立てて漲みなぎり流るる。

「まあ、綺麗に花が咲いた事。」

一町ひとまち、中を置いた稲葉家の二階てすりの欄たてに、お孝は、段鹿子だんかのこの麻の葉の、膝もしどけなく頼杖たのやせして、宵暗よいやみの顔ほの白う、柳涼しく、この火の手を視ながめていた。……

振向く処を

六十五

「この勢だ、この勢だ。」

人雪顔なだれ打つ中を、まるで夢中で、

「一人助けただ。この勢なら殺せるだ。お孝、畜生。」

眼まなこは火のごとく血走りながら、厚い唇は泥のごとく緊しまりなく緩ゆるんで、ニタニタと笑いながら、足許あしもとふらふらと虚空を睨にらんで、夜具包み背しよ負つて、ト転倒ころがる女を踏ふん踏またぎ、硝子戸がらすどを立てて飛ぶ男を突飛ばして、ばたばたと破つて通る。

「この勢だ、殺せるだ。」

火の盛なる頃なれば、大おお膚はだ脱ぬぎを誰一人目たれに留とめる者も無く、のさのさと臺がまの歩あゆ行みに一町隣りの元大工町へ、ずつと入ると、火の番小屋が、あつけに取られた体に口を開けてポカンとして、散敷いた桜の路を、人の影は流るるよう。……半鐘の響、太鼓の音、ぱっぱつと燃ゆる音、べらべらと煙の響、もの音ばかり凄すさまじく、両側の家はただ、黒い墓のご

とく、寂しいまでにひそまり返つて、ただ処々、廂に真赤な影は、そこへ火を呼ぶかと凄いのである。

洪と鳴つて新しい火の手が上ると、魔が知らすような激しい人声。わつと喚いてこの町も危くなつたが、片側の二階からドシドシ投出す、衣類、調度。

ト諸君はお竹蔵と云うのを御存じの筈と思う。あの屋根から、誰が投げて、どのがらくたに交つたか、二尺ばかりの蟬鞘が一口。蛇のごとく空に躍つて、ちようどそこへ来た、赤熊の額を尾でたたいて、ハタと落ちた。

発奮で打つたか。前刻瀆の家の二階で受けた怪我の、気の勢で留まっていたか。この時、額から垂々と血が流れたが、それには構わないで、ほとんど本能的に、胸へ抱いた年弱の三歳の子を両手で抱えた。

が、慌しく刀を拾うと、何を思う隙も無さそうに、ギラリと冷かに抜いて、鞘を棄てて提げたのである。

そのまま襲入つた、向うの露地口には、八九人人立したが、真中をずつと通るのに、誰も咎めたものが無い。

柳に片手を、柄下りに、抜刀を刃尖上りに背に隠して、腰をずいと伸して、木戸口

から格子を透かすと、ちようど梯子段を錦絵の抜出したように下りて、今、長火鉢の処に背後向きに、すつと立った、段染の麻の葉鹿の子の長襦袢ばかりの姿がある。

がらりと開けると、ずかずかと入るが否や、

「畜生！」

振向く処を一刃、向うづきに、グサと突いたが脇腹で、アツとほとんど無意識に手で疵を抑えざまに、弱腰を横に落す処を、引なぐりにもう一刀、肩さきをかツと当てた、が、それは引かき疵に過ぎなかつた。刃物の鍛は生鉄で、刃は一度で、中じやくれに曲つたのである。

「姉さん、——」

虫が知らしたか、もう一度、

「お爺さん。」と呼ぶと齊しく、立つて逃げもあえず、真白な腕をあわれ、嬰兒のよう
うに虚空に投げて、身を悶えたのは、お千世ではないか。

赤熊は今日も附狙つて、清葉が下に着た段鹿子を目的に刃を当てた。

このお千世の着ていたのは、しかしそれではなく、……清葉が自分の持して寄越した
のであることを、ここで言いたい。

「ちよつと、お茶を頂きに。」――

清葉の眉の上つたのを見て、茶の缶をたたく叔母なるものは、香煎にばなでもてなすことも出
来ないで、陰気な茶の間が白けたのであつたが。

あわせかがみ

六十六

「これは、いらつしやいませ。」

そこへ、お千世に介抱されつつ、二階から下りて来たお孝が、儀式正しく、ぴたりと手
を支ついて挨拶をした。肩の位に、大客を恐れない品格が備わって、取乱した人とは思われ
なかつた、が、清葉も改めて会釈をする時、それは誰にするのやら分らないことを悟つた。

「いらつしやいませ。」

今度は澄まして在らぬ方かたの、店を向いて手を支いたのである。

「お孝さん、分りますか。」

清葉は声を曇らしながら、二階で弄もてあそんで欄干越てすり、柳がぐれに落したのを、袖で受けて膝に持った、銀地の舞扇を開いて立つて、長火鉢の向う正面に、縁起棚の前にきらりと翳かざすと、お孝が、肩を落して、仰向いて見つづ。

「お月様でしょう。——大事のお月様雲めがかくす。——とても隠すなら金屏風で、」
と唄うかと思えば、

「おお、寒い、おお寒い、もう寝ようよ。」と身ぶるいをする。

お千世が、その膝を抱くように附添ついでつて、はだけて、乳ちのすくお孝の襟を、搔かきあ合せ、搔かきあ合せするのを見て、清葉は座にと着きあえず、扇子おうぎで顔を隠して泣いた。

背後うしろへ廻まわつて、肩を抱いて、

「お大事になさいよ、静しずかにお寝やすみなさいまし、お孝さん、ちよいとお千世さんを借ります

よ。——お座敷にして。」

と顧みて、あとは阿婆おばあに云った。

「から、意気地も、だらしも有りませんやね、我ままの罰むちだ、業ごうだ。」

と時々刻つぶやんで呟つぶやいた阿婆が、お座敷と聞くと笑えみかたむ傾むけ、

「そらよ、お千世や、天から降ふつたような口が掛かつた。さあ、着換かえて、」

直ぐに連れて出ると心得た阿婆が、他には無い、お孝の乱心にゆかしがつて着ていた、その段鹿子を脱がせようと、お千世が遮る手を払って、いきなりお孝の帯に手を掛けて、かなぐり取ろうとしたのである。

「叔母さん、まあ、」

とお千世はおろおろ。……

「失礼をいたします。」と、何の事やらまた慇懃に、お孝が、清葉に手を支いたのは涙ならずや。

「これが可厭なら、よく稼いで、可い旦那を取つてな、貴女方を、」

と、清葉を頤、

「見習つて幾枚でも拵えろ、そこを退かぬかい。」と突退ける。

「お待ちなさいまし。」

凜と留めて、

「切火を打つて、座敷へ出ます、芸者の衣物を着せるには作法があるんです。……お素人方には分りません、手が違ふと怪我をします。貴方、お控えなさいまし。——千世ちゃん、今（箱さん。）を寄越すから、着換えないでいらつしやいよ。姉さんを気をつけて。お孝

さん、」

何も知らず横を向いたお孝に、端正ちやんと手を支いて、

「さようなら。——二人で、一度あわせものをしましうね。」

と目を手巾ハンケチで押えて帰った。……

襦袢はわざと、膚馴はたなれたけれど、同一おなじその段鹿子を、別に一組、縞物しまものだったが対ついに揃えて、それは小女こおんなが定紋の藤の葉の風呂敷で届けて来た。

箱屋が来て、薄べりに、紅裏香におう、衣紋を揃えて、長襦袢で立った、お千世のうしろへ、と構えた時が、摺半鐘すりばんで。

「木の臭においがしますぜ、近い。」

と云うと、箱三の喜平はひよいと一飛。阿婆おばあも続いて駆出した。お千世の斬られた時、衣物きものはそこにそのままである。

振袖

六十七

「違った、お千世だい。」

と、やつぱりニタニタと笑いながら、目を据えて階子段を見上げた時。……ああ、一足遅い。

お千世の祖父の甚平が台所口から草鞋穿の土足である。——これが玄関口から入ったら、あるいはこうはなかつたろう。——爺さんは、当夜植木店のお薬師様の縁日に出た序に、孫が好きだ、と草餅の風呂敷包を首に背負つて、病中ながらかねて抱主のお孝が好いた、雛芥子の早咲、念入に土鉢ながら育てたのを丁寧にも両手に抱いて、来て、途中頭の上の火事に慌てながら、驚破や見舞、と駆込んで、台所口へ廻つたのが、赤熊と一足違い。

泥鉢は一堪りもなく踏潰された。あたかも甚平の魂のごとくに挫けて、真紅の雛芥子は処女の血のごとく、めらめらと颯と散る。

熊は山へ帰る体に、のさのさと格子を出た。

ト、敵を追つて捕えよう擬勢も無く、お千世を抱いて、爺さんの腰を抜いた、その時、山鳥の翼を弓に番えて射るごとく、颯と裳を曳いて、お孝が矢のように二階を下りると思

うと、

「熊の蛆め、畜生。」と追継おいすがつて衝と露地を出た。

が、矢玉と馳はせちが違い折かさなる、人混雑ひとごみの町へ出る、と何しに来たか忘れたらしく、ここに降かかる雨のごとき火の粉の中。袖でうけつつ、手で招きつつ、

「花が散るよ、散るよ。」

と蹴出しの浅黄を踏ふみくぐみ、その紅を捌くれないさばきながら、ずるずると着衣きものを曳いて、

「おお、冷い、おお、冷い。……雪やこんこ、霰あられやこんこ。……おお綺麗だ。花が散るよ、花が散るよ。」

仲通の小紅屋の小僧は、張子の木兎みみずくのごとく、目を光らして一すくみになった。

火の影ならず、血だらけの抜刀を提ひっさげた、半裸体の大漢おおおのこが、途惑とまどいした幟のぼりの絵に似て、店頭みせさきへすつくと立つと、会釈も無く、持った白刃しろはを取直して、切尖きつさきで、ずぶりとそこにあつた林檎を突刺し、敵将の首こうべを挙げたるごとく、ずい、と掲げて、風車かざぐるまでも廻す気か、肌につけた小児しょうにの上で、くるりくるりとかざして見せたが、

「あはは。」と笑うと、ドシンと縁台へ腰を掛ける、と風に落ちて来る燃えさしが人よりも多い火の下の店頭みせさきで、澄まして林檎の皮を剥むきはじめた。

小僧は土間の隅にさながらのからくり。お世辞ものの女房が居たらば何と云おう。それは見えぬ。

「坊主、咽喉のどが乾いたろうで、水のかわりに、好すきなものを遣るぞ。おお、女房おつかに肖そっくり如くだ
い。」

ニヤニヤとまた笑ったが、胡きゅうり瓜りの化けたらしい曲った刀が、剥きづらかったか、あわれ血迷つて、足で白刃を、土間へ圧おしあ当あて踏ふみ延のびばして、反そりを直して、瞳に照らして、持直す。目の前へ、すつと来て立つたのはお孝である。

「刀をお貸し。」

黙つて袖口を、なぞえに出した手に、はつと、女神の命に従さまう状に、赤熊は黙つてその刀を渡した。

「おお、嬉しい、剃かみそり刀一挺持たせなかつた。」

と、手遊物おもちゃのように二つ三つ、睫まつげを放して、ひらひらと振つた。

まなじり
眦まなじりを返す、と乱るる黒髪。

「覚悟をおし。」と、澄ひとことまして一言。

何か言いそうにした口の、ただまたニヤニヤとなつて、大おおきな涎よだれの滴たらたら々と垂るる中へ、

「葛木……更めてお目にかかります。……見苦しくなく支度をさせます。この女の内までお見免みのがしが願いたい。」

「諸君。」

信八郎氏は言下に云った。

「私わたくしが責せめを負います。」

警官は二隊に分れた。

お孝は法衣ころもの葛木に手を曳かれて、静々と火事場を通った。裂けた袂たもとも、さながら振袖を着たごとくであった。

火の番の曲り角で、坊やに憧れて来た清葉に逢った。

「ああ、お地藏様。」

夢かとはばかり、旅僧の手から、坊やを抱取った清葉は、一度、継母とともに立退たちひいて出直したので、凜りり々しく腰帯で端折はしよっていた。

お孝は、離さじ、とただ黙って葛木に縋る。

「や、ここにも一人。」

警官は驚いた。露地の出口の溝どぶの中、さして深くもない中に、横倒れに陥はまって死んでい

たのは茶缶ちやかん婆ばあで、胸むねに突つ疵きずがある。さては赤熊あかぐまが片附けた。

これが為に、護送の警官の足が留とどつて、お孝は旅僧りくそうと二人、可な懐つかしそうに、葉はが差さ覗のぞく柳もの下の我家うちに帰る。

清葉の途中で立たち停どまったのを見て、お孝が判は然つきりした声で云った。

「姉さん、遺言を聞いて下さい。」

「はい。」

と答えた。二人は柳の軒燈のきんとうに、清葉はその時、羽目について暗く立たった。

「お孝さん、蔵も今しがた落ちました。」

と云つて、實際目ぬりが届かないで、助たすつたつもりの蔵、中には能衣装のうぎやうまでであると伝つえた。が開ひいたのであつた。

坊やを胸むねに、すつと出でて、

「身に代かえまして、清葉が、貴女あなたになりかわつて。」

その時三人が皆泣ないた。

「お千世さんは、」

「ああ、お千世。」

余りの事に呆果てて、三人は茫然とした。中にも旅僧は何をトツチたか、膝で這廻つて、雛芥子の散つた花片の、煽あおりで動くのを、美しい魂を散らすまいとか、胸の箱へ、拾い込み拾い込みしたのである。

信八郎氏が先ず一人で入つて来た。

お孝は胸いに抱いだいて仰向けに接吻キッスしていた、自分のよりは色のまだ濡々と紅くれないな、お千世の唇を放して、

「お湯を頂きましたでも可ようござんすか、旦那。」

と信八郎氏に手をついて言う。

渠かれは挙手の礼を返して、

「御随意に、盃をなすつて可い。」

茶棚うしろに背後向きになつた肩を拊うつばかり、ハタとそこへ、縁起棚から輝いて落ちたのは、清葉さきが、前まへに翳かざしたままそこにさし置いた舞扇で。

ふとここに心付いたらしく、立つて頂いて、同じ縁起棚から取つた小さな紙包み、(同妻)の手ハンケチ巾の端を、湯呑に落して素湯さゆを注ついだ、が、なにも言わず、かぶりと飲むと、茶碗酒が得意の意気や、吻ほっと小さな息をした。その中に黒子ほくろを抜いた時の硝酸が入つてい

た。

「姉さん、遺言を聞いて下さいな。」

「生命いのちに掛けます、お孝さん。」

その時、舞扇を開いた面は、銀しろがねよりも白ずんだ。

お千世は玉の緒を繫つなぎとめた。

葛木が、生理学教室に帰ったのは言うまでもない。留学して当時独逸にあり。

滝の家は、建つれば建てられた家を、わざと稲葉家のあとに引移った。一家の美人十三人。

清葉が盃を挙げて唄う、あれ聞け横笛を。

——露地の細路駒下駄で——

大正三（一九一四）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成12」ちくま文庫、筑摩書房

1997（平成9）年1月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日第1刷発行

初出：「日本橋」千章館

1914（大正3）年9月

※「千世」に対するルビの「ちせ」と「ちい」、
「三昧」に対するルビの「さんまい」と
「がんまい」の混在は、底本通りです。

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

※編者による注釈は削除しました。

入力：門田裕志

校正：酔いどれ狸

2015年10月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本橋

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>